

〇〇との妄想～

なお丸(＃)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この小説は100%妄想でできています、好きなキャラとのデートや日常を妄想しませんか？ただし、妄想のため一部おかしい場合もあります、またキャラの崩壊の恐れがあります、また展開が変わったりもしますのでご了承ください

主人公は読者様が自己投影できるよう表記は〇〇と表記させていただきます

※本作品の他サイトへの無断転載はご遠慮願います

リクエストについてですかリクエストの前に活動報告のリクエストについてのほう
を確認しますようお願いします

目次

友希那さんとのデート妄想 | 1

まりなさんとの妄想 | 7

あこちゃんと自宅デート | 14

バンドリの世界に行く方法 | (微ホラー | 22

注意 | 22

日菜ちゃん | 34

友希那さんが絶対言わないだろうセリフ | 34

| (キャラ崩壊注意) | 47

休憩時間に Roselia のメンバーと | 55

| 55

彩ちゃんと秘密のデート | 62

笑顔への第一歩 | 73

小さき魔王からの優しい看病 | 85

千聖さんと秘密の時間 | 102

友希那さんとデート | 109

友希那さんご乱心 (キャラ崩壊注意) | 117

117

ひまりちゃんに秘密の | 124

まりなさんと温泉旅行 | 130

蘭ちゃんからの | 145

黒服さん | 152

練習後は二人で | 162

姉妹の取り合い | 169

恋物語は突然に | 178

いつかこの想いをあなたに | 189

伝えたいこの想いを	197
隣子ちゃんと特訓	214
モカちゃんとパンパーティー	225
香澄ちゃんと星空鑑賞	232
年の差なんて関係ない!	239
ツンデレ少女とミニデート	251
257	
まりなさんご乱心(キャラ崩壊注意)	
パン屋の少女とのんびりと	263
結成チョココロネ同盟	269
大好きて気持ちをあなたに	276
目が覚めたら突然	282
仕事中は我慢	288

イヴちゃんと楽しいトーク	294
王子さまとお花見	300
羽沢珈琲店でわいわいと	305
巴ちゃんとラーメン屋デート	317
王子さまからのアドバイス	326
花音ちゃんを後ろに乗せて	332
スランプからの脱出	338
令和もよろしく!	347
季節は冬へ	357
二人の時間	363
370	
紗夜さんご乱心(キャラ崩壊注意)	
香澄ちゃんと冬キャンプ	376

王子さまと過ごすある冬の昼下がり

396

美咲ちゃんと遊園地

402

友希那さんと猛特訓

415

たえちゃんと過ごす昼下がり

429

一周年記念回！友希那さんとの新婚生活

く
436

チュチュ様登場！

450

町はクリスマス一色

457

今日は楽しいクリスマス！

466

除夜の鐘をききながらあなたと

482

C i R C L E 外カフェの特製タピオカミ

ルクテイーとスペシャルミートソースパ

スタ

488

パレオちゃんとお話し

493

早とちりに気をつけましょう

499

巴ちゃんとカラオケデート

505

まりなさんとの昼下がり

514

つぐみちゃんと過ごすカフェでの時間

521

今日はバレンタイン♪

527

モカちゃんとまりなさんと

550

春の陽気のカフェで

556

花音ちゃんとデート

563

宇田川姉妹と過ごす昼下がり

570

彩ちゃんと千聖ちゃんとお家デート

膝枕シリーズ日菜ちゃんく	590
季節は冬から春へ	596
耳かきは定期的に	603
この気持ちはなに？	609
エイプリルフル特別回	617
思い出	628
桜の木の下で	635
リサ姉と春キャンプく	641
膝枕シリーズく彩ちゃんの膝枕	653
ねこLOVE同盟	661
マスキさんとツーリング	672
季節は春から夏へ	679

まりなさんとサマーキャンプ	686
季節は夏から秋へく	692
季節の変わり目は風邪にご用心	700
キャンプ地から電話で	710
チュチュちゃんとかちちゃんと	720
クリスマスケーキ選びは結構楽しいよね	729
季節は秋から冬へく	737
クリスマスすぎるとあつという間だよね	743
夢の回想く前編	752
夢の回想く後編	759
大晦日く一年を振り返って	782

年が明けてく

788

マスキングとケーキ作り

796

紗夜さんとギター演奏

805

まりなさんの膝枕

814

彩ちゃんからのバレンタインチョコ

823

近づく春く去りゆく冬

830

季節は冬から春へく

837

友希那さんとのデート妄想

ブオオン！ブオオン！…ブロロロ

〇〇「お待たせ♪」

友希那「待ってないわ、さあいきましょう」ガチャ…ボタン

〇〇「何処に行く？」

友希那「とりあえず、お腹空いたからお昼にしましょう」

〇〇「オツケー♪じゃあ出発？」ブロロロ道中

友希那「しかし、あなた何時も楽しそうに運転してるわね」

〇〇「そりゃあ大好きな車に大好きな人が乗ってるんだ？楽しいに決まってるよ♪」

友希那「そう……／＼」

〇〇「さあ……お店はここでいいかな？」

友希那「え、ええ」

〇〇「了解」カタン……カタン

その後食事が終わり

友希那「ごちそうさま、でもよかったの？私の分まで」

〇〇「もちろんさ♪さあいこう……とりあえずこの後はショッピングモールにでもいこうか」

友希那「そうね……そうだモールにいたら雑貨屋にいききたいのだけど」

○○「おk雑貨屋だね、せいじゃあ出発進行〜」ブロロロ…道中〜

○○「〜♪」(ブラシヤを口ずさんでる)

友希那「あら…それ私たちの曲ね」

○○「ん？おう、この曲は一番のお気に入りでき出勤途中の時も口ずさんでるんだ…」

友希那「そう他はどんな曲が好きなの？」

○○「そうだな…軌跡とか好きかな、特にありがとう〜からの部分は一番のお気に入り♪」

友希那「そう…ありがとう」

○○「さ、そろそろ着くな駐車場空いてるかな〜？近いところ」駐車場〜

○○「ふう、なんとか停めれたな」

友希那「近いところが空いたのはよかったわね」

○○「だな、さあ入ろう」ガチャ…バン

友希那「そうね入りましょう」ガチャ…バンモール内へ

○○「混んでるなぐれないよう手を繋ごうか」

友希那「そ、そうね…○○がどうしてももっていうなら／＼」

○○「友希那と手繋ぎたいな、いこう？」ギユ

友希那「あ／＼…（○○の手暖かいわね）」

○○「さて…雑貨屋は」

友希那「雑貨屋は二階よ」

○○「じゃあエスカレーターで向かおうエスカレーターは」

友希那「エスカレーターはこつちよ」

○○「お、了解、じゃあ二階へゴー？」二階へ

○○「さて…雑貨屋についたけど、なにが欲しい？」

友希那「にゃーちゃんのクツションが欲しいわ」

○○「よし…じゃあそこに向かおう」

友希那「ええ…」

○○「さて…あったあった、どれにしようか」

友希那「私は…これがいいわね、○○は？」

○○「そうだなあ、友希那がもってるクッションの色違いにしようかな♪」

友希那「わかったわ…レジにいきましょう」

会計後

○○「いいものが買えたなく？この後はどうする？」

友希那「そうね…○○の家にいきたいわ」

○○「僕の家か？わかった」

友希那「この後は二人でゆっくりしましょう」

まりなさんとの妄想

サークル閉店後

〇〇「まりなさん、後片付け終わりましたよ」

まりな「お疲れさま、それじゃあ見回りして今日は終わりにしようか」

〇〇「はい!!」

見回り中

〇〇「今日もロゼリアの演奏凄かったですね」

まりな「そうだね、でも〇〇くんも歌は上手いと思うよ……それよりも、もう私たちだけなんだし、敬語はいいとおもうよ？」

〇〇「はは、ありがとうございます？うーん……そうだね？」

まりな「そうそう♪…さ、異常もないし戻ろうか」

○○「だね？うーん、今日も疲れた？」まりな「お疲れさま？」

○○「まりなに言ってもらえると、疲れも吹き飛ぶよ？じゃあ帰ろうか」
まりな「うん…帰りにコンビニで飲み物買っていこ♪」

○○「だな、じゃあレッツゴー♪」

バタン…カチャカチャ…ガチャン
帰り道く

ブオオオ…プシュ…ブオオオ

○○「お腹すいたし、ついでだからなにか買おうか」

まりな「もう夜食は太りすいんだよ？」

〇〇「大丈夫、大丈夫？食べた後に運動すればいいんだし…たつぷりとさ」

まりな「しよがないなあ、食べ過ぎは駄目だよ？」

〇〇「わかつてる♪さ、入ろう」ブオオオ…キイ

まりな「なにがあるかな」ガチャ…バン

〇〇「時間が時間だからなく？まあ残り物にはなんとやらさ」ガチャ…バン店内

〇〇「うーん、これにしようかな」

まりな「決まった？」

〇〇「おう？フライドチキンバーガーとメロンパンにするよ」

まりな「また凄い組み合わせだね？私はメロンパンとコーヒにしようかな、飲み物は何にする？」

〇〇「そうだなあ……まりなと同じコーヒにしようかな、よしじゃあレジにいこう」

まりな「じゃあいこう？」 会計後々自宅

〇〇「ただいま〜？」

まりな「ただいま〜？〇〇くん……ただいまの」

〇〇「……ただいま今日もお互いにお疲れさま！」 チュ

まりな「お疲れさま？さ、買ってきたやつ食べよう」

〇〇「だな、よし……それじゃあ」

「いただきます？」

食事中心

まりな「食べ終わったらどうする？」

〇〇「そうだなあ…運動といきたいとこだけど、明日もあるし今日は食べ終わったからお風呂入って寝るよ」

まりな「そっか、じゃあ明後日はサークル休みだし明日の夜はたっぷり運動しないかね♪」

〇〇「はは？お手柔らかに？…ふうございそうさま、よしじゃあお風呂入ってくる」

まりな「了解、お風呂の中では寝ちや駄目だよ？」

〇〇「シャワーだけだから寝れないよ？」（お風呂場へ）〇〇入浴中

〇〇「はあく疲れが流れていく…明日はしっかりお風呂湧かして疲れを取らないとな」

一方その頃まりなさんは

まりな「私も○○くんが上がったたら入ろうかな…しかし異性のお風呂の音で何でドキドキするんだろ／＼」再び浴場へ

○○「はあ…よしからでも洗い終わったしでるか、明日はしっかりと運動して今日のカロリーを消費しないと…よし」ガラ

まりな「あ、上がったみたいだねじゃあ私も入ってくるね」

○○「了解、先に寝室いってるよ」

まりな「了解、じゃあ後でね♪」ガラ…パタン

まりな入浴中へ○○寝室にて待機

○○「…まりながお風呂に入ってる、異性のお風呂の音でのは、どうもドキドキするなあ？…ええい？変な事は考えないようしよう？」カット！

ガラ

まりな「ふうい湯だったな、○○くんお待たせ♪」

〇〇「うーん湯上がりのまりなも美しい、理性が飛びそうだ」

まりな「明日になったら運動出来るんだから今日はおあずけ」

〇〇「へーい、じゃあまりな」

まりな「うん、おやすみ」

「まりな（〇〇くん）」チュ

あこちゃんとうちと自宅デート

宇田川家くピンポーン

あこ「あ、○○さんいらっしやい！今日は来てくれてありがとう？さ、上がって上がって」

「お、お邪魔します」

巴「あ…サークルの、今日は来てくれてありがとうな？あこったらさ、昨日は全然眠れないって、いつて」

あこ「お姉ちゃん？／＼それは言わないでっていったじゃん？」

巴「あつははは、まあ今日はゆっくりしていつてくれ…なんなら私、今から出掛けようか」

あこ「もう？変な気はまわさなくていいから？○○さん私の部屋にいかが？」

○○「え…うん？では宇田川さん、おじやまします？」

巴「ようこそ？あと私は巴でいいよ、なんならお義姉さんでも」

あこ「お姉ちゃんはあつちいってて？」

巴「はいはい♪」

あこ部屋へ

ガチャ…キイ…バタン

あこ「さて、あらためて…ふふふ…旅人よようこそわらわの城へ、今日はこの…えーと、この城の主であるわらわが盛大にもてなしてあげようぞ」

○○「ありがとうございます？偉大なるあこ様のもてなしてを受けられるとは、この○○人生で一番の至福にございます」

あこ「くるしゅうない、今日はゆっくりとくつろいでいかれよ」

〇〇「ありがとう?…」

あこ「でも…今日は本当に来てくれてありがとう?あこ、自宅デートで初めてで今日は凄く楽しみにしてたんです♪」

〇〇「そっか、じゃあ今日はいっぱい楽しもうか?」

あこ「はい?」一方リビングでは

巴「しかし、あこがなあ…でも年のさ離れすぎでないか?いや、あこも年頃だから時期的にはおかしくはないだろう、でも相手はサークルのスタッフさんであり…あこはまだ高校生になつたばかりだぞ?…うーん、考えても仕方ない幸いスタッフさんは私も知ってる人だし間違いは起こらないはずだ?…さて飲み物でも持つてくか」

場所は戻つて、あこ部屋へ

あこ「そうだ、あこマツサージが出来るんですよ？」

「そうなの？」

あこ「はい？お姉ちゃんや、りんりんに上手だねてよく言われるんです…○○さんもどうですか？」

○○「じゃあお願いしようかな？」

あこ「はい？ふふふ…わらわのこの…えーと…右腕に宿りしバーンとしたら力、そなたにもみせてあげよう」

あこ部屋前の廊下へ

巴「さてさて、二人は仲良くしてるのかな…ん？なんか声が」

あこ「ふふふ…どうですか？○○さん」

「うう…すごいね、どこでこんなテクを身に付けたの？」

あこ「いっぱい練習したんですよ、〇〇さんに喜んでほしくて…こんなのはどう？」

「あ？？あ？？それやばい？…？？おおおお？」

あこ「ふふふ…わらわに宿りし右腕の…暗黒の力はまだまだ序の口ぞ…」

廊下へ

巴「な／＼な／＼にしてるんだ？…あれ？」

あこ「なにつてマッサージだよ？…私がマッサージしようかって言ったら〇〇さんが
ぜひつて、てお姉ちゃん顔が赤いけどどうしたの？」

巴「いや？なんでもないんだ？あ…これ飲み物？ここに置いてくから、それじゃ？／

／」
ボタン…ボタン
ボタン

あこ「お姉ちゃん、どうしたんだろ」

「あー…うん、あまり追及しないほうがいいと思うよ」

あこ「？」その後も時間は過ぎていき〜

「そっか、じゃあ燐子ちゃんは、あこちゃんの一番の親友なんだね」

あこ「はい？りんりんはあこの一番の親友なんです♪」

「その気持ち、大切にねそうすれば、燐子ちゃんとはずっと友達でいられるから…と、もうこんな時間か、そろそろ帰らなきゃ」

あこ「えー…もつと〇〇さんと話したいです？ねえ〇〇さん？」

「そうはいつでもなあ、明日も仕事があるし？」

あこ「うー？そっだ、○○さんが泊まっつてけばいいんだ？」

「いやいや？さすがにそれは出来ないよ……」

あこ「お姉ちゃんや、お母さんたちには私からいつておくから、お願い○○さん？」

「うーん？」

巴「あこ、○○さんを困らせるんじゃない…それに○○さんにだって用事があるかもしれないだろ……それにあまりワガママ言うとお○○さんに嫌われちゃうかも知れないぞっ？」

あこ「ええ？それは嫌だ？…じゃあ○○さん次、次あこの家に来たときは泊まっつてくれますか？」

「もちろんさ？じゃあ、今日はもういくね、宇田川さんおじやしました？」

巴「いやいや、また何時でもきてくれよな？あこも喜ぶからさ」

「はい？是非、ではおじやましました？…あこちゃんまたね」

あこ「うん、また来てね…もし約束破ったらわらわの…うーんとババーンとした力をお見舞いしちゃうから」

「おっと？じゃあ約束」

あこ「はい？約束です？」ギユ

「それじゃあ…おじやましました？」ガチャ…バタン

バンドリの世界に行く方法（微ホラー注意）

不思議の話しくある方法を行うと、バンドリの世界に行く事が出来る…ただしそれは片道キップ、元の世界に帰れる保証はなし、試されるときはよく考えてから試されよ

○○「か…本当に行けるのかね…ま、おそらくよくある都市伝説の一つだろうな…さてゲーセンでもいくか」道中

○○「〜♪」（熱色を口ずさんでる）

『ね…あれから連絡とれないって本当？』

『本当みたい、ちよつと試してくるって、メール以来…返信がないんだもん』

『脅かそうとしてるだけじゃないの』

『でもラインの既読もないんだよ？それに…オンラインのアカウントみただけど、あれ以来ログインすらしてないし』

『…マジ？』

○○○「……おいおい穏やかじゃないな、まさか本当にあの世界に？……いやいやいや？、そんなバカな？ありえないだろ？、そういえば方法で同やるんだ……バンドリ…世界行き方」タツ…タタタタツン

バンドリの世界への行き方

○○○「これか…まあ？ちよつと興味本意で見てもようかな…別に怖くなんかないし？」

ようこそ 次元の狭間へ

○○「ひ?…ビツクリしなあ?もう?」

○○「えーと…ここは行きたい世界への行き方を知ることができません、貴女が希望する世界にお連れしましょうか…じゃあバンドリの世界に行くには?と」

………——パッ

この世界に行く方法はいたって簡単です、まずは鏡を用意し、用意ができたなら次に深夜の2時にバンドリを起動させます、起動させたら推しのフィギュアを持つか膝の上のせます、そして鏡をかざして、画面をタップ

すると強い眠気に襲われます…そして目が覚めたとき

○○「そこは元いた世界ではなく、あなたが希望した世界です…か、じゃあ帰る方法は」

バンドリ世界から 帰る方法

〇〇「さて…検索結果は」

一件もヒットしませんでした〇〇「…検索結果は無し、やっぱりただの都市伝説だよな??さて…ゲーセン、ゲーセン」タタタタタタツツ…

ゲームセンター

○○「さて…なにやろうか、お、ファイギュアだ…よし取るか？お金をいれて、スタート♪」チャラララッラン♪…チャチャチャチャン…チャチャチャチャ…チャチャチャチャーチャーチャー♪

(アームがかかる)

○○「頼むぞ…そr」カタカタカタガタン…チャーチャンチャーチャン♪

○○「いま、ファイギュアから落ちにいったような…いや、そんなわけあるか？偶然が重なってそう見たんだよ？きつと…はあもう帰るかあ」自宅にて

○○「しかし、やっぱりいいなあ友希那さん？クールで、でも時おり見せる笑み…チー卜だともう…気のせいかな？友希那さんもずっとこつちを見つめてる気がするぞ…ま、流石にそれはないか、さてイベント…走らないと」

タン

……グワアアン〜グワアアン〜

○○「ぐっ？なんだこれ？いきなり強い眠気が、まさか…本当に??あ…キヤ…キヤン
……セ……」パタン………フ

そして少年はある公園で目をさます

〇〇「……うう……ふあゝ、寝ちまつてたか、やっぱり夢………て、どこ？ここは……
とりあえず歩くか」

少年探索中ゝ

？「ちよつと、さつきからキヨロキヨロしてるけど不審者丸出しだよ？ひよつとして
新しく引つ越してきた人？」

○○「?!?」……そ、そんなですよ？一昨日引越してきたばかりですから、まだ土地勘がなくて？……あ、ひよつとしたらご近所さんになるかもしれないですね？僕は○○と……いいま……!?!」クルリ

？「どうしたの？アタシの顔になにかついてる？」

○○「いえ？知り合いに似てたものですから？（嘘だろ？なんでリサ姉が……）」

？「そう？あ、私は今井リサ……リサと呼んで？」

○○「はい？リサ……さん？……あの、リサさんひよつとしてリサなんてロゼリアの？」

リサ「おお？ひよつとしてファンの方？うん、私はロゼリアのベースの今井リサ、ふふ握手しちゃう？」

○○「……は、はい？（やっぱりここは……都市伝説じゃなかったのか）」

リサ「さて…親交も深めたところで、いきますか、○○♪」バチバチバチバチ…

○○「ぐ!?!……な、なにが起きた？」バタン！

友希那「うまくいった？」

リサ「友希那…うん上手くいったよ♪おどおどして可愛かったなあ♪」

友希那「私も近くで見たかったわ…さて…大丈夫よ○○、今はまだ混乱してるかもしれないけど…すぐに向こうの世界の世の中なんて、忘れるから…これからは」

（友希那&リサ）「ワタシタチトタノシククラシマシヨウ♪」ガサゴソガサゴソ…ジ…

日菜ちゃんどく

○○家くピンポン（はい…いま開けます）ガチャ

日菜「こんにちはく？…ここが○○さんの家かく、なんか凄く、るん♪て来るなあ」

○○「なにも面白いものはないですよ？さ、部屋で待つててください、いま飲み物お持ちしますから」

日菜「はーい♪」

○○自室く

日菜「ここが○○さんの部屋かく○○さんの匂いでいつぱいだ？…そうだよ」ニシ
シシ

廊下

〇〇「普通に家にいるけど、アイドルなんだよなあ…ファンにバレたらコロコロされるやんけ?…見られてないだろうな?…考えても仕方ない?、入るK」

「…め…なの…に」

〇〇「ん?なんの声だ?」…ス

—————

日菜「〇〇さんが、もう来るのに／あ?／／」

〇〇「な…ななな?、日菜さん?いったいなにを?／…あれ?」ガチャ

日菜「あははは♪…〇〇さんどうしたの?顔赤くして」

〇〇「あー…いえなんでもないです？、あ…飲み物持ってきたんでどうぞ♪」

日菜「ありがとう？……ふはあ、ねえ〇〇さん」

〇〇「なんでしょう？」

日菜「今日は私に料理に作らせて、日菜激推し親衛隊一番隊隊長さんのために美味しい料理をごちそうするよ♪」

〇〇「待った？なぜ日菜さんがその名前を？」

日菜「私、記憶力結構いいから…〇〇さんがファーストフード店でツイッターしてるときに、〇〇さんのアカウント名が見えたんだ」

〇〇「そ、そうだったのか？…」

日菜「すきなアイドルに料理作ってもらえるチャンスだよ？」

○○「そうですね、よしではお願いします!」

日菜「じゃあ夕飯までは、まだ時間あるし一杯お話ししようね♪」

日菜「でも○○さんが私のファンで知った時は嬉しかったなあ」

○○「はは…いまでも目の前の光景が夢かと疑いそでs」ピンポーン

日菜「あ…はー」

○○「マズイですよ?、ここは僕が?はーい、いまいきまーす」ガチャ

廊下

〇〇「(マスコミじゃないだろうな?) ……はい」ガチャ

紗夜「こんにちは、入らせてもらいます」

〇〇「紗夜さん? いったいどうしたんですか?」

紗夜「日菜がこちらにいるという事でしたので、間違いが起こらないようにです」

〇〇「間違いて? 流石に僕もそこまで節操なしじゃないですよ」

紗夜「もちろんわかってますよ、私が言いたいののは日菜があなたに手をださないように見張りにきたという事です」

〇〇「日菜さんが…僕に? 手を? ……あははは、それこそあり得ないですよ? ……」

紗夜「……まああなたが日菜を信じてるのはわかりました、ですが万一という事もありますので、やはり上がらせてもらいます…部屋まで案内していただけますか？」

〇〇「わ、わかりました？こちらへどうぞ」

紗夜「おじやまします」〇〇自室くガチャ

〇〇「こちらです」

日菜「あ…〇〇さんお客さんでだれだつて…て、お姉ちゃん？なに、どうしたの？」

紗夜「あなたが、色々としてかさないように私が見張りにきたのよ…」

日菜「えー…手をだすって？」

紗夜「そ…それは／＼その…色々とよ／＼」

〇〇「あー……とりあえず飲み物持ってくるんで待っててください!」

紗夜「すみません?ありがとうございます」ボタン

日菜「でもお姉ちゃんがきたのは意外だったなあ……これじゃあ手がだせないや」

紗夜「な／＼あなたやつぱり〇〇さんに手を／＼」

日菜「あはははは♪冗談だつて?」

紗夜「日菜!／＼」

廊下

〇〇「賑やかだなく……さて、お待たせしました?」

紗夜「○○さん…ありがとうございます」

○○「どういたしまして？でも廊下まで聞こえてましたけど、お二人とも仲がいいんですね？」

紗夜「そうでもないんですよ、日菜と話すようになったのはまだつい最近で、それまでは私は日菜の事を避けてしまっていましたから」

日菜「お姉ちゃんとしつかり話すようになったのであの雨の日以来だよね」

○○「…まあ過去はどうであれ、今は今じゃないですか、僕はお二人が後悔するまえに和解ができたようで、良かったです？」

紗夜「私もです？…あ、もう夕飯の時間ですね」

日菜「本当だ…じゃあ○○さん台所かりるね」

紗夜「いやいや？日菜なにしてるの？」

日菜「なについて、これから料理だよ？私から○○さんをお願いしたんだ？じゃあ○○さん楽しみにしてて♪」ピュー

紗夜「待ちなさい？日菜？」タタタタタタ…

○○「いっっちゃった…僕もいったほうがいいかな？」……ボタン

台所く

日菜「あ…○○さん？」

紗夜「あ…○○さん、すみません台所を勝手に」

〇〇「いえいえ？なんだかんだ言って楽しみにしてる自分もいますから？」

日菜「るん♪する料理食べてさせてあげるね♪あ、お姉ちゃん砂糖と醤油とって」

紗夜「では…〇〇さんは座ってまっけてください」

〇〇「ではお言葉に甘えさせていただきますね」

数十分後

日菜「お待たせく氷川姉妹特製の肉じゃがだよ？」

紗夜「まあ私は切ったり洗ったりしたただけですが味付けは日菜がしたんです」

日菜「凄く美味しいよ？」

〇〇「美味しそうですね？では…いまからとり皿とお箸もつてきますね」

紗夜「あ、私も手伝います」

〇〇「いえいえ？二人は休んでください、すぐにお持ちしますから？」

〇〇「お待たせしました〜？では…皆さん揃いましたし、いただきますでしょうか？」

日菜「ね、ね、まずは〇〇さん一口食べてみて」

〇〇「はい？…ハフ…ハフ…これは…凄く美味しいですね、味がしっかりと染み込んで、お店で出てもおかしくないです」

紗夜「お口にあったようでよかったです？では私も」

日菜「私も…いただきま〜す♪…おいひい？」

そして楽しい夕飯も終わり、しばらくして

〇〇「さて…そろそろお二人を送っていかないといけませんね、お二方…車に乗ってください」

日菜「ええ…今日は、帰りたくない…」

〇〇「／／日菜さん？そのセリフをその顔でいうのはズルいです／／」

紗夜「なに言ってるんですか？／／日菜も、あまり〇〇さんを困らせないの…それに明日だって学校があるでしょう」

日菜「えー…〇〇さんと一晩過ごしたかったなあ」

〇〇「日菜さん、そのセリフはもう少し先まで取っておいた方がいいですよ、さ…いきましよう…」

紗夜 「ありがとうございます？ 日菜…いくわよ」

日菜 「はい」

車内にて（車はお好きな車をご想像ください）

〇〇 「忘れ物はありませんか？」

紗夜 「はい、大丈夫です」

日菜 「大丈夫？」

〇〇 「了解です？では出発します？」 ブオン！ブロロロ…

友希那さんが絶対言わないだろうセリフ（キャラ崩壊注意）

友希那「はあはあ…大丈夫、大丈夫よ○○…痛くしないから、むしろ気持ちいいから」

○○「気持ちいいてなに？…てか目が怖い怖い？なににする気だ？」

友希那「とても気持ちいいことよ…私自身がまんできないわ…大丈夫、先つちよ、先つちよだけだから」

○○「先つちよて、なんの先つちよだ？ええい…HANNA☆SE☆」

友希那「いやよ、離れたらあなた逃げるでしょ、さあそろそろいいわよね？据え膳はなんとやらよ」

○○「うん…それは俺がいうセリフだね？…ねえ友希那さん」
友希那「あら、女が使うのもなかなかいいと思うけど？さて、本当にそろそろいいわよね？では…いただきます」バツバツ…

○○「ちよ？…友希那さん…あ…あー？」

合
体

数時間後

友希那「ふう…気持ちよかったわ」ツヤツヤツヤ

○○「だろうな、おかげで俺は枯れそうだよ」ゲツソリ

友希那「あら、それはあなたが途中から激しくするからじゃない」

○○「それは友希那さんがあんなに…ええい？これ以上先は言えん？」

友希那「ふふ…あなた途中から中々いい反応してたものね」

○○「ぐっ／＼」

友希那「……○○」

〇〇「ん？」

友希那「あんな表情みせられたら、また我慢出来なくなるわ…今日は寝かさないから覚悟して」

〇〇「まで？流石にこれ以上はもたnあー？」

合 体 R A U N D O 2

一時間後

○○「これ以上は…無理だ…」パタ…

友希那「寝ちゃった…今日はよく頑張ったわね、おやすみ○○」チュ…

翌朝

○○「うう…ふあ……朝か」

友希那「あら、おはよう○○」

○○「おはよう…友希那さん、気のせいかな太陽が黄色いや」

友希那「それは気のせいよ、それよりも…ねえ○○」

○○「ん？どうしてんん!？」チュー

友希那「…プハツ…隙ありよ、ごちそうさま♪」

○○「…／＼／＼、そろそろ時間だからいつてくる？」

友希那「ええ…いつてらっしゃい○○、またよかったら泊まりにきてちようだい」

○○「…：…おう／＼それじゃ？」

友希那「…：…さて私も学校にいきましょう、今日も頑張るわよ」ガチャ…ボタン

学校

リサ「あ、友希那おはよう♪」

友希那「リサ…おはよう」

友希那「ツヤツヤツヤしちやって、さては〇〇さんとお楽しみだったなく？」

友希那「ええ…凄く楽しい夜だったわ」

リサ「あははは？（〇〇さん御愁傷様）」

友希那「それよりも練習なのだけど、ライブも近いし今日から練習時間を倍にするから…リサもそのつもりでいなさい」

リサ「了解、紗夜たちにメールで伝えておくね」

友希那「お願い」キンコンカンコン♪キンコンカンコン

リサ「ヤバ？友希那急ごう？」

友希那「ええ急ぎましょう」バタバタバタバタ

休憩時間にRoseliaのメンバーと

C i R C L E ｻﾞ カフエ

〇〇「ズズ…ふう、あゝ…」(外のカフェでコーヒを飲んでる)

あこ「あ、〇〇さんだ〇〇さーん？」

〇〇「ん？おお？あこちゃん、休憩かい？そうだ飲み物買っておいで？」

あこ「いいんですか？ありがとうございます？」タタタタタツツ…

〇〇「どういたしまして？…ズズー…ふう」カチャン

リサ「あ…〇〇さん、こんにちは♪〇〇さんは休憩？」

〇〇「リサさん、今日は？まあみでの通り休憩中さ」

リサ「じゃあ休憩終わるまで、話さない？」

〇〇「いいよ？」

あこ「あ…リサ姉も来てたんだ？友希那さんたちは？」

リサ「友希那たちももうすぐ来ると思うよ？」

〇〇「そつか…じゃあ僕は席を移動しよ」

友希那「その必要はないわ」

紗夜「ええ…それと宇田川さん、抜け駆けは感心しませんね」

あこ「だってー？少しでも〇〇さんと二人で話したかったもん？あ…〇〇さん隣座っ

ていい?。」

〇〇「いいよ?あ…椅子足りないね、ちよつと待ってて」

数分後

〇〇「お待たせ?椅子が余っててよかったよ?」

友希那「ありがとう…それじゃあ早速」

紗夜「待ってください、湊さん、〇〇さんの左隣には私が座ります」

燐子「ズルいです／＼私だって隣に座りたい!…です」

リサ「私も座りたいから譲れないなくじゃあさ、ここはじゃんけんはどう?」

紗夜「じゃんけんですか…まあそれが一番公平ですね」

友希那「そうね…じゃあいくわよ」

燐子「私だって負けません…いきます…じゃんけん」

「ボン！」（友希那、燐子、紗夜）

友希那「？」

紗夜「？」

燐子「？」

リサ「？」

紗夜「やりました？では…隣失礼します」

友希那「まあ仕方ないわね、紗夜…あまり引っ付きすぎたら駄目よ、妙な噂がたちかねないわ」

『いやいやもう充分に妙な噂が立つ材料揃ってるから？』(周りにいたお客さん方)

紗夜「大丈夫です、そこはぬかりありません…それより湊さんも、あまり〇〇さんの顔を見つめてるのはいけませんよ」

友希那「あら、これは不可抗力というやつよ…あら、〇〇顔が赤いわね…体調は大丈夫かしら？」

〇〇「ええ…大丈夫ですよ／＼そのあまり見つめられると照れるといえますか／＼」

「「「持ち帰りたい」」」（友希那、燐子、紗夜、リサ、あこ）

友希那「大丈夫ならよかったわ、この季節は風邪をひきやすいから充分に気をつけて」

〇〇「大丈夫だよ？体調管理には気をつけてるから…と、そろそろ休憩時間が終わるだ…じゃあ僕は仕事に戻るよ、皆もこのあとの練習頑張つて？」

あこ「うん？」

紗夜「もちろんです、○○さんもお仕事頑張つて」

燐子「私たちも頑張り…ます…」

リサ「お互いに頑張ろう〜♪」

友希那「また時間があつたらお話ししましょう」

○○「もちろん？それじゃあね」タタタタタタツツ…

彩ちゃんと秘密のデート

ブオン！ブオン！ブロロロ…

彩「あ…きたきた、○○さん遅いよ〜」

○○「ごめん？ごめん？彩ちゃんとのデートが楽しみで昨日寝れなくてさ？」

彩「じゃあ今日は一杯楽しませてね♪」

○○「よし…じゃあ出発〜」ブロロロ〜…

道中〜

○○「そうだ、彩ちゃん、バレたりするとパニックになるから、はい今日はこれつけてサングラスと帽子」

彩「はい○○さんにも迷惑はかけたくないですからね…でも本当は…今日だけは私を独り占めしたいって思ってた？」

○○「ん？ん？…さて今日はどこにいきたいかな？」

彩「うわ？○○さん分かりやすすぎ？」

○○「いやあ鋭いなあ？彩ちゃんは…とりあえず、お腹空いたしご飯にしようか」

彩「うん…そうしよう？ファミレスにしよう」

○○「了解！じゃあファミレス目指してゴ？」ブオオオ

ファミレス

○○「さて…なににしようかな？」

彩 「うーん…決めた？私はたらこスパゲッティのサラダセットにしようかな」

〇〇 「じゃあ僕は…チーズハンバーグにしようかな」ポチ…ピンポン♪

「お待たせしました、ご注文をどうぞ」

〇〇 「チーズハンバーグのパンのセットを一つとたらこスパゲッティのサラダセットを一つお願いします」

「かしこまりました、ご注文を繰り返します…チーズハンバーグのパンのセットをおひとつとたらこスパゲッティのサラダセットをお一つでよろしいでしょうか？」

〇〇 「はい、お願いします」

「かしこまりました、少々お待ちください」

彩「この後はどこに行く？ 私は○○さんと一緒なら何処でも楽しくすごせるよ♪」

○○「嬉しいこと言ってくれるじゃないの♪…じゃあカラオケとかどうかな？ 二人きりにもなれるしさ」

彩「いいね？ じゃあ食べ終わったらカラオケにいこう？」

○○「ふふ…どうせなら勝負しようか負けた方はいうことをきくという」

彩「ふふ…私負けないよ？ 今から考えておこうと♪」

「お待たせしました？ たらこスパゲッティのサラダセットとチーズハンバーグのパンのセットです？ ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

○○「はい、大丈夫です、ありがとうございます？」

〇〇「前のほう失礼します、ごゆっくりとどうぞ？」

彩「きたきた、ささ…食べよう？」

〇〇「おう？…パク、うん美味しい？」

彩「たらこスパゲッティも美味しい？〇〇さんも一口どうですか？」

〇〇「あ、ありがとう？じゃあ一口もらおうかな？」

彩「はい…あーん」

〇〇「あーん…うん、たらこスパゲッティも美味しい？じゃあお返しに、あーんして」

彩「あーん…チーズハンバーグも美味しい？」

〇〇「どちらも美味しいね？…うん美味しい♪」

数分後

○○「ふう…美味しかった？」

彩「私お腹いっぱい♪…そろそろいいっか」

○○「だね？いいこう」

レジ

○○「すみませーん」

「…：…お待たせしました？伝票のほう失礼します、たらこスパゲッティのサラダセットが一つとチーズハンバーグのパンのセットが一つで…お会計…円になります」

○○「では丁度で」ス

「丁度いただきます…ありがとうございます？ございました？またのお越しをお待ちしてます」

再び車内へ

〇〇「じゃあカラオケに向かうか…そうだ機種はどっちがいい？j o yとD A M」

彩「あ〜どっちにしよう？うーん、j o yにしようかな」

〇〇「オーケー♪じゃあカラオケに向かって出発く♪」ブロロロ…ブオオオ〜

カラオケくガチャ…キイ、パタン

〇〇「さあ歌うぞ〜？」

彩「〇〇さん最初の一番手どうぞ♪」

○○「じゃあお言葉に甘えようかな？最初は……この曲にしようかな♪ヒトカラのさ
い必ず最初に歌う曲、孤○月♪」

彩「お、いきな十八番いつちやう？では張り切ってどうぞ♪」

○○「♪…泣かない約束した、限りなく続く未来に♪明日まt…♪」

○○「♪…ふう」

彩「すごい上手だった？じゃあ次は私だね…きいてください、しゅしゅわどリーみん」

…♪

彩「しゅわしゅわはじけたキモチの名前教えてよきみが知ってる、しゅーわしゅーわ
どリーどリーみん！イエー！♪」

彩 「く♪…ありがとうございます？」

○○ 「いやあ流石はアイドルだなあ、よかったよ？…それじゃあ次からは採点バトル
とこうか」

彩 「あ…いよいよ勝負だな、よし負けないよ」

○○ 「採点モード送信？」

そして時間は過ぎていき時刻は夕方に

彩 「今日は楽しかった？でも勝負に負けたのはちよつと悔しいかも」

○○ 「いつでも接戦だったからね？でも勝てたのは嬉しいかな♪さて…なにをお願い
しようかな♪」

彩「うう／＼……ねえ○○さん」

○○「ん？なにかな？」

彩「今日は…帰りたくないな」

○○「彩ちゃん……僕だって帰したくないよ、でもね彩ちゃんのためにも今日は帰らないといけない」

彩「私のため…わかりました今日は帰ります」

○○「彩ちゃんなら、そう言ってくれろと信じてたよ…さ、家まで送ってくよ」

彩「○○さん！」

○○「ん？」

彩「今日はありがとうございました？デート楽しかったです♪」

○○「彩ちゃんを楽しませる事が出来てよかった？…さ、それじゃあ帰ろうか」ガチャ
…ガチャ…バン…ブオン！ブロロロ…ブオオオ…

笑顔への第一歩

ある公園のベンチにて

〇〇 「はあ…どうしよかな…まさかリストラなんて…はあ」

? 「ねえ…そのあなた」

〇〇 「ん?…誰か話しかけた？」

〇〇 「あなたよ、いまキョロキョロしてるあなた」

〇〇 「え? 僕のこと?? いったい、何処から」

? 「こつちよ、こつち」

〇〇「いた?あの…いったいなんででしょう?」

? 「それはこつちが聞きたいわ、だってあなた笑顔じゃなかったもの」

〇〇「笑顔…か、はは、とても今は笑顔になる余裕はないかな?」

? 「それはいけないわね、私たちは世界を笑顔にするためにバンドをしているハロー
ハッピーワールドっていうの、私は弦巻こころっていうの、あなたのお名前はなにかしら?」

〇〇「僕は〇〇、何処にでもいる普通の一般人さ…」

こころ「〇〇っていうのね、ねえ〇〇はどうして落ち込んだの?」

〇〇「……それは君に話してなにになるのかな?」

「こころ「それはわからないわ、でも誰かに話すだけでも随分違うと思うの」

〇〇「……そうだね、でもそれは君たち学生同士だからこそ通じるんだ、君には僕を救えるのか？無責任に、どうしたのなんてきかないでくれ……」

「こころ「救えるか救えないかなんて、やってみないとわからないわ……私たちは世界を笑顔にするために活動してるもの、そこにはあなたも含まれてるのよ？」

〇〇「僕も……か、ごめんねさつきはキツく当たって、実はさ会社をk」

？「あ……こころん♪」

「こころ「はぐみ？……ちようどよかったわ？紹介するわね、ハローハッピーワールドのベースの北沢はぐみよ」

はぐみ「あ……こんにちはー♪こころん、この人だれ？」

「この人は○○○ていって、凄く悩んでるの…だから私がどうしたのかきいてたのよ」

はぐみ「そっかー、ねえ○○○さん…うちの父ちゃんのコロッケ食べない？」

○○○「コロッケ…どうして？」

はぐみ「だって、○○○さん今にも消えそうな顔してる、はぐみ落ち込んでる時に父ちゃんのコロッケを食べると、凄く元気になるんだ♪だから○○○さんもきつと元気になるよ？…今から持ってくるね？」 タタタタタタ

○○○「ちょ？お嬢ちゃん？いつちやった…」

数十分後

はぐみ「お待たせ〜はい？揚げたてだから美味しいよ？」

○○○「ありがとう？あ…そうだお代を払わないとね？」

はぐみ「え？いいよ、それよりも食べてみて」

〇〇「ありがとう？でもお代は受け取ってくれ、じゃないと僕は堕ちるとこまで堕ちちゃうから？」ギユ（千円札をわたす）

〇〇「じゃあ…いただきます…サク…サクサクサク…サク…」

「どう？（かしら？）」「（…）&はぐみ（

〇〇「…：美味しいよ、凄く美味しい！サクサクサクサクサク…本当に涙が出るくらい」ポロポロポロ…

「こころ「あら駄目よ泣いちや、せっかく美味しいのを食べてるものほら、笑顔になりましょう」」（二）」

はぐみ「そうだよ、笑顔になれば更に美味しくなるから？ほら、にー」

○○「に、にー」（笑顔になる）

こころ「いい笑顔ね？ そうだね、はいこれ？」

○○「……これはチケツト？」

こころ「私たちのライブのチケツトよ？ 明日CIRCLEでライブハウスでライブをするの、私たちの演奏をみてもらえればきつともっと笑顔になれるわ♪」

はぐみ「それ名案だね？ ○○さん絶対に来てね♪」

○○「そうだね、時間ができたらいくよ」

こころ「約束よ♪……じゃあ私たちはそろそろ帰るわね、はぐみいきましよう？」

はぐみ「うん、じゃあ○○さんまたねー？」 タタタタタタツ

○○ 「世界を笑顔にか……こんなにも優しくされたのは久しぶりだな……サク……明日
いってみるか」スク……タタタタタタツ

そして……ライブ当日の日

C i R C L E

○○ 「あの」

まりな 「いらっしやいませ？ チケットを背景します……ハローハッピーワールドです
ね、三番にどうぞ♪」

○○ 「ありがとうございます？」

会場内

〇〇「わあ凄い人だ?…」

こころ「それじゃあ次の曲にいくわね…えがおのオーケストラ?」

「きゃー 《*∨∧∨∨》」

こころ「〜♪トキメキ!はづませて始めよう!オーケストラ♪♪ボクの左手をつなぐキミの右の手には〜♪…〜♪」

〇〇「…ッ!…ハ」

♡♡ろ「〜♪…」

「きゃー 《*∨∧∨∨》」

○○「……ふふ、まさか年下の子達に元気を貰うなんてね、ハローハッピーワールド…彼女たちなら本当に世界を笑顔にできるかもしれない」

そして○○は楽しい一時を過ごした

ライブ終了後、外のカフェにて

○○「凄かったなあ…ハローハッピーワールドのライブ、気づいたら心から笑ってた、あんなに笑ったのは久しぶりだ」

こころ「あ…○○じゃない？○○ー？」

○○「こころちゃん…今日はありがとうね招待してくれて」

こころ「気にしないで？それに○○、ライブ中ずっと笑顔だったじゃない…私も○○の笑顔をみれて嬉しかったわ♪」

美咲「ちよ？　こころ？　アンタはまた？　……すいません？　うちのメンバーが？」

〇〇「いやいや？　むしろ礼をいうのはこつちのほうだよ？　……彼女に出会わなかったらきつと僕は自暴自棄になってただろうからね？」

美咲「へ？　は……はあ、」

「こころ「自暴自棄てなにかしら？　……でも〇〇が笑顔になれたらなら私は嬉しいわ」
」

美咲「ちよ？　こころ呼び捨ては不味いつて？」

〇〇「あははは？　いいよ〇〇で、もう慣れちゃったし……ハローハッピーワールドさん改めてお礼をいいます、僕を救ってくれて……そして笑顔にさせてくれて本当にありがとうございました？、また今日から頑張れそうです」

美咲「ど、どういたしまして……あ、こころそろそろいくよ？」

〇〇「まあね、キツいけど楽しい仕事だよ?」

〇〇「それは〇〇の顔をみればわかるわ、だって〇〇前とは違って楽しそうなもの?」

〇〇「こころちゃんたちの演奏のおかげさ、また時間が出来たらきつといくよライブに?」

〇〇「待ってるわ♪じゃあ私たちはいくわね♪」タタタタタタツツ…

〇〇「待ってるか…よし今日も頑張りますか?」(駅の中へ)

小なき魔王からの優しい看病

○○宅

○○「ゲツホ?ゲツホ?ゲツホ?...あゝあゝ...油断した、完璧に油断した?...
はあはあ、フラフラするし...頭痛てえ?...仕方ない...プルルル...プルルル」

まりな「はいC i R C L Eです」

○○「ああまりなさん...すびませんが今日病欠したいのですが?ガツホ?ゲツホ?
ゲツホ?」

まりな「だ...大丈夫??...わかった、病欠だね大事をとって安静にね?」

〇〇「ずびません？失礼します？ガチャ…あく休んでしまった……とりあえず寝るか
…はああ…zzzzz」

数時間後

〇〇「はあはあ…ううどれくらい寝てたんだろ…時刻は…12時30分か、結構寝て
たな…とりあえず水…」スタスタスタ…

〇〇「はあはあ…ヤバい意識が朦朧として…あ…やb……」ボタン…

一方CIRCLE

リサ「こんにちはー？」

あこ「ふふふ…墮天せし魔王…ここに降臨！今宵も我の…えーと…ババーンとした
力をみせてあげよう…」

紗夜「宇田川さん、遊んでる暇はありません早くスタジオにはいつて準備を進めてください」

あこ「う？はい？」

友希那「……あら、今日は○○はないのね」

まりな「いらつしやい？あー…○○さんね、実は風邪で休んでるんだ？」

あこ「ええ？大丈夫かな？今頃倒れてるんじゃない？」

友希那「あこ、心配なのはわかるけど心配なら練習が終わってからにきなさい」

燐子「そうだよ、あこちゃん今は集中しよう??」

まりな「うーん大丈夫だとは思うけど？あ…今日は二番使って」

紗夜「わかりました…では皆さん入りましょう」

スタジオ内

♪練習から二時間後

紗夜「宇田川さん、ドラムのリズム遅れてますよ」

友希那「ええ、あこ…今日は特にミスが目立っているわ」

あこ「ご、ごめんなさい？」

燐子「やっぱり、○○さんの事？」

あこ「う、うん？倒れてるんじゃないかって？」

紗夜「……はあ宇田川さん、心配なのはわかります、しかし練習に私情は持ち込まないでください」

友希那「……あこ今日はもう帰りなさい」

リサ「ちよ？友希那？もうちよつとあこの話も聞いてあげなつて？」

友希那「リサ、あなたも聞いていてわかるでしょう？今日のあこは集中がまったく出ていないと」

紗夜「そうですね……これ以上は足を引つ張られるだけですし、そうすると全体にも影響が出てしまいます」

友希那「……仕方ないわね、今日はここまでよ各自つぎの練習までにミスをした箇所を修正しときなさい」

あこ「は、はい？」

紗夜「宇田川さん、次までに改善が見られなかったら…」

あこ「は、はい？絶対なおします？…し、失礼します？」バタバタバタ

友希那「……私たちもいきましよう」

ロビィ

あこ「ま、まりなささーん？」

まりな「あれ、もう終わりでいいのかな？」

あこ「はい？あ…あの？〇〇さんの家、教えてください？」

まりな「ええ？…うーん教えたいけど、出来ないかな？個人情報のこともあるから？」

リサ「あこ……さすがに押し掛けるのはマズイって?……」

あこ「で、でも?」

まりな「……:……:……:そういえば、○○さんこの前、財布忘れたただ?……:ねえ申し訳ないけど届けてくれないかな?」

あこ「は、はいもちろんです?」

まりな「ありがとう?これ、○○さんの自宅の住所」

あこ「はい……:……:ありがとうございます、失礼します?」カタン……:タタタタタタツ

友希那「……:……:あ……:次の予約をしたいのだけれど」

まりな「あ……:……:了解?次はいつがいいかな?」

友希那「日曜日の昼の二時からがいいわね」

まりな「日曜日の昼の二時だね…おーけ？予約入れたよ？」

友希那「ありがとう…さ、私たちでもしよう」

一方あこちゃんは

あこ「ええと…確かこのへんのはず…あつた？…」ピンポーン！

「……」

あこ「寝てるのかなあ？」ピンポーン！

「……」

あこ「……なんだろう嫌な予感がする？…すいませーん？ガチャ…開いてる…お、お

じゃましませう？……ま、○○さーん？」

○○「……………」

あこ「ま、○○さん？○○さんしつかり？」

○○「うう…あれ？幻覚か？なんであこちゃんがここに…」

あこ「まりなさんが教えてくれたんですよ？財布忘れましたよね？」

○○「財布…見当たらないと思つたらC i R C L Eに忘れてたのか？…あこちゃん申し訳ないんだけど、お水もつてきてもらえないかな??薬飲まないといけないからさ？」

あこ「わかりました？あの…お部屋は??」

○○「部屋はあそこだよ？プレートがしてあるからわかるとおもう？」

あこ「わかりました？すぐにもっていきます？」

〇〇「ありがとうございます？」

〇〇自室へ

〇〇「はあはあ……とりあえず待とうか」コンコン……ガチャ

あこ「お待たせしました？お水です？」

〇〇「ありがとう？……ヒョイ……ゴク……ゴク……ゴク……ゴク……プハア、ありがとう……あこちゃん？ふう……」

あこ「どういたしました？……でも〇〇さんが風邪を引くなんて驚きですよ？」

〇〇「はは？油断したよ？……まあ、あまり長居させちゃうと、風邪がうつっちゃうからね？そろそろ帰ったほうがいいかも？」

あこ「ええ？この○○さんの状態をみて、はいそうですか……て帰れないよ？と、とりあえずお姉ちゃんに電話してきます？」

○○「ちよ？あこちや？……いつちやつた？、多分駄目で言うと思うけどなあ？」

あこ「……お待たせしました？しっかり看病するようにつて」

○○「ほらね、しっかり看病……え？本当に??」

あこ「はい、それじゃあ今日はあこにお任せあれ？……とりあえず○○さんは横になってください？あこがしっかり看病しちやいますから？」

○○「う、うん？じゃあ任せようかな？……それじゃあ僕はもう少し寝ようかな、薬も効いてきたのか眠くな……て……き……スウ」

あこ「寝ちやつた……そうだ冷えピタ？」タタタタタツ

あこ「……あつた？……〇〇さんはやく熱下がると、いいな」ガチャ…キイ

〇〇「……スウ…スウ…」

あこ「……ペタ…いま何時だろう…もう夕方の5時だ、おかゆ作らなきゃ？」ガチャ
…キイ…バタン

台所

あこ「よし…頑張るぞ！……お米をいれて…と…」

そして数十分後

あこ「出来た？…あとはこれを〇〇さんに…」

○○自室

あこ「○○さん起きてますか？」

○○「スウ……ううん、ふあ……ああ、あこちゃん今起きたとこさ、この匂い……おかゆさんかな？」

あこ「はい、あ……いま持っていくますね……ヨイシヨ……ふーふー……はい、あーんしてください」

○○「……あーん……ハフ……ハフ」

あこ「ど、どうですか?？」

○○「うん……美味しいよ?塩加減もいいしネギがきいてる」

あこ「よかった？まだいっぱいありますからね？はい、あーん」

〇〇「あーん…ハフ…ハフ」

あこ「…：…なんかこうしてると…」

〇〇「兄妹みたい…かな？」

あこ「違います？その…：…こ、こ…：…：…なんでもないです／＼」

〇〇「?…：…」

そして数十分後

〇〇「美味しかった？ごちそうさま、あこちゃんありがとうね？大分楽になったし明日には完治でとこなかな？」

あこ「本当!?よかったあ?あ…」

〇〇「さて、完治させるためにも今日はもう寝るよ、うーん今日は遅いから泊まっていきなさい…外も暗いし危ないからね」

あこ「あこは最初から泊まるつもりでしたよ?お姉ちゃんにもそう伝えてありますし」

〇〇「あー…ははは?準備がいいことで?それじゃあ布団もつてくるよ、待ってて?」

あこ「あ…あこが運びます?〇〇さんは寝ててください?」

〇〇「そういう訳にもいかないよ?じゃあ分担しよう、僕は敷き布団や枕と毛布を持つから、掛け布団お願いできるかな?」

あこ「はい♪任せてください?…じゃあ早速運びましょう?」

〇〇「ちょっと待っててね、よいしょと……じゃあいこうか？」

そして布団も敷き終わり、時刻は十時過ぎ

〇〇「今日は本当にお世話になったね？このお礼は必ずするよ？」

あこ「いえいえ？あこは〇〇さんが元気になつてくれれば」

〇〇「はは？もうすっかり復活しそうだよ？……さ今日はもう寝ようか、おやすみ？あこちゃん」

あこ「はい♪おやすみなさい？〇〇さん」

そして夜が明けた

〇〇「うーん?…ふあゝ朝かあ、うーん…よし完全復活といった所かな?…そういや、あこちゃん姿がみえないな…ん?手紙?」ガササ…ササ

あこ『〇〇さんへ、本当はもつといたかったのですが流石にお姉ちゃんが心配するの
で、帰ります…』

〇〇「か…まだお礼できてなかったんだけどなあ?…まあお礼は今度あったとき
でも、さて今日からまた頑張りますか?」

千聖さんと秘密の時間

C i R C L E

○○「…♪」キユキユ…ガチャ…キィ

? 「ちよつといいかしら?」

○○「あ…すいません? もうすぐで終わるので、あつと少しお待ちk…千聖」クル
千聖「今日はオフで暇だから、来ちゃった…いま忙しいかしら?」○○「いや、もうすぐで休憩だから問題ないよ…うし、清掃完了? 道具戻してくる
?」

千聖「わかったわ、じゃあ私はここで待つてるわね、まりなさんには言ってるから」

〇〇「わかった、じゃあちよつと待っててくれ」カチャ…パタン

ロビー

まりな「あ…〇〇くん、お疲れ様?…千聖ちゃんにあつたでしょ」

〇〇「はい、先ほどスタジオで…それじゃあ休憩先に入りますね」ガチャ…キイ…バタン

まりな「了解?あ…〇〇くん」

〇〇「なんでしょう?」

まりな「盛り上がり過ぎて床を汚さないようにね♪」

〇〇「ぶっ？まりなさん？それセクハラですよ？もう…」

まりな「ごめんごめん♪ほら、千聖ちゃん待ってるからいつてあげなつて」

〇〇「いまいきます？では失礼します？」

〇〇が向かった後

まりな「ふう…青春だねえ」

そしてスタジオ

カチャ…キイ…パタン

千聖「おかえりなさい♪じゃあ今から少しだけ二人きりね」

〇〇「だな？しかし驚いたよ」

千聖「だって私たち最近は休みが合わないじゃない、だから私が来ちやつた♪……それよりも久しぶりに二人きりなんだから……ス」

〇〇「……仕方ないな……ン……ハ……」

千聖「……ハ、ごちそうさま♪……ねえ腕組んでもいいでしょ♪」

〇〇「ああ♪……なあ千聖、休みは明日もあるのか？」

千聖「いえ、休みは今日だけなの……また明日からは忙しくなるわ」

〇〇「そっか……仕方ない、なあ千聖」

千聖「あら……なにかしr……!？」

○○「……ハ、今はこれで我慢しとく♪もし休みが合ったら、いっぱいデートしような♪」

千聖「もう…不意打ちなんてずるいわ…でもそうね私たちの休みがあつたときはいっぱいデートしましょ♪」

○○「おう?…さて時間がたつのは早いなあ、そろそろ戻らなきゃ」

千聖「頑張って、私も今日は一緒にいるから」

○○「お…千聖と一緒になら頑張れそうだ?よし、頑張りますか?…そろそろ出ないとな」

千聖「……そうね、じゃあ私は○○の仕事の様子をたっぷり見させてもらおうわね♪」

○○「はは?お手柔らかに?」カチャ…キイ…パタン…

ロビー

まりな 「あ…○○くん、千聖ちゃんと二人の時間は楽しめた？」

○○ 「はい？と…三番スタジオの機材のチェックしてきますね」

まりな 「了解、あ…千聖ちゃん、どうだった○○くんとこの時間」

千聖 「ええ短い時間でしたけど、楽しい時間を過ごせました？」

まりな 「そっか？…因みに…キスはしたのかな♪」

千聖 「!?／／…はい…／／」

まりな 「そっか…いやあ青春だねえ？」

○○ 「機材チェック終わりましたくて、まりなさんになに聞いたんですか？」

まりな「ん？キスはもうしたのかなって♪」

○○「んな!?!なに聞いてんですか？／＼」

まりな「初々しいねえ：どうせなら続きとかもs」

「しませんよ？／＼」（千聖&○○）

まりな「おお息びったりだ？」

友希那さんとデート

C i R C L E 前々ブオン…ブロロロ…

〇〇「お待たせ？」

友希那「そんなには待ってないわ、それよりいきましよう」ガチャ…ボタン…ブロロロ
ロ

〇〇「いやあ晴れてよかったよ、さてどこいこうか？」

友希那「そうねカラオケとかどうかしら」

〇〇「カラオケかあ…よしじゃあカラオケにいこうか？」

カラオケ

〇〇「すみません……二名で三時間をお願いします」

「かしこまりました、機種はどうしますか？」

〇〇「ああ……どうする？」

友希那「そうね……機種は……でお願い」（機種は好きな機種を当てはめてください）

〇〇「……でお願いします」

「かしこまりました、では三番にどうぞ」

〇〇「ありがとうございます？友希那いこう」

友希那「ええ」

室内へ

〇〇「さて…なに歌おうか」

友希那「そうね…じゃあまずは熱色からなんて、どうかしら」

〇〇「熱色かあ…いいな？よしじゃあまずは盛り上げに熱色からにしよう？」

〇〇「〜♪…〜♪」

友希那「〜♪…〜♪…」

〇〇「…ふう、いいなあこの曲」

友希那「あなたノリノリだったものね、それじゃあ次はどれにする？」

○○「そうだなあ、次は……にしようかな」（好きな曲を当てはめてお楽しみください）

友希那「じゃあこれが終わったら私は……にするわ」

○○「ok……おし、曲送信♪」

○○「〜♪……〜♪……」

友希那「……よかったわ、○○……あなた歌手の素質あるわよ」

○○「友希那にいつてもらえると自信がつかないあ……♪あ、友希那の番だぞ」

友希那「〜♪……〜♪」

○○「いいなあ友希那の歌声……」

友希那「〜♪……〜♪……」

○○「おおお……いやあ凄かった、圧倒されたよ」

友希那「ありがとう……でも……○○もよかったわ」

○○「ありがとう？さ、どんどん歌おう？」そして時間はあつという間に過ぎていき、
いよいよ退室時間に

○○「〜♪……」

友希那「〜♪……」

○○「……ふう、そろそろ時間か」

友希那「そうね…そろそろ出ましようか」

○○「だな?…楽しかったなあ」ガチャ…キイ

友希那「また今度のデートでもきましよう」キイ…ボタン

○○「いいなそれ?と、すいませーんお会計お願いします」

「はい、三時間コースでしたね…お会計1500円になります」

○○「では…丁度で」

「丁度いただきます、ありがとうございます?」

○○「さて……このあと何処にいこうか」

友希那「そうね……私の家に来ない？」

○○「いいのか？」

友希那「もちろんよ、それに……（今日は誰もいないから／＼）」

○○「……友希那？」

友希那「……ハッ……いえ、なんでもないわ、さ……いきましよう」

○○「お、おう？」

友希那宅→友希那自室

友希那「カフェオレでよかつたかしら」

〇〇「おう？ありがとうございます」

友希那「どういたしまして…ねえ〇〇」

〇〇「ん？どうした？」

友希那「…察しなさい／＼」

〇〇「…友希那、いいのか？」

友希那「…駄目なら、呼んだりなんかしないわよ／＼」

〇〇「……わかった」

友希那さんご乱心（キャラ崩壊注意）

…コンコン、失礼します

? 「いっえーい♪」

○○ 「な、なんだあ!?!、え…ちよ、友希那さん?」

友希那 「あら、キョトンとしてどうしたのかしら」

○○ 「え…友希那さんですよね? いったいなにが?」

リサ 「いやあ…それがさ知り合いにチョコ貰って食べたんだけど、そのチョコにお酒が入ってたみたいでさ? ……見事この状態に?」

〇〇「つまり酔つてると?、ダメですよ?ちゃんと確認しないて」

友希那「ねえねえ〇〇さん♪こっちみて、こっちみて」

〇〇「あーはい?なんでしょ…んん!」

リサ「な!?友希那?ヤバイって?」

紗夜「湊さん?それはまずいです?今井さん宇田川さん白金さん手伝って?」グイー

「「はい? (オーケー?)」」(リサ、あこ、燐子)

〇〇「……」

友希那「……ぷはあ…ごちそうさま♪〇〇さん、隙だらけですよ♪」

○○○「……」

リサ「あーあ？○○さん放心しちやってるよ？おーい？○○さーん？」

○○○「……はっ……なあ!?!／ゆ、友希那さん？なにを／」

友希那「キスですよ、キッス♪…ふあくなんだか眠くなってきちやった、○○さん抱っこして」ギユッ

○○○「抱っこ言われましても?／」

リサ「ほら友希那?○○さん困ってるから離れなつて?」

友希那「いーやーだー?…ふあくだめ我慢できない、○○さんおやすみのキス……スヤア」

あこ「寝ちやった?」

○○「……とりあえず横にしましょう?…ヨイシヨ」

友希那「スー…スー…」

紗夜「すみません?…とりあえず私、お水もらってきます?」

リサ「うん?お願い?…○○さん重くない??」

○○「大丈夫ですよ?しかし…可愛い寝顔ですね普段のクールさとは真逆です」

リサ「よかったらさ写真撮って送ってあげよかったか?」

○○「それはマズイですよ?…さて、そろそろ起こさなきゃ?」

燐子「そう…ですね?○○さんは他にも仕事がありますし?…あの、友希那さん?」
ユサユサ

○○「友希那さん？起きてくださいーい？」

友希那「ううん……ふあ、あら寝ちやつ……て……た……え……あ……な／なぜ○○
さんは膝枕を？」

○○「覚えてないんですか？」

友希那「……覚えてるわ……あ……／ま、○○……今日のごことは忘れなさい／お
願いだから」

○○「は、はい？（忘れられるか?)」

紗夜「お待たせしました、あら湊さん起きましたか……水です気分がすつきりします」

友希那「ありがとう／／ゴクゴク……プハア……今日はまだもう帰るわ、色々整理させ
たいから」

○○「ああ…でしたら送りますよ、友希那さんまだほのかに匂いがしますからね、知り合いに出会ったりしたらちよつと厄介になりますし？」

友希那「……そうねお願いするわ」

○○「では…いきましよう」

ロビー

まりな「あれ…○○くん何処にいくの？」

○○「ああ…ちよつと友希那さんが体調崩したみたいで、なので僕が送ることにしたんです、直ぐに戻りますから？」

まりな「わかった気をつけてね、友希那ちゃんお大事にね？」

○○「え…ええ、それじゃあ」

○○「では?…」

ガチャ…バン…バン

○○「自宅付近まででいいですか?」

友希那「いえ…自宅までお願い」

○○「わかりました、ではいきましょう!」ブオン!…ブロロロ…

ひまりちゃんに秘密のく

C i R C L E く

○○「く♪……く♪……ふう、やっぱ楽しいな歌うのは」

? 「パチパチパチパチ……○○歌上手なんですネ、思わず聴きほれてしまいました」

○○「ひまりちゃん……はは？ 恥ずかしいところを見られちゃったな？」

ひまり「全然恥ずかしい事じゃないです！ ねえねえ、もつと聴かせてくださいよ？」

○○「でも……ひまりちゃん練習があるんじゃない？」

ひまり「それなら大丈夫ですよ？私が先に来ちやつただけなんで？」

〇〇「そつか？……じゃあ少しだけなら？」

ひまり「やったあ？じゃあさつそく一曲お願いします♪」キイ…パタン

〇〇「じゃあ…曲はこれにしようかな？……♪♪」

ひまり「……凄い…」

〇〇「……♪♪……」

ひまり「凄い！凄いです？ねね、次の曲お願いします？」

〇〇「ok…じゃあ次はこの曲にしようかな？……♪♪……♪♪……♪♪……♪♪」

ひまり「わあ……」

○○「……♪…」

ひまり「わあああ？○○さん、本当によかったです？」

○○「ありがとう？あ、でもこの事は二人だけの秘密だよ？」

ひまり「もちろんわかっています♪でも…これだけ歌がうまいのに、なんで歌手にならなかったんですか？」

○○「歌手か…まあミュージシャンは目指してはいたよ？中学卒業してすぐにバイトして貯めた給料でギター買って売り込みしたりして…でもやっぱ厳しくてね？、それでも音楽から離れるなんて考えなくてさ？それでここに就職したってわけ」

ひまり「そうだったんですか、でも歌ってるときの○○さん凄く楽しそうでしたよ？」

○○「歌は好きだからねえ、まあ今もつと楽しいのは君たちガールズバンドたちのお

手伝いが一番楽しいかな」

ひまり「そうなんだ、じゃあもし、チャンスが巡ってきたら…挑戦しますか？」

〇〇「…難しい質問だね、正直今の仕事に愛着があるのも事実だし、だから…はい…とは答えられないかな」

ひまり「そうなんだ…でも私は〇〇さんが素質あるって知ってますから？」

〇〇「ありがとう？」

ひまり「あ…じゃあ私はそろそろいききますね」

〇〇「了解？ひまりちゃん」

ひまり「なんででしょう？」

○○「今日も練習頑張つて？えいえいおー？」

ひまり「はい？頑張ります！えいえいおー？」

○○「さて、すっかり話し込んだな？急いで戻らないと？」キィ…パタン

ロビー〜

○○「遅くなりました？…さて、あれひまりちゃんメンバーのみんなはまだ来てないの？」

ひまり「はい？さつき蘭からラインがあつてちよつと遅れるみたいで？」

まりな「遅刻かあ、○○くんもたまにするよね♪」

〇〇「ちよ？それをなぜいまここで？」

ひまり「まりなさん、詳しく聞かせてください？」

まりな「いいよ〇〇くんは朝が弱いみたいで、私がモーニングコール」

〇〇「わー？わー？わー？…それは言わないでー？」

まりなさんと温泉旅行

商店街くカラン、カラン、カラン

「おめでとうございますか？特賞、一泊二日の北海道函館温泉旅行です」

まりな「うそー!?!やったやった？」

「おめでとうございますか？ご友人や恋人と一緒にいつてらっしゃいますか？」

まりな「はい？」

C i R C L E

まりな「♪…あ、○○くん」

○○「はい、なんででしょう?」

まりな「この前、商店街の福引きで旅行が当たったんだ?それでさ、よかつたら一緒にいかない?」

○○「旅行かあ、いいですね?でも僕でいいんですか?」

まりな「もちろん?…むしろ○○くんがいいなあ…」チラ

○○「わかりました?僕でよければご一緒させてください?」

まりな「本当に?よかつたあ?出発は一週間後だから?」

〇〇「了解です?、一週間が楽しみだあ?」

まりな「ふふ、私も楽しみ?」

そして一週間後〓函館〓

〇〇「うう?寒いなあ?」

まりな「寒いね?さ::はやく旅館にいこう?」

〇〇「そうですね?」

まりな「あ::そうだ、せつかくの旅行なんだから、敬語はやめない?ね?」

〇〇「そう::d::そうだね?よしいこう」

まりな「そうこなくっちゃ♪」

〇〇「それじゃあ、改めていこう？まりなさん」

まりな「うん？」

そして二人は旅館へ

まりな「こんにちは〜？二名で予約してままりなです」

「いらっしやいませ？お待ちしました、お部屋の方に案内しますね、こちらへどうぞ？」

〇〇「ありがとうございます？」

まりな「あ…そうだ、ここの宿泊チケットなんですけど」

「はい…こちらはチェックアウトの時で大丈夫ですよ」

まりな「あ…はいわかりました？」

「さ…(こ)ちらです？…どうぞお入りください」

〇〇「ありがとうございます？…おいしい部屋だなあ」

まりな「本当だ、結構いいねえ」

「ありがとうございます？夕飯は7時より、食堂のほうでバイキングがございます？(こ)ゆつくりとおくつろぎください？では失礼します」

〇〇「さて浴衣にでも着替えようか」

まりな「うん、そうしよう？…(こ)ここで一緒に着替える？」

〇〇「着替えないよ？…(こ)外で待ってるから終わったら呼んでくれ？」

まりな「ふふ♪冗談だよ、了解？」

○○「それじゃあ？」（外へ）

数分後

まりな「お待たせ？いいよ」

○○「了解？……に、似合ってるよ」

まりな「あ……○○くん鼻の下伸びてるよ……もう／＼」

○○「失礼？それじゃあ次は僕だな」

まりな「そうだね？」

〇〇「そうだな、じゃあ着替えるよ」

まりな「どうぞ?」

〇〇「うん…着替えたいから外で待っててくれ?」

まりな「私は気にしないよ?」

〇〇「いや?僕が気になるんだよ?…頼むから外で待っててくれ?」

まりな「しょうがないなあ、じゃあ終わったら呼んで?」(部屋の外へ)

〇〇「おう?よし…ここをこうして…よし出来た、まりなさんいいよ?」

まりな「了解?おお〇〇くんも似合ってるよ?」

〇〇「ありがとう?さて…旅館といたらここに座らずにはいられない♪」(旅館とか

のあのスペース)

まりな「あ…私も?なんか落ち着くよね、ここ」

〇〇「同感だよ、ちなみに正式名称は、広縁ていうらしい」

まりな「そうなんだ?私今日まで謎空間で言ってたよ」

〇〇「まあ僕も知るまではそうだったなあ」

まりな「でも知るとスッキリするよね?」

〇〇「だな?さてせっかく温泉に来たんだし、やっぱ温泉に入らないと」

まりな「そうだね?じゃあいこうか?」

〇〇「おう?」

廊下

〇〇「温泉楽しみだなあ」

まりな「私も?……そうだと夕飯終わったらさ、散歩しない?」

〇〇「散歩かあ、でも冷え込むぞ、まりなさんには風邪引かせたくないし」

まりな「でも函館の夜景みてみたいし、ね?せっかく函館に来たんだもん……」

〇〇「うーん……そうだな?じゃあ夕飯終わったら函館山にいく?」

まりな「やった?て、ついたみたいだね……じゃあまた後で」

〇〇「おう?また後で?」

カットオオ！…

〇〇「いやあ、さっぱりしたなあ」

まりな「だねえ？いい湯だったあ、夕飯まで時間あるね、どうする？」

〇〇「部屋に戻ってのんびりしよう、それとも卓球とかする？」

まりな「うーん…私も部屋でのんびりしたいかな、部屋のなかなら二人きりになれるから♪」

〇〇「二人きり…：／／」

まりな「ん？どうしたの？」

○○「あ？いえ？なんでない？」

まりな「そう？ならいいんだけど…と着いたね」

部屋

まりな「にしても雪景色綺麗だねえ」

○○「うん…凄く綺麗？あ…でも、まりなさんのがk…」

まりな「き…え？なに？なんて言おうとしたの？」

○○「…：…なんでもない／＼それより夕飯バイキングだったね、はやく夕飯になってほしいなあ」

まりな「慌てない慌てない？それよりも今は二人だけの時間を大切にしよう♪」

〇〇「そ、そうだな?…」

そして二人だけの時間が過ぎていった

夕飯時

まりな「そろそろ夕飯時だね、食堂にいこう?」

〇〇「もうそんな時間か、よしいこうか?」

食堂

まりな「わあ…美味しそうなのが一杯だ?」

〇〇「さ、盛りつけて食べよう?」

まりな「うん?」

二人はバイキングを楽しみ、楽しい食事の一時を過ごす、そして食事も終わり二人は函館山へ

函館山へ

まりな「さすがに寒いからか人いないね？」

〇〇「まあ冬だからな？……夜景綺麗だ？」

まりな「だね？寒いけどきて正解だったかも……普段は恋人同士で賑わってるのかな」

〇〇「まあ……確かに普段は賑わってるだろうなあ……ねえ、まりなさんはどうして僕を誘ったんだ？」

まりな「……それは〇〇くんと二人きりの時間を過ごしたかった……からかな？」

〇〇「……そんな、そんな事言われたら勘違いしちゃうじゃないですか」

まりな「〇〇……くん？」

〇〇「どうして…どうしてそんな期待させるような言うんですか！ずっと抑えてきたのに、そんな事言われたら…」

まりな「〇〇…くん、〇〇くん聞いて？普通はなんとも思っていない男の人を旅行に連れて誘わないよ？私が〇〇くんがいいから、〇〇くんじゃないと嫌だから旅行に誘ったの、ここの山に誘ったのもそのため」

〇〇「……え？つまり、どういう」

まりな「……一度だけしか言わないよ？〇〇くん私は…あなたが好きです、どうか私と付き合ってください」

〇〇「まりな…さん…はい、喜んで…そして僕からも言います、まりなさん…僕はあ

「あなたが好きです、どうか僕と付き合ってください」

「まりな……はい？喜んで♪…ねえ○○くん……ス

○○」……おう？、ま……まりな？」……ン……

蘭ちゃんからの

ある公園へ

〇〇「ふあ…今日はいい天気だなあ、さて…どうすつか…」

蘭「あれ…〇〇さんだ、ねえ〇〇さん」

〇〇「ん？…おお？蘭ちゃんこんにちは？、どうしたの？」

蘭「いや、なんか考え事してるみたいだったから」

〇〇「ああ、今日の夕飯どうしようか考えててさ」

蘭「そうだったんだ、鍋とかどう？」

○○「鍋かあ、でも一人で鍋は中々キツイよ？」

蘭「じゃあカレーとかは？」

○○「カレーかあ、いいな？よし決めた！カレーにするよ蘭ちゃんありがとうね？」

蘭「どういたしまして…ねえ、隣いい？」

○○「いいよ？」

蘭「ねえ○○さんは、恋人とかいないの？」

○○「いきなりだね？……恋人かあ、残念ながらないかな？」

蘭「…意外、てつきりいると思ってた」

〇〇「あははは？学生時代からモテなかったからねえ？」

蘭「そうなんだ、ねえ好きな人とかは？」

〇〇「うーん…いないかなあ」

蘭「まりなさんとかは？」

〇〇「まりなさんは好きだけど、先輩としてかな」

蘭「そう…じゃあ私が立候補したいって言ったら？」

〇〇「蘭ちゃんみたいな可愛い子から立候補されたら嬉しいなあ、でも気持ちだけ受け取っておくよ？年も離れすぎてるし今は色々厳しい世の中だからね？」

蘭「私は気にしないけど…」

○○「ありがとう？さて…そろそろ夕飯の買い物いかなきゃ、よいしょつと…それじゃあ蘭ちゃん、また？」

蘭「うん…ねえ買い物ついていっていい？」

○○「ん？いいよ？それじゃあいこうか」

蘭「うん？」

スーパ―

○○「まず人参と…確か玉ねぎと豚肉はあったから…ルー持ってきてもらえるかな？」

蘭「わかった、種類は？」

〇〇「〇〇〇〇ンドお願い出来るかな？」

蘭「わかった…：…お待たせ」

〇〇「ありがとう？よし、じゃあレジにいこう…：…なにか欲しいのある？」

蘭「私は特にない」

〇〇「了解？」

精算後

〇〇「レジ混んでたなあ？さて、それじゃあ僕は帰るよ蘭ちゃん」

蘭「うん…：…また明日」

〇〇「それじゃ？」 タツタタタタタタタタ…

〇〇が去った後

蘭「……〇〇さん私、諦めないから」

モカ「あ、蘭うまくいった？」

蘭「モカ……だめ」

モカ「おお蘭の告白をかわすなんて〇〇さんも罪な男ですな」

蘭「告白じゃないし／＼立候補でいっただけ／＼」

モカ「それを世間一般では告白というのですよ／＼じゃあ、次は〇〇さんの家についてみよ」

蘭「はあ!? てか……私〇〇さんの家知らないし?／＼」

モカ「ふふふくそこは抜かりないのですよ私○○さんのあとをつけて○○さんの家知ってるのだよ」

蘭「モカ…なにやってるの??」

モカ「ふふふく奥手な蘭のためにモカちゃん何でもやつちやうよそれじゃあ出発」

蘭「ちよ?待ってよ?」

黒服さん

弦巻家へ

〇〇「ああ…緊張するなあ？話してなんだろう？」ピンポーン

黒服A「〇〇様、お待ちしてました…こちらへどうぞ」

〇〇「お、おじゃまします？」

廊下へ

黒服A「今日はお忙しい中来ていただきありがとうございます、ところで〇〇様はお付き合いされてる女性はいらっしゃいますか？」

〇〇「いやあ…残念ながらお付き合いしてる女性いません？」

黒服A「そうでしたか…あ、この質問による私からの他意はございません」

〇〇「は……はあ」

黒服A「つきました、こちらの部屋でお待ちください」

〇〇「わかりました？」

〇〇「ふう…しかし、黒服さんたちは、いったいなんの用が…こころちゃんも」

こころく今度の休みに私の屋敷にきてちようだい、黒服さんの一人が話があるみたいなのゝ

〇〇「うーん…いったいなんのお話なんだろう？」

黒服 「失礼します」 コンコン

〇〇 「あ…どうぞ?」

黒服 B 「こ…こんにちは?…今日は来ていただきありがとうございますがどうぞ
ございます? 私は黒服 B といいます?」

〇〇 「ああこんにちは? 僕は C i R C L E のスタッフをしています〇〇といいます?」
ス名刺

黒服 B 「ありがとうございます、ちようだいします…あの今日呼んだのは私自身でござ
いまして…その…〇〇様は今、お付き合いしてる女性とかは?」

〇〇 「いやあそれが悲しい事にないんですよ?」

黒服B 「そうなのですか……よかった？」

○○○「え（汗）」

黒服B 「ああいえ？別に変な意味では？……あの○○様……私は……私はあなたの事が、好きなんです！／＼」

○○○「……黒服さん」

黒服B 「最初はこころ様からあなたの事を聞いてあなたの事を調べていました、しかし……あなたの事を調べていくうちに私はあなたにひかれていて……返事は今すぐでなくてもいいです……」

○○○「……黒服さん、そのすいません？はじめての事なのでどう返事したらいいのか？……ですから友達から……では駄目ですか？！」

黒服B 「友達……から……わかりました、では今日から友達ですね……？」 コンコン……ガ
チャキイ

こころ 「話はまとまったみたいね？ ねえ〇〇、ちよつと二人で話せないかしら」

〇〇 「……わかりました？ では黒服さん、ちよつと失礼しますね？」

黒服B 「は……はい？ あ、あのこころ様」

こころ 「大丈夫よ、別に酷い事を言ったりするわけじゃないわ、ちよつと二人で話したいだけだから」

黒服B 「は……はい？ では、〇〇様また後で」

庭園

こころ 「ごめんなさいね、驚かせちゃつて……でも黒服さんが、あんなにも顔を赤らめ

てたのは初めてだったわ……〇〇はどう思うかしら？……黒服さんの事」

〇〇様「そうですね……顔を赤らめたりしたりしてるとこは結構可愛らしく思えました……」

こころ「そう……ねえ〇〇私はあなたがどんな答えを出そうと私はあなたを責めないわ、だから……あなたはあなたなりに考えてみて」

〇〇「こころちゃん……はい？」

こころ「さ……私からは以上よ、黒服さんの元に戻ってあげて？」

〇〇「はい……では失礼します？」

黒服B「あ、〇〇様……その、こころ様とはどんな会話を」

〇〇「えーと、世間話みたいなものですか？……あ、それと黒服さん、せっかく友人同士

になったわけですし…様はやめませんか？」

黒服B 「はあ…ではどうお呼びすれば？」

〇〇 「好きな呼び方でいいですよ？〇〇でも〇〇つちでも」

黒服B 「では…〇〇と呼ばせていただきます？」

〇〇 「じゃあ敬語もなくさないかね？」

黒服B 「ごころ様？…敬語もですか？」

〇〇 「ええ、友達どうしなのに敬語はおかしいでしょ…だからさんづけや敬語はとって見たらどうかしら？きつと距離も縮まるわ」

〇〇 「た、確かに？では…び、B」

黒服B 「ま……〇……〇……／／」

「こころ「いい感じね？きつとこれから二人の距離はぐんぐんと近づくわ？私は応援してるからね♪」

〇〇「あ……で、では？今日は失礼します？B……ま……また？」

B 「え……あ……うん？また／／」

そして……黒服Bと〇〇が友人になってから一年後

黒服B 「あ……〇〇ー？」

〇〇「おお？B？……待ったか??」

黒服B 「いや…全然?…でも○○から呼び出すなんて珍しいな?」

○○ 「うん…あのさ僕たち今日で一年だよな、友達になつてから」

黒服B 「う…うん、あ…それじゃあひよつとして」

○○ 「あ…ああ…答えなんだ…その、ぼ…僕は…くくく…くううう／／／ああ／／／
…よしB!僕は…Bが好きだ!だから…僕と付き合つてくれ!」

黒服B 「ま…○○…もう待たせすぎ…やつとやつと言つてくれた…答えはもちろ
ん、はい?喜んで?」

○○ 「またせてごめん…でも、この一年でわかった…一生懸命なところ、でも可愛いと
こもあつて、そして他の人と話しているときに胸がチクチクして」

黒服B 「○○…ねえ○○私たちこ…恋人どうしになつたんだよな??」

〇〇「そ…そうだな？」

黒服B「じゃあ……記念の…ス」

〇〇「あ…ああ？……B…大好きだ？……ス」
ン…

練習後は二人で

♪

友希那「……時間ね、今日はここまで」

リサ「ふうくお疲れ？」

あこ「疲れた〜？でも、今日は凄くいい感じでしたよ？」

紗夜「ええ、ですがここで満足するのではなく次回は今日の演奏を越えるそういう気持ちでいなくてはいけません」

友希那「そうね、慢心はしてはならない各自自習練習をしっかりとこなすように」

あこ「はい？」

リサ「あ…ごめん？今日の反省会なんだけどアタシぬきでやってもらえるかな？」

紗夜「あら…なにか用事があるのですか？」

リサ「まあそんなところ？」

友希那「でも反省会はメンバー全員がいないと意味がないわ…しかたないわね反省会は明日にしましょう」

隣子「そうですね、私もそれがいいと思います」

リサ「本当ごめんね？埋め合わせはするから？」

紗夜「では反省会は明日ですね、今日はお疲れでした」ガチャ…パタン

メンバーがいなくなった後、スタジオ内々ガチャ…キイ

○○「いいかな？」

リサ「○○さん…うん？いいよ？」

○○「ヨイショ…なあいつ話す？僕たちの事」

リサ「うん、タイミングをみてさ話そうて思ってる」

○○「そつか…まあタイミングも大事だからな？」

リサ「うん？……ねえ○○さん」

○○「ん？どうした？」

リサ「今日は冷えるね？」

〇〇「そう……だな？おいで？こうすれば暖かいから」ギユ

リサ「うん……凄く暖かい」

数十分後

まりな「あ……あの～？いい雰囲気のところ申し訳ないんだけど〇〇くんそろそろ戻ってくれないとお姉さん困っちゃうなあ？」

〇〇「ああすいません？じゃありサ、また後で？」

リサ「うん？また後で」

そして数時間後

〇〇「では…まりなさんお先に失礼します？お疲れ様でした？」

まりな「お疲れ様？」

C i R C L E 外のカフェ

リサ「あ、〇〇さん？お疲れ様？」

〇〇「ありがとう？リサの顔をみたら疲れもぶっ飛んだだよ？」

リサ「もう誉めてもクッキーしかでないよ？／＼」

〇〇「そりゃ嬉しいな？…さ、いこうか送ってくよ？」

リサ「ありがとう？」

道中く

リサ「あ…ねえ○○さん、実はさ今日うちに両親いないんだよね、それでさ…どうかな？」

○○「いいのか？」

リサ「駄目だったら誘わないよ？…ひよつとして用事ある？」

○○「いやないよ？じゃあおじゃましようかな？…」

リサ「いらっしやい？美味しい料理ごちそうするよ？」

○○「これは楽しみだ？」

今井家く

リサ「ふう、あ…車どうしようか」

〇〇「ああ…じゃあ家においてくるよ」

リサ「オーケー？じゃあ待ってるから？」

〇〇「サンキュ♪じゃあちよつと置いてくる」ガチャ…ボタン…ブロロロ

数十分後くピンポーン

リサ「はーい？…あ、〇〇さんいらっしやい？上がって？」

〇〇「うん…おじやまします？」ガチャ…ボタン、カチャ

姉妹の取り合い

氷川家くピンポーン…ガチャ

紗夜「○○さん、お待ちしてました、さあ上がってください」

○○「おじやますす！」バタン

廊下く

紗夜「すいません、お忙しい中」

○○「いやいや、出勤日以外は基本ひまだからさ、こちらこそ呼んでくれてありがとうね？」

日菜「あ、○○さん？いらつしやーい♪」ドス

○○「日菜さん、こんにち…わゴフオ!？、ひ、日菜ちゃん？ちよつと離れてもらえな
いかな？」

紗夜「日菜？いきなり抱きついたら失礼でしょう？離れなさい？」

日菜「えー、せつかくのチャンスなのに」

紗夜「チャンスもなにもないでしょう？すいません？○○さん…」ハガシ

日菜「むー？あ、○○さん後で私の部屋にいこう♪」

紗夜「その前に一度リビングにいくわよ、さあ○○さん」腕組み

日菜「あれーお姉ちゃん、私のこと剥がしてそれはずるいんじゃない？」

紗夜「あら、私は抱きついてはいないわ、腕を組んでるだけよ」

日菜「じゃあ私も○○さんと腕組もうと♪○○さんいこう♪」

リビング

日菜「そうだ、○○さん今日は泊まれるよね？」

○○「え？いやまあ確かに大丈夫ですが、いきなりだどご迷惑がかかるんじゃないか？」

紗夜「そうよ日菜、ちなみに○○さん明日のご予定は？」

○○「明日ですか？明日は特に予定はないですよ、ですが今日はなにも用意していませんし…それにあなた方のご両親も駄目と言うと思いますよ？」

日菜「それなら大丈夫？お父さんとお母さん二人で旅行にいつてるから？」

〇〇「おや、そうでしたか」

紗夜「それで〇〇さんがよければ、泊まっていきませんか？」

〇〇「……わかりました？ご迷惑でなければ、一晩お世話になります？」

日菜「やったー？」

紗夜「ふふ、退屈はさせません？じゃあ〇〇さん、さっそく私の部屋にいきましょう」

日菜「えー〇〇さん私の部屋にいこうよ？」グイ

紗夜「いえ私の部屋にいきましょう」グイ

〇〇「あの、ここじゃ駄目ですかね？…というか、これ以上は引つ張らないで（汗）」

紗夜「まあ…○○さんが言うなら」

日菜「じゃあ寝るときは私と一緒にね」

紗夜「日菜、それは○○さんが決めることよ…○○さん、私と日菜とどちらと寝ますか?…リビングで一人は駄目ですよ?」

○○「…で、では紗夜さん…いいですか?」

紗夜「…?はい♪もちろんです?」

日菜「ちえー(?3?) ○○さん、今度きたときは私と寝ようね?」

○○「は…はい?」

そして、会話をすること数時間く

紗夜「あ…もうこんな時間、そろそろ夕飯のしたくをしないと、日菜…夕飯つくるわ
よ」

日菜「うん？○○さん、夕飯楽しみにしてて♪」

○○「手伝いますよ？さすがに、なにもしないのは申し訳ないですし？」

紗夜「いえ…○○さんはお客さんなんですから座って待っててください」

○○「しかし、それだと落ち着かないというか」

紗夜「では…皿並べや、調理の補助をお願いしますか？」

○○「はい？もちろんです？」

そして調理は進み

紗夜 「よし、できました？○○さん、こちらをテーブルに」

○○ 「はい？…日菜さん箸のほうお願いします」

日菜 「はーい♪並べたよ」

○○ 「こちらも並べ終わりました？」

紗夜 「では…いただきますよう」

○○ 「はい、いただきます？」

「いただきます？」

○○ 「うん…美味しい？凄く美味しいです？」

紗夜 「それはよかったです？」

日菜「ほらほら○○さん、これも食べて？あーん」

○○「はい、いただきます？…うん、これも美味しいです！」

紗夜「あ、○○さんこちら食べてみてください」

○○「はい？…うんこれも美味しいです？」

そして…食事も終わり就寝時間へ

紗夜部屋へ

○○「今日はお招きいただき、ありがとうございます？このお礼は必ずさせていただきます？」

紗夜「いえ…こちらこそ来ていただきありがとうございます？おかげで今日は安心し

て過ごせました」

〇〇「さて…時間も遅いですし、今日はもう寝ましようか」

紗夜「はい、ではおやすみなさい〇〇さん」

〇〇「はい、紗夜さんおやすみなさい？」

翌朝〇〇帰宅の時

〇〇「では…お世話になりました？」

日菜「〇〇さん次きた時は私と寝ようね？」

紗夜「〇〇さん、是非また来てください？」

〇〇「はい？…では失礼しますね、お世話になりました？」ガチャ…ボタン

恋物語は突然に

○○宅へ

まりな 「んん…あれ、私…」

○○ 「あ…気づきましたか、よかった？」

まりな 「○○くん…え？私なにがあつたの？」

○○ 「覚えてないですか？まりなさん、いきなり倒れたんですよ…多分風邪です熱もあるみたいですし」

まりな 「そういえば…ボーとするような」

○○「CIRCLEのオーナーさんには僕からいつておいたので、今日はゆっくり休んでください」

まりな「うん？／＼あ：○○くん体温計使いたいから、ちよつと後ろ向いてて貰えるかな?？」

○○「はい？わかりました？」

数分後くピピ、ピピ

まりな「いいよ：：37度、微熱だ」

○○「寒暖差が激しい日が続きましたからね、ゆっくり安静にしましょう」

まりな「うん：：そういえばここつて」

〇〇「はい、ここは僕の部屋です、さてお腹空きませんか？」

まりな「今のところは大丈夫かな…それより、〇〇くん今日はどこで寝るの？」

〇〇「僕ですか？まあ床にマットでもひいて寝ますよ、さすがにまりなさん一人には出来ませんから？」

まりな「でも悪いよ？」

〇〇「気にしないでください？風邪ひいてる人を床に寝かすわけにはいきませんからね？」

まりな「じゃあ、お言葉に甘えようかな？」

〇〇「是非そうしてください？…さて夕飯の支度してきますね」

まりな「了解？…」

〇〇「なにかあつたら呼んでください?では」ガチャ…キイ…ボタン

キツチン

〇〇「ふう……うううカアア?…まりなさん可愛いすぎるでしょ?、あの寝顔…可愛いすぎだよ?……ええい邪念を捨てる?、下心はいつさい捨てるんだ?自分?……よし、とりあえずお粥作るか」

その頃〇〇自室

まりな「まさか〇〇くん世話になるときがくるなんてね…ケツホ?、ご飯食べたらず薬飲まなきや?そういえば〇〇くんなに作ってるんだろ…あぁいいにおい」コンコン…ガチャ

〇〇「お待たせしました?お粥です、風邪にはお粥が一番ですからね?」

まりな「ありがとう? ……よかつたら食べさせてほしいな…駄目かな?」

〇〇「い? いえ? いいですよ / あーんしてください?」

まりな「あーん…うん、美味しいよ? 凄く」

〇〇「それはよかつた? さ…もう一口」

まりな「うん…美味しい? 〇〇くん…ありがとう?」

〇〇「どういたしまして?」

数分後…

まりな「ふう、美味しかった? ごちそうさま?」

〇〇「お粗末さまでした? では洗い物してきますね」

まりな「え…もうちよつて…はっ／＼」

〇〇「え…／＼」

まりな「いや？なんでもない／＼今のは忘れて／＼」

〇〇「は…はい／＼あ…じゃあ洗い物してきますね？」ガチャ…ボタン

まりな「私…なんであんな事を／＼」

そしてキツチン／＼

〇〇「あああああ／＼／＼なにあの可愛いのか、それに…あんな事言われたら意識しちゃうだろおおおお／＼…そういえば…このレンジ…さつきまで、まりなさんが

………バカか？俺は？なに考えてんだ？、早いとこ終わらせねえと？」ジャー…バ
シャバシャバシャ

そして再び〇〇自室へ

まりな「…〇〇くん料理上手だったな…私どうしたんだろ、〇〇くんの事ばかり考
えてる」コンコンコン…ガチャ…ボタン

〇〇「具合はどうですか？なにか欲しいものとかあつたら言ってください？」

まりな「特にないよ？大丈夫、あ薬飲まなきや？…コク…コク…コク…プハア、今日
はもう寝ようかな？」

〇〇「そ、そうですね？ではマット持ってくるので待ってください」

まりな「うん？」

数分後く

〇〇「ヨイシヨ…ふう、ではまりなさんおやすみなさいませ？」

まりな「うん？おやすみ？〇〇くん」……

数時間く深夜くカチ、カチ、カチ

まりな「…のど乾いちやった、お水飲もつと」

キツチンく

まりな「コク…コク…プハア…大分楽になつてきたし明日には治りそうかな？……今日
の出来事で〇〇くんの事かなりわかったかも…戻ろつと」

〇〇自室く

まりな「……可愛い寝顔してる……〇〇くん今日はありがとね？」サワ……

〇〇「ンン……まりなさ……ん可愛い……す……ぎ……スウスウ」

まりな「……!? / / え、(〇〇くんいま私のこと可愛いて / / ……それに……今のなに……
全身にびびって) ま……まさかね？」

そして翌日

まりな「ふあああ、よく寝た? ……〇〇くんはもう起きたんだ……昨日はいつたいなんだったんだろう……あ、手伝わなきや?」

リビング

〇〇「あ、おはようございます? ……まりなさん、具合はどうですか?」

まりな「う、うん？大丈夫？熱も下がったみたいだし今日から復帰かな？」

〇〇「それはよかったです？まりなさん今日からまた頑張りましょう♪」ニコ

まりな「……!?／＼（いまの、また？……やっぱり私…〇〇くん恋しちゃった／＼）」

〇〇「まりなさん？」

まりな「はっ…いや？なんでもない／＼うん…今日からまた頑張りよう？」

〇〇「はい？それじゃあ食べたらいきましようか」

まりな「う、うん／＼ね、ねえ〇〇くん」

〇〇「はい、なんででしょう？」

まりな「C i R C L E 終わったらさ、今日いいかな？話があるんだ／＼」

〇〇「は、はい？いいですよ？僕も…まりなさんに話がありましたから／＼／＼」

まりな「そっか？あ冷めちゃうね？じゃあ食べよう…」

〇〇「そ、そうですね？／＼では」

「「いただきます」」

いつかこの想いをあなたに

羽沢珈琲店へ

つぐみ「あ、いらっしやいませ？」

〇〇「こんにちは？いつもの貰えるかな？」

つぐみ「かしこまりました？少々おまちください」

〇〇「ヨイシヨツと、ふう」

つぐみ「おしぼりどうぞ？そういえば今日はお休みなんですか？」

〇〇「いや、今日は今から向かうんだ…ちよつとした用事があったね？」

つぐみ「そうだったんですか…お仕事頑張ってくださいね？」

〇〇「お、つぐみちゃんの笑顔みたらより一層頑張れそうだよ？」

つぐみ「もう／＼褒めてもなにもでませんよ？／＼」

つぐみ「あ、そろそろお持ちしますね………お待たせしました♪熱いのでお気をつけください」

〇〇「うん？美味しい？ズズー…」

つぐみ「…本当に美味しそうに飲むなあ〇〇さん……もう、あんな事されたら誰だつて意識しちゃうじゃないですか？」

回想く

「ああ!?!なんだこりや、虫はいつてんじやねえか」

つぐみ「も、申し訳ありません?すぐに取り換えますので?」

「いやさあ、取り替えても変わらないしごめんではすまないよなあ……へえ、よくみたら君可愛いじゃん、このあと俺と一緒に遊んでくれたら許してやるよ」

つぐみ「そ、それは?」

「ほらいこうよ、こんな所にいるより楽しいよま……いつ帰れるかわからないけどギヤハハハハ!」

〇〇「はあ……あのさあみつともないよ?第一、その虫……お前が自分でいれてたろ見たぞ?」

「あ？なににお前…ラブコメの主人公気取り？舐めた事してると痛い目みるよお？」

〇〇「じゃあ防犯カメラみてみようか、文句ないだろ？」

「うぐ？……うるせえんだよ！」ブン！

〇〇「うわ?!暴れるな？」シユ…ギュー

「あだだだだ？ギブ？ギブ？……ごめんなさい？もうしませんから？」

〇〇「その言葉に嘘はないな？」

「あ…ああ？」

〇〇「よし、じゃあ離してやるよ」

「はあはあ、クソツ？」チャリン（コーヒーの代金を起き逃げていく）

〇〇「ふう…あ、大丈夫？」

つぐみ「はい？大丈夫です？…あのありがとうございます？」

〇〇「いやいや、ああいう輩は許せない性分ですか？それに」

つぐみ「それに？」

〇〇「こんなに可愛い店員さんがピンチときたら尚更さ…なんて、ちよつとカツコつ
けちやつたな？」

つぐみ「…／＼可愛い…／＼」

〇〇「？…つぐみちゃん？」

つぐみ「はっ？…そ、そうですよ？カツコついたら台無しですよ？／＼」

〇〇「あははは？ いやぁ手厳しいなあ…」

再び戻って現代へ

つぐみ「(はぁ…この思いどうしたらいいんだろ)…」

〇〇「…ん…やーん？」

つぐみ「(それに…〇〇さん彼女いるかもしれないし)」

〇〇「おーい…つぐみちゃん？ 聞こえてる？」

つぐみ「…え？ ああはい？」

〇〇「お会計…いいかな？」

つぐみ 「はい?…500円になります?」

〇〇 「はい…しかし大丈夫?全然反応なかったけど」

つぐみ 「はい?大丈夫です?…ありがとうございます?」

〇〇 「そう?ならいいんだけど、悩みとかあつたら言つてよ話すだけでも違うからね」

つぐみ 「はい? (その悩みの種があなたなんですよ?)」

〇〇 「それじゃあ僕はいくよ、また来るから?」

つぐみ 「はい?…またのお越しをお待ちしてます?」

〇〇 「それじゃあ?」 カランカラン

つぐみ 「はあ…いくつか必ず伝えたいな、この好き…いや大好きって気持ちをお〇〇さん

伝えたいこの想いを

ある公園く

○○「うーん？いい天気、さしていただきませ」

リサ「○○さーん？」

○○「ぐほお!?!り、リサさん…いきなり抱きつくのはやめ…て？」

リサ「いやあ○○さんを見かけたらついね♪」

○○「ついてて?…ていうかりサさん?当たってる、当たってますからあ?／＼」

リサ「あ…ごめん?ごめん?(まあ当たてるんだけどね♪ほれサービス♪)」グイ

〇〇「うわわ／＼リサさん？とりあえず離して／＼」

リサ「しょうがないなあ…でも〇〇さん…こんな美少女に抱きつかれて離せとかバチが当たるとよ〜？」

〇〇「はは？でも流石にマズイからね？…それにリサさんは本当に魅力的なんだから、もつと自分を大事にしないと駄目だよ？」

リサ「はーい♪…そういえば公園でなにしてたの？」

〇〇「ん？まあウオーキングしてたんだけど、その休憩かな」

リサ「そっか…あれ、それは？」

〇〇「ん？ああ、さつきそこの商店街のお店で買ったんだ？一つ食べる？」

リサ「あ…じゃあ貰おうかな？いただきます」

〇〇「どうぞ♪…うん、美味しい？」

リサ「あそこのコロツケ美味しいからねえ？…うん美味しい♪」

〇〇「それに…なんて言うのかな、不思議な事にあそこのコロツケを食べると自然と笑顔になれるんだよね、だから気分が落ち込んでるときとかに食べると、元気になれるんだ」

リサ「〇〇さんでも落ち込むことあるんだ」

〇〇「そりやあるさ？リサさんはどうなのかな？」

リサ「アタシもまあ…落ち込むことはあるかな？…それよりさ…」

○○「なにかな？」

リサ「○○さんは…この状況で緊張とকাশないのかなあ…とか思ってたさ？」

○○「うーん…正直いうと緊張はするかな、リサさんみたいな魅力的な人といったら、やっぱりね？」

リサ「えー、結構落ち着いて見えるけどなあ」

○○「そりや装ってたからさ？…それよりリサさんは……………」

リサ「ん？なに？」

○○「いや…なんでもないよ?……」

リサ「そう?……ふう美味しかった?じゃあ…アタシはそろそろいくね、○○さんまた明日?」

○○「おうまた明日?」

リサ「じゃね?…」

リサ姉がさった後一人○○は

○○「……はあ言えるわけないよなあ、あんな事聞いたら変に警戒されるだろうし…
第一年の差がな?…はあ……どうすりゃいいんだ」

一方リサ姉は

リサ「○○さん…なに聞きたかったんだろう、ひよつとして彼氏がいるか?……」

それはないか?…○○さん彼女いるのかな?いるとしたら、やっぱまりなさん当たりかなあ仕事中也親しげに話したりしてるし…あはは?…私どうしたらいいんだろ?」
数日後 C i R C L E スタジオにて

友希那「リサ…集中して乱れぎみよ」

燐子「そう…ですね走り気味だったり遅れ気味だったり」

紗夜「そうですね…今井さんにかあつたのですか?」

リサ「ごめん?特にないんだけどね?…スランプなのかなあ?」

あこ「リサ姉大丈夫?」

リサ「大丈夫?…ごめん今日はもう抜けてもいいかな?…これ以上は皆の足引つ張るだけだしさ?」

友希那「…そうね、それがいいわ…」

リサ「う…うん？本当にごめんね？自主練習はしつかりするから？それじゃあ？」

友希那「……さ、練習を続けましょう」

〇〇「あれ、今日はもういいのかい？」

リサ「ああ…いや？今日は私だけ先に抜けるんだ？ちよつと演奏が乱れぎみでさ？」

〇〇「そつか…まあそういう時もあるよね？…じゃあ気をつけて帰ってね？」

リサ「うん？それじゃあ？…」カランカラン

リサ姉自宅く

リサ「…はあ、どうしたらいいんだろ、気がついたら○○さんの事好きになって○○さんの事ばかり考えてて友希那はこういうの鈍いだろうし？」

一方CIRCLE

○○「……（リサさんどうしたんだろなあ、まさか…好きな人が出来た…のかな）」

まりな「……ん？くーん？…○……くん」

○○「（もしそうならやっぱり年の近い人なのかなあ）」

まりな「○○くんてばっ？」

○○「あっ？はい？」

まりな「もうさつきから呼んでたんだよ？なのに返事ないし……ずーとボーとしてたし」

〇〇「すいません？少し考え事してたので？」

まりな「なにか悩みでもあるの？」

〇〇「……まあ少しだけ？C i R C L Eが終わったら少しいいですか？」

まりな「いいよ？お姉さんになんでも話して？」

〇〇「ありがとうございます？」

そしてC i R C L E閉店後

まりな「それで……どうしたの？」

○○「まあ…その恋の悩みといえますか?…気がついたらその人の事好きになって、でも年が離れてるから望が薄いというか」

まりな「そっか?…よかつたら教えてくれないかな?その人の名前」

○○「その…今井リサさん、なんですよ?」

まりな「そっか?…ねえ○○くんやらずに後悔するよりやって後悔するて、いうでしよ?だから○○さん…当たって砕ける気持ちで言ってみたらどうかな?」

○○「当たって砕ける気持ちで…」

まりな「そう…じゃないと○○くんきつと後悔するよ」

○○「まりなさん…はい、当たって砕けてこようと思います」

まりな「うん?頑張つて?さて…お疲れ様、明日もよろしく!」

〇〇「はい？お疲れ様でした？」

翌日〽C i R C L E スタジオにて……〽♪……

リサ「……ごめんね？今日もちよつと集中できてないや？……ちよつと休憩いつてくる？」ガチャ……キィ

あこ「リサ姉？……」

友希那「はぁ困ったわね、どうしたのかしらリサ……」

C i R C L E 外のカフェ

リサ「……全然集中出来ない、集中しようとすればするほど〇〇さんの事を考えて心

臍もバクバクして」

まりな「ここいいかな？」

リサ「まりなさん？はい、どうぞ？」

まりな「なにか…悩みでもあるの？」

リサ「あの…まりなさんは好きな人と年のさが離れてたらどうしますか??」

まりな「私は…伝えるかな？後悔はしたくないから…実は私の知り合いに先日相談されたんだ年下の人を好きになったけど、どうすばいいかって…だから私はこう答えたの当たって砕けろって」

リサ「当たって砕けろですか」

まりな「うん…やらずに後悔するよりやって後悔するていうからね?…そうだリサ

ちゃんCIRCLE終わったら呼ぶから、ちよつと来てくれないかな？」

リサ「え？はい…わかりました？」

まりな「ありがとう？さて…そろそろ私は仕事に戻るね」

リサ「わかりました？じゃあまた後で？」

まりな「うん？…リサちゃんも頑張ってるね？」

CIRCLEロビー

まりな「そうだ〇〇くんCIRCLE終わったら話があるから、残ってくれるかな？」

〇〇「はい…わかりました？」

まりな「ありがとう？（ふう…二人とも私に出来るのはここまで、後は二人次第だ

よ…頑張って?」

そしてC i R C L E 閉店後

リサ「あの…まりなさん?」

まりな「いらっしやい?来てくれてありがとう…と言いたいんだけど、ちよつと急用ができちやつて、だからごめんね?〇〇くんが変わりに対応してくれるから?それじゃあ?」

リサ「ちよつと?…いつちやつた、てか〇〇さんて?ヤバい心の準備が?」

〇〇「お待たせしましたくて、あれリサさんどうしたの、忘れ物でもした?」

リサ「あれ、まりなさんから聞いてない??」

〇〇「いや、僕もまりなさんに残るように言われてさ？あれ？まりなさんは？」

リサ「まりなさんなら急用が出来たとかでさつき帰ったよ？」

〇〇「ええ？…仕方ないな？…それじゃあこれ以上はここに仕方ないし帰るか？リサさん家まで送るよ、いこうK」

リサ「待って？…ちよつといいかな…〇〇さん」

〇〇「…いいよ？どうしたの？」

リサ「実はさ…アタシ好きな人が出来てさ？…ただ、その人が年上なんだよね？」

〇〇「…ツ？…そ、そっか？…それで相談…か…な??」

リサ 「うんうん違うよ？だって…アタシの好きな人○○さん…だもん／＼」

○○ 「…え？リサ…さん」

リサ 「いきなりで困るよね？でも…気がついたら○○さんの事好きになってさ？…でも後悔はしたくないから？…返事はいいから？だけ？」

○○ 「リサさん！」

リサ 「は…はい？…あの○○さん??」

○○ 「…少しいいかな？」

リサ 「う、うん？」

○○ 「実はさ…僕も好きな人が出来てさ？…ただ年下で年のさも離れてて悩んでて

さ、でもある人にやらずに後悔するよりやって後悔するって言われて、決心がついてね…この想いを伝えようと決めてた人がいたんだ、だけど…まさか先に言われるなんてなあ、しかも今さつき…」

リサ「え…それって…」

〇〇「先を超されちゃったけど僕からも言うね、リサさん…僕は君が好きだ」

リサ「〇…〇さん、これ夢じゃないよね、本当にアタシたち？…〇〇さん答えはもちろん、うん？よろしく！」

〇〇「…は…はは？まさか両想いだったなんてね？リサさん…いやリサ」

リサ「うん…〇〇さん♪」

「これから、よろしく♪」「チュ

燐子ちゃんと特訓

C i R C L E スタジオにて

〇〇「♪♪♪」(曲は好きなご想像ください)

〇〇「♪♪♪…ふう、やっぱりキーボードは楽しいなあ…よしもう一曲」

燐子「あの…〇〇さん？」

〇〇「ん？うお？燐子ちゃん、何時からいたのかな？」

燐子「10分ほど前から…でも〇〇さんキーボードお上手なんですネ」

〇〇「まあ買ってから随分と引いてるからねえ、たまにここ使わせてもらってるんだ？」

「燐子「そうだったのですね…でも本当にお上手だと思えますよ…少し荒い部府はありますが、そこをなくしたら〇〇さんもっと凄くなると思います?」

〇〇「そうかな??…よしやる気が出てきた? 今日から特訓だ♪」

燐子「あの…よかつたら私がコーチしましょうか??」

〇〇「燐子ちゃんが? でも燐子ちゃんも忙しいでしょ、悪いよ?」

燐子「私は大丈夫ですよ? あ…私じゃ…嫌…ですか??」

〇〇「まさか? むしろお願いしたいくらいだよ? でも…本当にいいの?」

燐子「はい…そして一週間後、発表しましょう」

〇〇「はっ発表!??」

燐子「はい…さあ今日から頑張りますよう」

〇〇「発表…か、よし？じゃあ一週間後の発表にむけて頑張りますか？師匠、よろしくお願いします！」

燐子「し師匠だなんて？／＼今までみたいに燐子で呼んでください？／＼」

〇〇「いやいや、やっぱり教えをこう立場だからね、じゃあ燐子師匠で呼ばせくれな
いかな？」

燐子「そ…それなら／＼それじゃあ、特訓始めましょうか／＼」

〇〇「そ、そうだね？じゃあお願いします？」

燐子「はい…まず…：…：…：…：…：…」

そして練習三日目

〇〇「♪…：…：…：…：…：…」

燐子「いい感じですか？演奏の時の雑味もかなりなくなってきました」

〇〇「それは嬉しいな」

燐子「発表は今週の日曜日です、頑張りましょうね？」

〇〇「はい？頑張りましょう？」

数日後、C i R C L Eにて

♪…

燐子「ふう…」

友希那「燐子、いい感じね…ここ最近は特にいい感じだわ」

燐子「友希那さん…ありがとうございます？」

あこ「特にさっきのサビのところなんて、ババーン！て感じだったよ？」

紗夜「やはり、例のあれが効いてるのでしょいかね…そういうえば彼のほうはどうなんですか？」

燐子「はい…いい感じですよ…雑味も全くなくなってきましたし」

友希那「そう…まあ燐子からいきなり彼の演奏をきいてほしいと言われた時はかなり

驚いたけど」

リサ「そうだねえ…まあ燐子が言うなら間違いはないか…燐子…楽しみにしてるよ？」

燐子「はい…楽しみにしててください」

翌日

〇〇「そっか、皆さんそのような事を」

燐子「はい、皆さん楽しみにしてましたよ」

〇〇「これは責任大だね？よし…じゃあ今日も特訓お願いします？」

燐子「はい、始めましょうか…では今日は…♪…♪…」

〇〇「〜♪……♪………」

燐子「……雑味が一切なくなってる、〇〇さんこれなら?」

〇〇「うん? 恥じることなく、皆さんに発表できる? 燐子ちゃんありがとう?」ギユ

燐子「い……いえ／＼では〇〇さん次は発表の時に」

〇〇「うん? 本当にありがとう?」

そして…迎えた発表当日

〇〇「皆さん…今日は来ていただきありがとうございます?」

友希那「燐子からきいてるわ、さあ始めて」

○○「はい？では……」(曲は好きな曲を、想像ください)

友希那「……これは」

紗夜「ええ……白金さんが推す理由もわかりました」

リサ「……雑味がないなんでもんじゃない、まるでその世界にいるような」

○○「〜♪〜……♪(楽しい、弾くたびに気分が高揚していく、いつまでも弾いていたい……さあラストだ?)〜♪……」

友希那「○○凄かったわ、世界観に引き込むような技術」

紗夜「白金さんからきいてはいましたが、私たちの想像をはるかに越えてました」

リサ「本当に凄かったよ？ねえアンコールいいかな？」

あこ「あこも？○○さんの演奏もつとききたい？」

友希那「私からもお願い、もう一曲お願い出来るかしら」

紗夜「私からもお願いします」

○○「わかりました？ではもう一曲いきます？……よし……♪……♪」

数時間後

○○「……ボー」ガチャ

燐子「あれ○○さん、まだいたんですね」

○○「まあね、余韻に浸ってたんだ」

燐子「そうだったんですか…今日の演奏、一番よかったですよ」

〇〇「ありがとうございます……」

燐子「……」

「あの」

燐子「〇〇さんからどうぞ？」

〇〇「いやいや、燐子ちゃんからどうぞ？」

燐子「では……〇〇さん、よかったらこれからは私とセッションしませんか？もちろん時間があつた時に」

〇〇「お、いいね？是非そうしよう♪さて、そろそろいこうかな…じゃあ燐子ちゃん今度一緒に」

燐子「はい？では…また」

キイ…ボタン

モカちゃんとパンパーティー

○○宅へピンポーン

○○「いらっしやい？」

モカ「どうもくお邪魔します」

○○「美味しいパンをいっぱい用意したよ？さき、あがつて」

モカ「お邪魔します」

リビングへ

○○「今日は山吹ベーカリーさんのところでパンでパーティーだ？ いっぱいあるからど
んどん食べて」

モカ「○○さん太っ腹〜？」

○○「それじゃあ、パンと飲み物を持って……乾杯？」

モカ「乾杯〜？」

○○「うーん、このメロンパン美味しい？」

モカ「このフランスパンも美味しいですよ〜」

○○「あそこのパンは全部美味しいからね？……ハム……ほらチョココロネも」

モカ「いただきま〜す?…:…:美味しい?」

〇〇「モカちゃん、ほら飲み物も」

モカ「ありがとうございます、そういうえば…:他の人は来ないんですか?」

〇〇「誘ってはいただけだね、皆さん用事があるみたいで?」

モカ「そうだったんですか〜でも…:このパン本当に美味しい?」

〇〇「それは同感かな?ほら、コロツケパンも」

そして数時間後〜

モカ「ふう〜パンをたくさん食べられて、モカちゃんは幸せの絶頂なのですよ〜」

〇〇「いやあ食べた食べた?…:また機会があつたらしようかパンパーティー」

モカ「もちろんですよ…おつとちよつとお花摘みに〜」

○○「いつてらっしやい？」

モカ「ではでは…キャ？」（もつれて倒れかける）

○○「おつと？大丈夫??」

モカ「はい、大丈夫…!?!／＼」

○○「?…どうしたの…て、近かったね?ごめんね?」

モカ「いえいえ…あ、では失礼しま〜す…／＼」

数分後〜

モカ「……あの……〇〇さん、さつきはありがとうございました……／＼」

〇〇「いやいや？…怪我がなくてよかったですよ？」

モカ「あ…そうだ〇〇さんちよつといいですか？」

〇〇「ん？なにかn…」

モカ「……プハツ……〇〇さんこのキスの意味わかりますか？」

〇〇「き…キス…ええま!?!／＼モカちゃん…いつたいなにを?／＼」

モカ「行動の通りですよ…／＼私は〇〇さんが好きってメッセージ…／＼」

〇〇「で…でも何故?／＼」

モカ「〇〇さん、女の子が好きでもない男の人の家に、一人では来ないですよ？」

○○「……」

モカ「○○さんを信頼してて、○○さんを好きだから残ったのですよ……返事はすぐでなくていいですから」

○○「モカちゃん」

モカ「では……飲み物だけになりましたが……パーティーを続けましょう」

○○「う……うん／＼」

そしてパーティーは進み

○○「あ……もうこんな時間か、そろそろ暗くなり始めるころだし今日はお開きにしようか……」

モカ「そうですね〜…〇〇さん今日はありがとうございます〜」

〇〇「こちらこそ来てくれてありがとうね?…じゃ、じゃあまた明日／＼」

モカ「っ／＼はい、また明日〜／＼」

モカちゃんが帰ったあと、一人自宅で〜

〇〇「…モカちゃん、いつたい何時から僕の事を…」

モカ（〇〇さんが好きてメッセージ〜）

〇〇「…モカちゃん、君が想いを伝えてくれたなら、僕は応えないといけないね…
モカちゃん僕は…」

香澄ちゃんと星空鑑賞

公園へ

〇〇「はあはあ…はあはあ…ふう…ちよつと休憩するかヨイシヨ…ああ、夜空が綺麗だなあ」

香澄「〇〇さん？」

〇〇「お、香澄ちゃん…こんばんは？でも、夜も遅いから危ないよ？」

香澄「えへへ…外を出たら星が綺麗で、ドキドキしたから公園まで来ちゃいました？」

〇〇「そっか…でも今の世の中物騒だからね、香澄ちゃん可愛いんだから気をつけないといけないよ？」

香澄「あっははは／＼」

〇〇「まあ…せっかくなんだし、星…一緒に見てく？」

香澄「いいんですか？はい？…綺麗ですよね」

〇〇「そうだね？それに」

香澄「それに？」

〇〇「香澄ちゃんみたいな可愛いこと一緒だと、星空鑑賞も一層楽しくなるよ？」

香澄「あ…ひよつとして口説いてます？」

〇〇「はは、そうだとしたらどうする？」

香澄 「まりなさんに言いつけちゃいますよ？昨日公園で口説かれちゃったって」

〇〇 「おつと？こりゃ手厳しいや？」

香澄 「でも〇〇さんなら、悪くはおもいわないです／＼」

〇〇 「はは、嬉しいこといつてくれるね？しかし、冷え込むなあ？香澄ちゃん大丈夫？」

香澄 「はい？大丈夫です？、〇〇さんこそ大丈夫ですか？」

〇〇 「僕かい？大丈夫だよ？…」

香澄 「そうだ？こうすれば暖かいですよ？ほらギユて」

〇〇 「…そうだね？そうだ、ココア買ったんだけど飲む？」

香澄 「でも○○さんのじゃあ」

○○ 「それなら大丈夫？また後で買うから？」

香澄 「じゃあ…いただきます？…コク…あー暖まるう？」

○○ 「それはよかった？あ…ねえ…香澄ちゃんは将来どうしたいのかな？」

香澄 「将来ですか？うーん、まだ分からないですけど…一つだけ、それポピパのみんなといつまでもバンドをしたいって気持ちはあります？」

○○ 「そっか…香澄ちゃんその気持ち大事にね？」

香澄 「はい？○○さんは、なにか夢とかないんですか？」

○○ 「ん？夢かい？うーん、僕の夢は…君たちガールズバンドのこ達を、最大限に輝

かせること…かな？」

香澄 「あ…なんか誤魔化された気が?…」

〇〇 「はは?…でもそうだね、一つだけ答えるとしたら、音楽に携わる仕事をするとどったかな？」

香澄 「だから…いまの仕事に」

〇〇 「まあね…今も、これから先も君たちを最大限に輝かせる?」

香澄 「なんかカツコいいです?」

〇〇 「ありがとうございます?さて、時間も遅くなってきたしそろそろ帰ろうか送ってくよ?」

香澄 「ありがとうございます?…じゃあいきしょうか♪」

○○「いこう♪」

道中

香澄「でも星きれいだったなあ？ね、○○さんはどうでした？」

○○「綺麗だったよ？冬の星空鑑賞もたまには悪くないね」

香澄「でしょう??そうだ…家につくまでキラキラ星うたいませんか？」

○○「キラキラ星かあ、いいね？歌おう♪」

香澄「じゃあ…♪♪♪」

○○「♪♪♪…♪♪♪」

香澄「♪♪…あ、つきましたね…○○さん今日はありがとうございました？」

〇〇「こっちこそ遅くまでありがとうね？じゃあ、また明日？」

香澄「はい？また明日？」 ガチャ…ボタン

年の差なんて関係ない!

C i R C L E 〳 外のカフェ

〇〇 「うーん?…」

あこ 「〇〇さーん?…」

〇〇 「あこちゃん、こんにちは?」

あこ 「今日は休みなんですか?」

〇〇 「まあね? そうだ、なんか飲む?」

あこ「あ…いえ?…でも○○さんと一緒にお出かけしたいです」

○○「お出かけかあ、いいよ? 出掛けようか…じゃあ飲み終えちゃうからちよつと待っててくれるかな?」

あこ「はい? しかし…今日はいい天気ですよね? 2月とは思えない暖かさですし」

○○「そうだね? まあ春が近いてことじゃないかな? ズズ…ふうお出かけは歩きと車どっちがいいかな?」

あこ「うーん…やっぱり車がいいです、○○さんのあの車すごくカッコいいですし」

○○「オーケー♪しかし嬉しいこといつてくれるねえ、あの車は免許とる前から憧れててさ、もう絶対に乗るって決めてたんだよ」

あこ「夢がかなってよかったですね?」

〇〇「うん? さて飲み終えた事だし…いこうか♪」

あこ「はい?」

道中

あこ「ねえ〇〇さん、〇〇さんの車も確かにカッコいいんですけど…気持ち離れそうになったことはあるんですか?」

〇〇「それはGTRやNSXのことかな? 確かにあの車もいい車だけど、それでもやはり…僕が一番推す車は変わらないかな」

あこ「べた惚れなんですネ、ちよつと妬いちゃいます」

〇〇「はは…あの車が好きになつたきつかけはあるアニメでさ…一目惚れてああいうのをいうのかな…もうズドンと撃ち抜かれちゃったよ」

あこ「そうなんですネ？」

○○「さあ…着いた…じゃあちよつと鍵取つてくるから玄関で待つててくれるかな？
最近は何騒だからさ？」

あこ「はい、わかりました？」

道中

あこ「ねえ○○さん、○○さんの車も確かにカッコいいんですけど…気持ち離れそうになったことはあるんですか？」

○○「それはGTRやNSXのことかな？確かにあの車もいい車だけど、それでもやはり…僕が一番推す車は変わらないかな」

あこ「べた惚れなんですネ、ちよつと妬いちゃいます」

〇〇「はは…あの車が好きになっただきっかけはあるアニメでさ…一目惚れてああいうのをいうのかな…もうズドンと撃ち抜かれちゃったよ」

あこ「そうなんですネ？」

〇〇「さあ…着いた…じゃあちよつと鍵取ってくるから玄関で待つててくれるかな？
最近は何騒だからさ？」

あこ「はい、わかりました？」

数分後

〇〇「お待たせ？それじゃあいこうか」

あこ「はい？」ガチャ…ガチャ…バン

〇〇「さて、どこいこうか」

あこ「とりあえず、走りながら決めませんか？」

○○「そうだね？じゃあ出発？」プロロロ／＼

あこ「○○さんとお出かけ♪○○さん：せっかくですから二人だけに、なれる所がいいです／＼」

○○「あははは？あこちゃん：そういうセリフは勘違いさせちゃうからあまり男の人には言っちゃ駄目だよ？」

あこ「あこは本気だもん？」

○○「はは：あこちゃんがそのセリフを言うときがくるのはもつと先だよ、さて：ゲームセンターにでもいかない？それともカラオケがいいかな？」

あこ「じゃあ：カラオケがいいですか？」

〇〇「了解!それじゃあ出発?」ブロロロ

カラオケボックス

〇〇「さて…なに歌おうか」

あこ「まずは熱色から歌いです?」

〇〇「よし、じゃあ…まずは熱色から歌おうか?送信」ピピ…

♪

あこは「♪」

〇〇「♪…」

あこ「♪…はあスツキリした」

〇〇「いやあ…歌はいいね…歌はリリンのうみだ」

あこ「ストップ？〇〇さん…それ以上はいけません？」

〇〇「えー？…何故だい？」

あこ「あこにも分かんないけど…あこの勘がこれ以上はいけないと言ってます？」

〇〇「まああこちゃんが言うなら？」

その後も色々な歌を歌い、あつという間に終了時間に

あこ「はあ楽しかった？…でも、もう終わりかあ」

〇〇「また今度こようね」

あこ「約束ですよ?…」

〇〇「さ、出ようか」

あこ「はい!」

〇〇「すいませーん」

「はい、ありがとうございます?…1500円になります」

〇〇「ではちようどで」

「丁度でいただきます…ありがとうございます?」

車内

〇〇「さて…そろそろ帰ろうか…この時季は暗くなるのもはやいし」

あこ「でも？あこは…まだ帰りたくないです」

〇〇「あこちゃん…そのセリフはあこちゃんが本当に好きだよ」

あこ「あこは！…あこは本当に〇〇さんが、あこのカッコいいセリフを一緒に考えてくれたり…〇〇さんが車の事を楽しそうに話す〇〇さんが…」

〇〇「あこちゃん…」

あこ「やっぱり、〇〇さんはあこみたいな子供はタイプじゃないですか？…」

〇〇「あこちゃん…聞いてくれ、あこちゃんは凄く可愛いし魅力的だ、でも…きつと

周りはそれを許さないとおもう、僕が非難を浴びるのはいい…しかしあこちゃんが非難されるのは…辛いんだ、それに、それだけじゃないC i R C L Eにも迷惑をかけてしまう」

あこ「年の差なんて関係ない!○○さん、あこは本当の本気で○○さんが好きなんです!」

○○「あこちゃん……」ブウン!ブロロロ

あこ「○○さん…何処にいくんですか?」

○○「あこちゃんのお家さ」

あこ「そんな……」

○○「僕はバカだったよ、一人の女の子がこんなにも真っ直ぐに気持ちをつづけてきてるのに、自分に都合のいい理由をつけてかわしたりして…でも目がさめた」

あこ「そ、それじゃあ」

〇〇「先ずは…挨拶をしないとね、交際を認めてもらえるように」

あこ「…はい？あこも援護します？」プロロロ／＼宇田川家前／＼

〇〇「ふう、緊張するなあ？」

あこ「あこには秘策があります、だから…〇〇さんは真っ直ぐに気持ちをつづけてください」

〇〇「うん？…いこう」

あこ「はい？」ピンポン…

〇〇「お邪魔します？」バタン

ツンデレ少女とミニデート

街中…ブオン！ブロロロ…キィ

〇〇「ふう買った買った、けっこういいのが買えたな？ん？あれは…」

有咲「あれ…〇〇さんじゃんか」

〇〇「おお、やっぱり有咲ちゃんだった？いま帰りかい？」

有咲「まあな、〇〇さんは？」

〇〇「ん？僕は買い出しかな今日は休みだったからさ…そうだついでだからおくつて
こころか？」

有咲 「いや…でも悪いし」

○○ 「なあにきにしなさんなって、それに有咲ちゃん位の可愛いこだとデート気分も味わえるから」

有咲 「な!?!それ…私をナンパしてるってことじゃねえか? / /」

○○ 「あははは…まあ下心はないから安心してよ」

有咲 「いまの言葉をきいて信用できるか? / /」

○○ 「だよねえ?」

有咲 「で、でも○○さんがどうしてもって言うなら…送らせてやってもいいぞ / /」

○○ 「ぜひ…送らせてほしいな?」

有咲「しよ、しようがねえな／＼ほら、道案内するから出発してくれ」ガチャ…バン

○○「了解…じゃあ出発？」ブロロロ

道中

有咲「な、なあ○○さんはさ…どうしていまの仕事についたんだ？」

○○「ん？まあ音楽に関わる仕事をしたかったから…かな？」

有咲「でもそれなら歌手とかのがよかったんじゃないの？」

○○「歌手か…まあ目指して時期はあったよ、結局諦めちゃったけどね」

有咲「ふーん、あ、そこ右…あ、だから今の仕事についたのか？」

〇〇「まあね音楽から離れるのは考えなかったからさ、それに今の夢は君たちバンドの子達を輝かせるのが僕の夢さ」

有咲「そうなのか、で…でも…もしスカウトが来たらどうする？」

〇〇「ん？ひよつとして僕がやめたら寂しいかい？」

有咲「ち、ちげーし／＼興味本意で聞いただけだし／＼」

〇〇「そっか…まあ、もしそういう話が来ても…断るとおもう」

有咲「な、なんでだよ？夢だったんじゃないのか？」

〇〇「前までの僕なら、受けてたかもね…でもねさつきも言ったように僕の今の夢は君たちバンドの子達を輝かせるのが僕の夢だから？」

有咲「そっか…じゃあ約束だかな／＼私たちを輝かせてくれるって」

〇〇「ああ、約束する？君たちを極限まで輝かせるって」

有咲「約束したかな？契約違反したら承知しねえぞ／＼」

〇〇「おつと…こりや約束は破れないな？大丈夫…絶対約束は守るよ？」

有咲「や、約束だぞ／＼あ、着いた止めてくれ」

〇〇「了解？…」キィ

有咲「それじゃあ…ありがとうな／＼送ってくれ」

〇〇「いやいや、どういたしまして？今日も蔵で練習あるのかい？」

有咲「まあな、そろそろ香澄たちもくる頃だとおもう」

〇〇 「そっか…練習頑張ってるね？」

有咲 「そっちこそ気をつけて帰れよな」

〇〇 「もちろん分かってるよ？…それじゃあ」ブオン…ブロロロ…

まりなさんご乱心（キャラ崩壊注意）

まりな宅…ピンポーン…ガチャ

〇〇「あ、まりなさん…駄目でs」

まりな「〇〇くんいらっしやい♪さああがつて♪あがつて♪…お礼になんでもするよ？」

〇〇「いや…お構い無く？て、お酒くさ？まりなさん相当飲んでるでしょ？」

まりな「全然のんでないよ？缶チューハイ2本だけ」

〇〇「充分ですよ？とりあえず、はい携帯です、ちゃんと確認しないと駄目ですよ？

…それと離してください」

まりな「ありがとう♪…むうこんな美人なお姉さんに離せなんてバチあたるよ？それとも照れてる？」

〇〇「照れてないですよ／＼でも、男の人をいきなり家に引つ張りこんでベタバタしたら勘違いされちゃいますよ？というか危ないですよ？」

まりな「〇〇くんだからだよ？…でもありがとう♪お礼にチュー♪」

〇〇「いらー？…あり？」

まりな「スー…スー…うーん、〇〇くん逃げるな…スヤア」

〇〇「寝てるし？というか夢のなかまで襲ってるのか？…」

〇〇「とりあえず布団に運ぶか…よいしょ、うを？軽いなあ…ヨイシヨ…ふう、まつ

「たく飲み過ぎは駄目ですよ？まりなさん」

まりな「……」

〇〇「さて、まりなさんも寝ちやったし帰るk…」ガシ…

まりな「もう、美人なお姉さんが無防備に寝てるのに手を出さないなんて、据え膳はなんとやらだよ？」

〇〇「まだ酔ってんですか？てかいつ起きたんです？」

まりな「〇〇くんが私をお姫さま抱っこしてくれたあたりかな？……ねえ〇〇くん
いつしよに寝てほしいな、だめ？」

〇〇「駄目ですよ？僕は男なんですから？……まりなさんが寝るまでいつしよにいますから」

まりな「むう……しょうがないか……それじゃ○○くん」

○○「ん？なんでしょ……うわあ!？」

まりな「ふふふ、相手が女の人でも隙をみせちゃいけないよ？さあいつしよに寝よ♪」

○○「だから駄目です……て離れない？どこにそんな力が」

まりな「普段から重い機材とか持ったりしてたからね♪明日は一緒に出勤しよう♪
おやすみく？……」

○○「……離れないし、寝ちやった？……仕方ないあきらめて寝よう……おやすみなさい、
まりなさん……スヤア……」

翌朝

まりな「うーん頭いたい？……なんで○○くんが私の部屋に??え？待って?……昨日の

記憶が飛んでる？確か○○くんが携帯を持ってきてくれたのは覚える？………そこからの記憶が……やっっちゃった??お酒の勢いで○○くんと……サア―

○○「んん……ふあ……あ、まりなさんおはようございます」

まりな「お、おはよう?……ねえ、○○くん昨日わたし○○くんと」

○○「はい寝ましたよ?（添い寝の意味で）」

まりな「や、やっぱり寝ちやったかあ（別の意味で）」

○○「やっぱりて?まりなさん帰ろうとした僕を布団に引きずりこんで無理やり押さえつけてたじゃないですか?……」

まりな「……ごめんなさい?」

○○「いや謝られても?……まりなさんあのあとすぐに寝てましたしなんにもな

かったので安心してください?？」

まりな「ほ、本当に??」

〇〇「はい?…それより、ほらそろそろいかないとマズイですよ?」

まりな「本当だ?もうこんな時間?…よしそれじゃあ〇〇くん」

〇〇「はい、今日も1日…頑張りましょう?」ガチャ…ボタン、カチャ

パン屋の少女とのんびりと

山吹ベーカーリー

沙綾 「いらっしや…○○さんいらっしやい？」

○○ 「こんにちは？ そうだなあこれと…後はこれとこれにしようかな」

沙綾 「毎度ありがとうございます？ でも結構食べすね、大丈夫ですか？」

○○ 「大丈夫？ それにここのパン凄く美味しいから」

沙綾 「りみも言ってます、特にチョココロネが最高だつて」

〇〇「ああ確かに最高だよ、チヨココロネ僕もすっかりハマっちゃったもん」

沙綾「ありがとうございます?」

〇〇「今日はもう売り切れちゃってるけど今度きたら絶対買うよ?」

沙綾「あははは、よかったら予約もします?なーんて」

〇〇「予約かいいいな?じゃあお願いしようかな?」

沙綾「ふふ、了解です♪と…全部で合わせて600円になります」

〇〇「やった?じゃあ丁度で」

沙綾「丁度いただきます?ありがとうございます?…ねえ〇〇さんもうちよつといてくださいよ、この時間は退屈で退屈で」

〇〇「ん？まあ今日は暇だし…いいよ？隣いいかな？」

沙綾「どうぞ？そういうえば〇〇さんて休日はどうしてるんですか？」

〇〇「まあ大抵は音楽聞いたり動画みたり、後はオンラインゲームのイベがあるときはイベ走ってるかな？」

沙綾「へえ、イベは最高何位までいきました？」

〇〇「まあ最高（好きな順位を当てはめてください）…位までいったかなそんなときは初の上位ランク圏内だから緊張したよ？」

沙綾「へえ…それでどうなったんですか？」

〇〇「まあ無事終えることができたよ？」

沙綾 「そうですね、おめでとうございます？　そういうえばゲーム以外にも動画みたり音楽聞いたりしてると言ってたけど、どんなものを見たり聞いたりしてるんですか？」

〇〇 「ん？　まあ色々かな、音楽はアニソンが多いかな、この曲は10年以上前の曲だから多分わかんないかなあ？」

♪ (もってけセーラー服)

沙綾 「うーん…わかんないです？」

〇〇 「だよね？　でもこの曲は僕にとっては思い出の曲でさ」

沙綾 「そうなんですネ、どんな思い出なんですネ？」

〇〇 「ん？　まあ僕がアニメが好きになった…かな」

沙綾 「へえ…なんていうか以外です」

○○「きっかけていうのは、例外とすぐそばにあるものさ…例えばこの人の作品をみて、あ…自分もやりたい、日常のあらゆる場所にきっかけかはあると僕は思ってる」

沙綾「あらゆる場所に…」

○○「そう、だから沙綾ちゃんのお店も、パン屋さんになりたいって…おもうきっかけかになると思うよ特に山吹ベーカーリーさんのパンは凄く美味しいから」

沙綾「ふふ、ありがとうございます♪」

○○「こちらこそ美味しいパンをありがとう♪さて、時間も遅くなってきたし、そろそろ帰るね」

沙綾「あ、はいありがとうございます？」

〇〇「こっちこそありがたいがどうね？それじゃあ」

結成チヨココロネ同盟

C i R C L E

〇〇「ふうくさて休憩さてと、お楽しみ♪チヨココロネ？」

りみ「〇〇さん、こんにちは？」

〇〇「ん？おおりみちゃん、こんにちは？」

りみ「こんにちは？〇〇さんは休憩ですか？」

〇〇「まあね、りみちゃんはどうしたの？」

りみ 「私は散歩です、あ…チョココロネ」

〇〇 「しかも山吹ベーカリーさんのだよ？あそこのチョココロネ大好きでさ」

りみ 「〇〇さん？私もチョココロネ大好きなんです」

〇〇 「おお？美味しいよねチョココロネ、そうだ一個食べる？」

りみ 「いいんですか？いただきます？」

〇〇 「どうぞ？…さて僕も…うん美味しい♪」

りみ 「うーん、幸せ〜？」

〇〇 「だね、この瞬間一番の至福だよ？……そうだりみちゃん、僕とチョココロネ同盟結ばないかい？」

りみ「チョココロネ同盟？なんか凄そう、はい組みましょう♪」

〇〇「よし、それじゃあ今日からチョココロネ同盟結成だ？チョココロネの素晴らしさを広め、そして魅力を伝えていこう♪」

りみ「はい♪」

結成から一週間後

〇〇「さあそれじゃあ、初の会合だね」

りみ「はい♪はい、山吹ベーカリーのチョココロネです」

〇〇「はは、僕からも山吹ベーカリーさんのチョココロネ？じゃあ、りみちゃんチョココロネをもって…乾杯？」

りみ「乾杯？」ポフ…

りみ 「ん〜？ チョココロネの味が口いっぱい広がっていく」

〇〇 「甘すぎないから、いくらでも入るよ〜：ほらりみちゃんあーん」

りみ 「あーん…ん〜？ めっちゃ美味しい♪」

〇〇 「僕もよくお菓子を作ったりしてるけど、この味にはかなわないなあ」

りみ 「本当に美味しいですよね？ レシピとか知りたいなあ」

〇〇 「はは、この前聞いたけど企業秘密だった？」

りみ「どうやったたらこんなに美味しくなるんだろう…ふう美味しかった？」

○○「ごちそうさま♪さて…それじゃあ今日はここまで、また互いに時間があつたら会合しよう♪」

りみ「はい、今日はお疲れ様でした？」

数日後くC i R C L Eく

○○「うーん？今日もいい天気だ？」

まりな「そうだねえ〜そういえば○○くん、この前りみちゃんと二人で密会したんだって？」

○○「ぶつ？誤解招く言い方せんでください？…会合ですよ？僕らチョココロネ結成したんだで、その会合してたんです、まりなさんもどうです？」

まりな 「いや、私はいいかな?…次の会合はいつなの?」

○○ 「まあお互いの時間があつたらですかね、そうだ…休憩時間なつたらどうですか?」
美味しいですよ?」

まりな 「じゃあ貰おうかな?」

○○ 「了解です♪では休憩時間に」

休憩時間

りみ 「あ、○○さん?」

○○ 「りみちゃん、いらつしやい?そうだ…りみちゃんも一個どうかな?」

りみ 「いいの?じゃあいただきます?」

○○「どうぞ?…それじゃあ、まりなさんもチョココロネをもって」

まりな「うん」

○○「乾杯?」

りみ&まりな「乾杯?」

大好きで気持ちをあなたに

羽沢珈琲

〇〇「……ふう、やはりこのこのコーヒーは最高だな、味といい雰囲気といい最高だよ？」

つぐみ「ありがとうございます♪でも、ここは女性客も多いから〇〇さん肩身が狭くないですか？」

〇〇「はは、まあ確かに入りづらい時はあるけども…それ気にしてたらどこもいけなくなっちゃうからね？だからあまり気にはならないかな？」

つぐみ「そうですか……ねえ〇〇さん、〇〇さんていまお付き合ってる人とかいる

んですか?」

〇〇「ん? うーん…残念ながないかな?…」

つぐみ「へえ…意外です、てつきりまりなさんと付き合つてるとばかり」

〇〇「まりなさんとは先輩、後輩の関係だよ?」

つぐみ「結構仲がいいから、噂になつてますよあの二人付き合つてるんじゃないか
て」

〇〇「ははは? 付き合つてないよ?…:…:因みにつぐみちゃんは…:…いややっぱりいいや? 今は色々とうるさい世の中だからね?」

つぐみ「? よくわからないですけど、まあまた聞きたくなつたら聞いてください」

〇〇「そうするね? さて、そろそろお会計いいかな?」

つぐみ「はい?…500円になります」

〇〇「じゃあ丁度で…それじゃあまた来るよ?お仕事頑張つて?」

つぐみ「はい?ありがとうございます?」

〇〇「それじゃあまた」カランカラン…

つぐみ「…そつか〇〇さんお付き合してる人いないんだ…:…決めた今度〇〇さんがきたら、伝えようこの気持ちを…」

数日後夕方…カランカラン…

〇〇「まだ大丈夫かな?」

つぐみ「○○さん、はい大丈夫ですよ？いらっしやいませ？」

○○「よかった珈琲一杯お願いします？」

つぐみ「かしこまりました？少々お待ちください」

○○「了解？…今日は暖かったね、つぐみちゃん花粉とか大丈夫だった？」

つぐみ「はい、私は大丈夫でしたよ、○○さんはどうでしたか？」

○○「絶賛シーズン中かな？もう花粉症の薬が手放せないの？」

つぐみ「それは御愁傷様です？…あ、珈琲出来たんでもってきますね」

○○「ありがとう？」

つぐみ「お待たせしました?…そうだ○○さん」

○○「なにかな?」

つぐみ「後でお話があるんですけどいいですか?」

○○「…いいよ」

つぐみ「ありがとうございます?と…表の看板かえしてきますね」

○○「了解?…外は寒いから気をつけてね」

つぐみ「はい?…」

外々カタン

つぐみ「…もう後戻りは出来ない、ふられるかも…でも後悔はしたくない…いくよ

わたし」カランカラン…

〇〇「お疲れ様、寒かったでしょ？」

つぐみ「はい？春とはいえ朝、夕は冷えますね？」

〇〇「まあ、完全に暖かくなるのは、まだ先かな？……所でつぐみちゃん、話してなにかな？」

つぐみ「……そうですね、この前〇〇さんにお付き合ひしてる人いないか聞いたじゃないですか、あの時いないで聞いて私ホツとしたんです……〇〇さんていつも私のお店
の珈琲褒めてくれて……私が困ってる時とかよく助けてもらって……それでいつか私は〇
〇さんにひかれてたんです……単刀直入に言いますね……〇〇さん好きです」

〇〇「つぐみちゃん……」

目が覚めたら突然

○○公園く

○○「はあ…星が綺麗だなく…あ…流れ星…バンドリの世界にいきますように……
んっーお願いしてんだよ…寝るか…」

○○宅く

○○「聞かれてないだろうな？はあ…おやすみなさい……」

ズオオオ…

○○「な、なんだこりゃ？…か、からだか…うあああ？」…シュウン！ブン…

…

〇〇「……うう、ここは？」

香澄「あ、気がついた、大丈夫ですか？」

〇〇「え？う、うん…（確かに部屋で寝てたよな？なのに、ここどこ？…）」

たえ「香澄、さっきの人、気がついた？て起きてた…こんにちは、体調は大丈夫ですか？」

〇〇「は、はい…あ、僕は〇〇といいます、あのここは？」

香澄「ここは病院です、〇〇さん倒れてたんですけど、覚えてないですか？」

〇〇「それが、全く覚えがないんです…そもそも僕は…僕は…あれ、記憶が？」

たえ「じゃあ、住まいは？覚えてますか？」

○○「……覚えてないです？……どうしよう？」

有咲「香澄さっきの人起きたかって、起きてたか…大丈夫ですか？公園で倒れてたんですよ、お医者さんがいうには過労だろうって」

○○「そっか、皆さんありがとうございます…記憶は時間がたてば戻ると思います？」

香澄「でも…住まいはどうするんですか？」

○○「まあ適当に安いところみつけますよ？…それよりも、そろそろ帰らないとまずいんじゃない？」

有咲「うわ…本当だ？香澄帰るぞ？それでは○○さん、さようなら？」

香澄 「うん？○○さんそれじゃ？」

りみ 「香澄ちゃん待ってー？」

たえ 「○○さんそれじゃあ…」パタン

○○ 「……ふう、しかしどうするかなあ、とりあえず職みつけないとな？…」

翌日く昼下がりに

「特に問題もないですし、明日には退院できるでしょう」

○○ 「よかった？…」

数時間後くコンコン

たえ 「失礼します、○○さん加減はどうですか？」

○○ 「はい、検査でも問題はなかったなので明日には退院できますか？」

たえ 「そうですね、でも退院したらどうするんですか？」

○○ 「まあしばらくは、漫喫暮らしですね？就職場所については、ライブハウスで働こうと思ってます」

たえ 「そうですね…頑張ってください」

○○ 「はい」

有咲 「こんにちは○○さん」

○○ 「こんにちはは？…あなた方には本当にお世話になりました、後日お礼をさせていただきます」

有咲 「お礼だなんてそんな?…あ、たえそろそろ帰らないと?」

たえ 「もうこんな時間?じゃあ○○さん、失礼します」

有咲 「それじゃ?」

○○ 「……ふう明日で退院か、とりあえず…履歴書もって面接いかないとな」

数日後…

○○ 「面接もうかったし、いよいよ今日からだな…よし頑張るぞ!」

香澄 「○○さんなら大丈夫ですよ?」

○○ 「はい?」

仕事中は我慢

C i R C L E 〽

あこ「こんにちは〜?」

まりな「あ、いらつしやい?...他のメンバーもすぐ来るのかな?」

あこ「はい?それよりも、お二人とも相変わらず熱々ですね」

〇〇「はは?仕事中はなるべく我慢してほしいんだけどね?」

まりな「いいじゃない♪それとも、嫌?」

○○「……嫌じゃないです？むしろ……いやなんでもないです？」

まりな「ん？ん？むしろ…なに、聞かせてよ」

○○「言わなくても、わかるでしょ？…」

友希那「あの…そろそろいいかしら？」

○○「あ…はい？じゃあ今日は一番の部屋使つて？」

紗夜「はい…それと二人とも…業務中にいちやつくのは感心しませんよ」

○○「はーい？…ほらまりなさん休憩時間になったら…ね」

まりな「むう」

スタジオ

リサ「しかし、あの二人が付き合うとはね〜」

あこ「でも…もとからいい雰囲気だったし思議ではないと思うよ？」

燐子「私も…あこちゃんと同じです」

友希那「そうね…でもおしゃべりはここまではして、練習はじめるわよ」

紗夜「ですね…では今日は熱色スターマインからはじめましょう」

一方ロビーにて〜

〇〇「お、始まった…相変わらず凄いな〜」

まりな「そうだね〜プロが注目するのもうなげけるよ〜」

〇〇「…そうだ、こんどの休みうちに来ませんか？久しぶりに家デートしましょう

♪
」

まりな 「あ…うちにあげてどうするつもりかな？」

〇〇 「そんなの…決まってるでしょう？」 クイ

まりな 「…もう／＼」

数時間後…

友希那 「あの…次の予約をしたいのだけど…来週の日曜日いいかしら？」

まりな 「うん…大丈夫だよ？何時からがいいかな？」

友希那 「昼の2時からお願い」

まりな「了解?…予約は完了したよ、またのご利用おまちしてます♪」

友希那「ありがとう…それじゃあ」

あこ「来週もわらわの…うーん…ババーンとした演奏みせてあげよう」

リサ「じゃあ二人とも、あまりいちやつきすぎないようね?」

紗夜「それでは…」

C i R C L E 閉店後

〇〇「うーん、今日も疲れた?」

まりな「お疲れ様♪…ねえ、〇〇くん閉店もしたんだし約束の」

○○「……しょうがないな……ン……ンン」

まりな「んん!?!／／……はあ、ま、○○くん? いまなにを／／」

○○「ふふ、昼間のおしおきですよ♪ごちそうさまです♪」

まりな「もう? ○○くん?」

○○「それでは……さらば♪」バサツ…タタタタタ

まりな「……もう／／……こんどの休み、○○くんの家に、久しぶりだなあ……準備はしといたほうがいいよね?」

イヴちゃんと楽しいトーク

C i R C L E

イヴ「あ、○○さんいまよろしいでしょうか？」

○○「イヴちゃん、いいよ…そういうえば今日は休み？」

イヴ「はい！それで○○さん…今はお時間いいですか？」

○○「まあ…この時間は暇だからね？それより、ここだと、他の人に見つかったら騒ぎになっちゃうから一番スタジオで待ってもらえるかな？丁度休憩時間だから」

イヴ「はい？では先にいっますね」

〇〇「うん?…まりなさん休憩いきますね」

まりな「はい?…:手を出しちやだめだよ?」

〇〇「だしませんよ?」

一番スタジオへ

イヴ「だれもないスタジオは、ちよつとさみしいですね…」

〇〇「それほど普段が充実してるってことさ…お待たせ?まあ十分でいかないといけないけど?…」

イヴ「短いですね、でも少しでも嬉しいです?〇〇さんとは、あまりゆつくり話せませんから…」

〇〇「お互い忙しいからね?…かといって、へたなことすると不味いし?」

イヴ「でも今はこうして話せてるから、私は楽しいですよ?」

〇〇「それはよかった?…所でイヴちゃんは、僕にどんな話があるのかな?」

イヴ「いえ…ただこうして〇〇さんと二人で話したかっただけですよ?」

〇〇「そっか…イヴちゃんにそういつてもらえると嬉しいなあ」

イヴ「それに…:〇〇さんとうこうしたかっただけですから…ン」

〇〇「…:!?／＼い、イヴちゃん?なななな、なにしてるのかな?／＼」

イヴ「キスですよ／＼私は〇〇さんが大好きですから／＼」

〇〇「だ、大好きで／＼…」

イヴ 「はい…○○さん大好きです♪」

○○ 「ありがとう／＼」

スタジオ外

まりな 「(そろそろ時間だから呼びにいったら、凄いの見ちゃった／＼いまいったら空
気読めないと思われちゃう?…でも、それでもいかないとだめだよね?…よし) あ、あ
の／＼そろそろ時間だから戻ってほしいなあ?」

○○ 「あ、まりなさん?了解です?じゃあイヴちゃんそろそろ戻るね?」

イヴ 「うう残念です?…」

○○ 「また今度お休みの日においでよ?基本ずっとC i R C L Eにいるからさ」

イヴ 「……はい？その時はまたお話ししましょうね？」

〇〇 「うん？じゃあ出ようか？」

イヴ 「はい？あ、まりなさんもありがとうございます？」

まりな 「どういたしまして♪また来てね？」

イヴ 「はい？」

ロビー

〇〇 「それでは…またのご利用をおまちしてます？」

イヴ 「こちらこそありがとうございました？では失礼します？」

〇〇 「ありがとうございました？…」

まりな 「イヴちゃん、相変わらず元気だったね？所で…イヴちゃんからのキスははどうだった？」

〇〇 「……見てたんですか？……いえません／＼」

まりな 「えー…いまはお客さんも少ないし、お姉さん聞きたいなあ」

〇〇 「黙秘させていただけます？…」 カランカラン

「すいませーん」

〇〇 「あ、お客さままだ、いらっしやませー？」

王子さまとお花見

公園へ

〇〇「うーん？いい天気、今日は絶好のお花見日和だなあ」

薫「おや〇〇さん…こんにちは」

〇〇「薫さん、こんにちは？いい天気だね？気温もすっかり暖かくなってきたし」

薫「そうだね、そしてこの美しき桜の下であなたにであえたこれは運命なのかな

〇〇「相変わらずだねえ、そうだよかったら一緒にどうか？いま時間大丈夫？」

薫「おや、○○さんからお誘いしてくれるとは嬉しいね、是非ご一緒させてもらうよ」

○○「はい、どうぞ?…うーん?綺麗だねえ」

薫「そうだね…そして桜の花言葉には高貴、清純といった花言葉が込められている…つまり○○さんに似合う花言葉でことさ」

○○「ありがとう?…そうだお弁当作ったんだけど、食べない?いっぱい作ったから食べきれそうになくてさ?」

薫「○○さんの手作り弁当、喜んでごちそうになるよ?」

○○「どうぞ?はい、おはし…じゃあいただきます♪」

薫「いただきます?…これは美味しいよ、口に入れた瞬間に広がる肉汁…プリつとした肉厚は唐揚げの最高峰だね…」

〇〇「それはよかった？その唐揚げは一番の自信作だからさ……うん美味しい？」

薫「料理の最高のスパイスは食べてもらうものへの愛情……〇〇さんの手料理を毎日食べられる人は幸せものだね」

〇〇「ははは？はたして毎日食べさせる相手が現れるかどうか？」

薫「〇〇さんは凄く魅力があるから、きつとすぐに現れるだろう……かのシェイクスピーアも言っている運命は最もふさわしい場所へと貴方の魂をはこぶのだよね」

〇〇「最もふさわしい場所へか……いい言葉だね凄く勇気づけられるよ」

〇〇「〇〇さんにはいずれ運命の人が現れる、私はそう信じているよ」

〇〇「ありがとう？そうだ、デザートもあるんだよかったら食べてよ」

薫「ありがとう、お言葉に甘えてさせていただきますよ……」

〇〇「めしあがれ?しかし、今日は本当にいい天気だねえ桜も綺麗だし…でも散る桜をみると少し儚さもあるかな」

薫「確かに散っていく桜は儚い…しかし散り際にみせる美しさもまた一興、ご覧…美しい桜吹雪を」サアアアア

〇〇「綺麗?…ふふ今日一緒に花見をしたひとが薫さんでよかった?…」

薫「こちらこそ、〇〇さんと一緒に桜をみれて嬉しいよ?…日も沈んでいる夕焼けと桜のコントラストもいいものだね?」

〇〇「だね?さて片付けしないと…そうだお礼に送ってくよ」

薫「ありがとう?私もまだもう少し〇〇さんとお話していたかったからね…楽しい時間はあつという間にすぎていく、だから家につくまでの間…短くはあるが〇〇さんとの時間を楽しみたい」

〇〇「ありがとう?…よし片付けも終わったしいこうか?」

薫「ああ共に歩もう、家路への道を」

羽沢珈琲店でわいわいと

街中へ

○○ 「く♪…ん？あ…」

麻弥 「あ、○○さんこんにちは！」

○○ 「こんにちはは？珍しいね、今日は一人かい？」

麻弥 「はい、今日は休みなんで一人でぶらぶらしてたところなんです」

○○ 「そっか、じゃあよかつたらお茶しない？奢るよ」

麻弥 「ええ!? 悪いですよ?」

〇〇 「なに気にしないでよ? なにしろ一人身だから、他に一緒にお茶する相手もないな
いっ」

麻弥 「ええ!? 〇〇さん彼女いないんですか?」

〇〇 「はははー? いないんだなあこれが」

麻弥 「そうだったんですか、ジブンてつきり〇〇さんには彼女がいるとばかり」

〇〇 「いないよー(泣) あ…それでどうかな?」

麻弥 「わかりました? ジブンでよければご一緒させてください?」

〇〇 「ありがとう? じゃあいこうか」

麻弥「はい？」

羽沢珈琲店くカランカラン

つぐみ「あ、いらっしやいませ？て、○○さんに麻弥さん……○○さん今度は麻弥さんナンパしたんですか？」

○○「誤解生む言い方しないでよ？街中で誘ったの？……」

つぐみ「わかってますよ♪」

麻弥「てか○○さん他のかたどここ来たことあるんですね？……」

つぐみ「はい？いつも常連さんで最前にしていただいでるんです……いつもは一人なんですけど、この前はまりなさんと来てたんですよ」

麻弥「へえ、あ……座ってもいいですか？」

つぐみ「はい？ご注文が決まりましたら、およびください？」

〇〇「さて…なにしようかな」

麻弥「私は…ミルクティーにします」

〇〇「そっか、他にはいいのかい？」

麻弥「はい？ミルクティーだけで」

〇〇「そっか…じゃあ僕はカフェモカにしようかな♪」

別の場所にて

モカ「はいはい、なんですよ」

蘭「モカなにやってんの？」

モカ「なんか呼ばれた気がしたから」

蘭「だれもないじゃん、ほらいくよ」

モカ「はい」

再び戻って羽沢珈琲店

つぐみ「カフェモカに、ミルクティーですわ少々お待ちください？」

〇〇「うーん…珈琲のいい香り」

麻弥「ですね、ジブンもこの香りは好きです…店内の雰囲気もいいですし、〇〇さんが毎日通うのもうなずけます」

〇〇「でしょ？ここは本当にいいところだよ？休みの日は大抵ここにくると疲れも吹き飛ばからね」

麻弥「えーでも本当はつぐみさん目当てもあるんじゃないですか？」

〇〇「あはは…まあ少しはそれもあるかな？」

麻弥「でも…男性客全然みませんね」

〇〇「そうなんだよ、見たことないんだよ…まあ時間的なものもあると思うけど」

麻弥「まさか見えざる力が働いてるとか？」

〇〇「まさか、それはないよ」

麻弥「ですよね…」

「ははははは」

つぐみ 「お待たせしました？ミルクティーとカフェモカです？」

〇〇 「ありがとうございます？…」

麻弥 「ありがとうございます？…コク、美味しいです？」

〇〇 「うん？カフェモカも美味しい？」

つぐみ 「そういうえば、ずいぶん盛り上がってましたけどどんな話してたんです？」

麻弥 「あ…はい、〇〇さんが…こんな可愛い店員さんがいるのに男性客を見かけない
んで、不思議ですって話してたんですよ」

つぐみ「あ……〇〇さんたら……まりなさんに言っちゃおうかな〜口説かれちゃった
て」

〇〇「それは勘弁して？……でも本当に不思議だよね」

つぐみ「ふふ……まあちゃんと来てますから安心してください♪」

麻弥「そつか……そうですね？……いやあジブンへんな想像しちゃいました？」

つぐみ「まあ確かに少ないですから？」

〇〇「まあ他に男性客がいるのは知ってホットしたよ、珈琲だけにね」

麻弥「うわ〇〇さん、それ結構寒いですよ」

〇〇「ええ？結構上手いこといったつもりなんだけどなあ？」

つぐみ 「某日曜日のあの番組なら座布団持ってかれていますね」

○○ 「厳しいなあ？」

麻弥 「てか珈琲にはアイスもありますけどね」

○○ 「まあね？…コクコク、うん美味しい？」

麻弥 「…ミルクティーも美味しいです？…ごちそうさまでした？」

つぐみ 「お粗末さまでした？」

○○ 「…ごちそうさま？ いやあ美味しかった？」

つぐみ 「いつもありがとうございます？…まあ○○さんは将来ここで働くんですから今のうちに味をばっちりね」

麻弥「ええ!?!だつて○○さんさつきは彼女いないつて?」

つぐみ「でも婚約者はいないとは言つてないですよね?」

麻弥「いやまあ確かにs」

○○「つぐみちゃん?麻弥ちゃん本気にしちやつてるでしょ?麻弥ちゃん違うからね?」

麻弥「え、違うんですか?」

つぐみ「はい、麻弥さんの反応が面白いからつい♪」

麻弥「驚かせないでくださいよ?」

つぐみ「ふふ…すみません♪」

〇〇「まりなさんも同じ反応してたよ?と、それじゃあ僕は先に失礼するよ、麻弥ちゃんはどうする?」

麻弥「あ…じゃあジブンも」

〇〇「了解、じゃあつぐみちゃん…お会計いいかな?」

つぐみ「はい、ミルクティーとカフェモカで千円になります」

〇〇「はい、丁度で」

つぐみ「はい…ありがとうございました?」

麻弥「それじゃあ、つぐみさんごちそうさまでした?」

〇〇「また来るね、それじゃあ」カランカラン

つぐみ「ありがとうございます？」

店の外へ

麻弥「じゃあ○○さん今日はありがとうございます？」

○○「こつちこそありがとうございます？じゃあ僕はそろそろいくよ、麻弥ちゃんも気をつけてね」

麻弥「はい……○○さんもお気をつけて、それじゃあ？」

巴ちゃんとラーメン屋デート

○○○「〜♪…お、巴ちゃんこんにちは？」

巴「…すみません、誰ですか？」

○○○「ちよ？いつもあつてるでしょ？」

巴「あははは♪ジョークジョーク、こんにちは！○○さん」

巴「もう？こんにちはは？巴ちゃん…散歩かい？」

巴「まあな、○○さんは？」

〇〇「まあ僕も散歩、最近は気温も暖かいし」

巴「だな…そうだ、〇〇さん昼ごはんはもう食べたか？」

〇〇「いや、まだ食べてないよ」

巴「それじゃあさ、今からラーメン食べにいかないか？美味しい店知ってるんだ」

〇〇「お、いいね？じゃあいこうか」

巴「ああ？」

ラーメン屋

巴「ここさ？…さ、入ろう」

〇〇「だね？…」

巴「おじさん、こんにちは？」

「いらつしやい？お、今日は彼氏連れか」

巴「違うよ？／＼この人はよくいくライブハウスのスタッフさんだつて」

「なんだ違うのか、いらつしやい…兄ちゃんはここはじめてか？ここは美味しいぞ？」

〇〇「はい？今日がはじめてです」

巴「このラーメンは本当に絶品だからさ、とりあえず…私と同じのでいいかな？」

〇〇「うん、巴ちゃんと一緒にするよ」

巴「よし、おじさん…いつもの二つ」

「あいよっ？」

〇〇「所でどんなラーメンなんだい？」

巴「ベースは醤油ラーメンさ、ただそれ以上は企業秘密とかで教えてもらえなかったけど」

〇〇「そっか…でも楽しみだなあ」

巴「きつと気に入るよ？」

「ほい、お待ち？特製醤油ラーメン？」

〇〇「ありがとうございますっ？」

「熱いから気をつけてな、ひよつとしたら二人の仲も熱々…あいだだだ？」

「くだらんこと言ってんじゃないの、ほらくる」

「ちよ、痛い痛いって?」

〇〇「あははは?いまのはひよつとして」

巴「ああ、この店主の奥さん…しかしこりないなあおじさんも」

〇〇「でも仲はいいみたいだね?…さて、ではズズ…おお、美味い? 麺にスープがしっかり絡んでる…」

巴「だろ?このラーメンは本当に美味いんだ、おじさん…〇〇さんもこのラーメン気に入ったて」

「お、嬉しいねえ?」

〇〇「いや、本当に美味しいです? レシピ知りたいなあ」

「いやあすまんな企業秘密てやつだ」

〇〇「ですよね？でもまた来ますね」

「おう？待ってるぞ？」

〇〇「はい、必ず…ズズ…美味しい？」

巴「ズズ…ズズー！プハア…いやあ美味かった？」

〇〇「ゴクツゴクツ、プハア、いやあスープまで全部飲んじやつちやつた…ごちそう
さまでした？」

「お粗末さん、しかしいいたべつぷりだったね？ラーメン屋冥利につきるよ？」

〇〇「美味しいラーメンありがとうございました？」

巴「それじゃあ、そろそろいいこうか、おじさんお会計お願い」

「あいよ、ラーメン二杯で1000円ね」

〇〇「あ、今日は僕が奢るよ…店主さん丁度で？」

「そうこなくちゃっな？よし、今日は俺のおごり」

「うおっほん！」

「と、言いたいけどそうもいかない」

〇〇「あははは？あ、丁度です」

「確かに…毎度？」

〇〇「それでは」

巴「また来るよ？」ガララ：パタン

公園へ

〇〇「いやあ食べた？食べた？」

巴「でもよかったのか？ラーメン代」

〇〇「いいいいいい、いい店紹介してもらったお礼だよ？」

巴「そっか：：どういたしまして？と、それじゃあ私はそろそろいくよ、〇〇さんは」

〇〇「僕はもう少し休んだら帰るよ」

巴「そっか：：あ、それじゃあまた明日な？」タタタタタ：

〇〇「うん？また明日？…ふう、いい天気だなー」

王子さまからのアドバイス

〇〇「うーん、こうじゃないんだよなあ？うーん…」

薫「やあ〇〇さん、どうしたんだい？浮かないかおして」

〇〇「ん？ああ薫さん、いや実はさちよつとスランプ気味でうまくかけないんだよ、まあ趣味で書いてはいるんだけど…でもやはり、しつかりとはしたいからさ？」

薫「なるほど、それで上手くかけず悩んでたんだね」

〇〇「そう？…薫さんはそういう経験あるのかな？」

薫「何回もあるさ、何度やっても納得のいくできにならないことがね、そう今の〇〇

さんのように何度も悩んだこともあった」

〇〇「そっか…それで、薫さんはそういう時はどうしてるの?」

薫「簡単なことさ、一度役になりきるのをやめるのさ…」

〇〇「なりきるのをやめる?」

薫「ああ、どうやってもだめなとき…一度役になりきるのをやめて…なにもせずポーズする、そしてもう一つ…それは原点に変えること」

〇〇「原点に…」

薫「そうさ、はじめるきつかけとなったもの…これがきつかけで始めることにした、きつかけとなった作品をみる…そうすると不思議と再びやりたくなる…そして役になりきってみると、不思議に納得のいく役ができあがる」

〇〇「原点か…そうだね、僕はいつの間にか原点となるきつかけを見失つてた…薫さんありがとう？」

薫「礼を言われるようなことはしてないさ、ただ一人言を呟いただけだからね」

〇〇「…ありがとう？さつそくやってみるよ」タタタタタタ…

〇〇「原点か…原点となった作品はこれだったなあ、どれ……………」

数十分後々

〇〇「…やはりなんどみても面白いな、そうだ…カチカチ…カチカチカチカチ…カチカ…浮かぶ、次々とアイデア…これはこうして」

薫「あ…ま…r…（どうやらいま話しかけるのはやめたほうがよさそうだね、彼の勢いに水をさすことになる）」

〇〇「……できた?…」

薫「……おや、〇〇さんなにができたんだい?」

〇〇「薫さん、小説だよ?とは言っても携帯のだけど」

薫「そっか、おめでどう?読んでもいいかな?」

〇〇「もちろん?…」

薫「ありがとう?では………」

〇〇「……」

薫「……ふう、ありがとう?とても読みごたえがあったよ、独特な世界観に引き込まれて、あと一ページのつもりが、ついつい先を読んでしまう」

〇〇「ありがとう？でもここまで薫さんのおかげさ、おかげでいい作品がかけた…そうだよかったら、今夜一緒に食事しないかい？お礼に奢るよ」

薫「〇〇さんからの誘い、ここで断つては失礼というもの…喜んでご一緒させていただくよ」

〇〇「ありがとう？それじゃあ夕方になったら商店街で待ち合わせしよう」

薫「〇〇さんの食事楽しみにしてるよ」

そして夕方

〇〇「そろそろかな」

薫「お待たせ〇〇さん、さあ出発しよう」

〇〇「だね？ いこうか」

花音ちゃんを後ろに乗せて

花音「こ、ここどこ〜？どうしよう迷っちゃった？」ブオン！ブオン…ブロロロ

〇〇「あれ、花音ちゃんどうしたの？」

花音「あ、〇〇さん…その迷子になっちゃって…それで」

〇〇「そっか…じゃあ家まで送ってくよ…はいヘルメット」

花音「あ、ありがとうございます？」

〇〇「しっかり捕まってね…動くよ」ブオオオン

道中

ブウウウウウ

〇〇「大丈夫？もう少しスピード落とそうか？」

花音「大丈夫です？…あのこのバイクなんて名前なんですか？」

〇〇「これ？これは〇〇の〇〇でバイクだよ」(〇〇には好きな名前をいれてください)

花音「そうなんですか…すごくカッコいいです」

〇〇「お、花音ちゃんもバイクに目覚めちゃったかな？結構楽しいよ、移動幅も増えるしよ」

花音「確かに、色んなところにいけそうです」

○○「まあ取るか取らないかは花音ちゃん次第さ、ただもし取ったらツーリングとかしようね」

花音「はい？」

○○「さあ…商店街のそばにきたわけだけど家教えてもらえないかな？」

花音「はい？家は次の角を右折してください」

○○「了解、後はまっすぐでいいのかな？」

花音「はい…後はまっすぐ走ると家につきます、そばに来たらまた教えますね」

○○「オーケー？でも花音ちゃんをこうしてると、なんかデートしてるみたいだなあ」

花音「へ？ふえええ／／!?で、デートだなんて？／／そんな／／」

〇〇「あははは？嫌だったかな？」

花音「い、嫌じゃ…ないです／＼」

〇〇「そつか…ありがとうございます？」

花音「あ、ここです？」

〇〇「了解?…」

花音「あの…今日はありがとうございます？」

〇〇「なに気にしないで？じゃあ、僕はもういくよ？またね」

花音「はい…ありがとうございました？」

○○「じゃね？」ブウウウウウン

翌日 C i R C L E

○○「うーん?…」

花音「こ、こんにちは〜:」

○○「あ、いらっしやい?今日は個人練習かな?」

花音「い、いえ?…昨日のお礼がしたくて?」

○○「それだったら、きにしないでいいのに?」

まりな「ん?昨日なかにかあったの?」

花音「はい…迷子になってたのを助けてもらったんです」

まりな「そうなんだ、○○くん偉いね〜?」

○○「いやいや、当然のことしただけですよ?」

花音「でも、○○さんいなくなったら私どうなってたか?…だから本当にありがとうご
ざいました?」

○○「どういたしまして?」

花音「本当にありがとうございました?じゃあそろそろ失礼します?」

○○「またね、道中気をつけて」

花音「はい?それでは」

スランプからの脱出

C i R C L E

〇〇「……うーん？ 今日もいい天気だなあ、こんな日は」

まりな「可愛いことデートしたいなあ…とか？」

〇〇「そうそう、デートして…て、違いますよ？ なに言わせんですか？」

まりな「ごめんごめん♪それで、どう思ってたのかな？」

〇〇「ん？ まあこんなサイクリング日和だなあておもいました」

まりな「そっか…まあこれだけいい天気だとね、今度一緒に出かける？」

〇〇「お、いいですね？」 ギィ…

はぐみ「あのー〇〇さん」

〇〇「あ…いらつしや…て、はぐみちゃんどうしたの？」

はぐみ「はい…あの、いまいいかな？」

〇〇「いまかあ、うーん…」

まりな「私はいいよ、この時間は人もいないから」

〇〇「では…少しお願いしますね、はぐみちゃん、外で話しきくよ」

はぐみ「ありがとう？」

外のカフェ」

〇〇「それで…どうしたのかな、いつもより元気ないけど」

はぐみ「うん、〇〇さん…はぐみソフトボールやってるんだけど、最近うまく出来ないんだ、思うように投げれないの」

〇〇「スランプてやつか、はぐみちゃん…マウンドにたつときは、どういう風に立ってる？」

はぐみ「え？…今日こそはって、おもってるチームの皆にも迷惑かけたくないから」

〇〇「そつか…はぐみちゃん、はぐみちゃんは確かキャプテンだったよね…：…となるとプレッシャーも凄いいね、よし…はぐみちゃん今度の日曜日キャッチボールしようか」

はぐみ「キャッチボール？」

〇〇「うん、僕も昔……まあ僕は野球なんだけど……ピッチャーをやってみて、少しでも参考になればって思ってたね……どうかな？」

はぐみ「……やってみる、じゃあ今度に日曜日！」

〇〇「よし！じゃあこんどの今度の日曜日に？」

はぐみ「じゃあ、はぐみはそろそろ帰るね、準備とかあるから」

〇〇「わかった、それじゃあ気をつけて」

はぐみ「うん？それじゃあ」タツ

日曜日

○○「よし、それじゃ始めようか…はぐみちゃん遠慮せずにいつものように投げてきて」

はぐみ「うん…えいつ！」ザツ…ピシュ…ズバン！

○○「うを？…さすが、というか…凄いね？…じゃあ投げ返すよ、それ」シュ…スパン！

はぐみ「…わあ、○○さんも凄いね？じゃあ…もう一球いくよー、それ？」ザツ…ピシュ…ズバン！

○○「凄いね、全然スランプにはみえないけど…じゃあ次はバッターがいるつもりで投げてみて」

はぐみ「う、うん…えい…」ザツ…ピシュ…ドスツ

○○「うおお？危ない？……はぐみちゃん、一ついいかな？」

はぐみ「う、うん」

〇〇「今度はぐみちゃんのチームが試合するとき、今日のキャッチボールを思い出してみて」

はぐみ「今日のキャッチボールを？」

〇〇「そう…さあキャッチボールの続きしよう？」

はぐみ「う、うん」

シユ…スパン！…シユ…ズバン！…ピシユ…ズバン！

そして日は暮れて

〇〇「よし、ここまでにしようか…はぐみちゃん今日のキャッチボールはどうだった？」

はぐみ「凄く楽しかった？…〇〇さん今日はありがとう」

〇〇「どういたしました？さあ…今度の試合頑張つて」

はぐみ「うん？〇〇さんも見に来たら見に来て？」

〇〇「もちろん？さあ、送つてくよ？」

はぐみ「ありがとう？…」

そして…次の試合の場面は9回の表

〇〇「……凄いな、ここまでノーヒットノーラン、完全試合まであとひとり……がんば

れ…はぐみちゃん」

はぐみ「…ふう（みんな、後ろは任せたよ）」ザツ…ピシユ…ズバン！

「…ストライク！バッターアウト、ゲームセット」ワアア！

「はぐみ凄いじゃん！」

「本当このまえとは別人じゃん？」

はぐみ「えへへ、あ…○○さん」

○○「やつ…見てたよおめでどう？」

はぐみ「ありがとう？…はぐみ…この前のキャッチボールで思い出したんだ、楽しんでやるって事を…はぐみ、相手をおさえようとはばかりして、気持ちが空回りしてた…でもこの前のキャッチボールみたいにやったら、凄く楽しくて、それで…うまく投げれた

「？」

〇〇「うん…はぐみちゃん、今日みたいな気持ち忘れずにね」

はぐみ「うん？あ、〇〇さん」スツ

〇〇「ん？おう？」スツ

「やったね？」パン！

令和もよろしく!

平成31年〜4月30日…午後11時50分〜

〇〇「平成もあと10分で終わりかあ、色々あったなあ」

まりな「そうだねえ、〇〇くんは、平成で一番の出来事はなにかな?」

〇〇「うーん…やっぱまりなさんに出会えたことかなあ…それで、まりなさんところ…こ、恋人同士になって…/」

まりな「もう…可愛いなあ♪でも私もいつしよかな、ねえ…平成最後のキスしよ」

〇〇「だ、だな?…ん」

まりな「ん…はあ、ごちそうさま♪」

○○「…もうあと5分かあ、しかし元号が変わる瞬間に立ち会えるというのは貴重だよなあ」

まりな「だね、そうそうないもんね…あと4分」

○○「だよな…まりなさんは、なにかあるのか？今後の目標とか」

まりな「目標は、○○さんと今年中にゴールイン、そしてもう一つは…ガールズバンドのこたちを○○くんと一緒に精一杯輝かせることかな」

○○「はは、僕と一緒にだ…なあまりなさん令和になってもよろしくな」

まりな「うん、こっちこそよろしくね？」

「いよいよ令和まであと十秒をきりました…9、8、7、6、5、4」

○○○「3」

まりな「2」

「1」

まりな&○○○「0」

「令和になりました」

○○○「まりなさん令和最初のキスを」

まりな「もちろん?…ん」

○○○「ん…はあ、まりなさんよろしくな?」

まりな「こちらこそ、令和になってもよろしくね♪」

翌朝 C i R C L E

〇〇「ふぁ…」

たえ「〇〇さん眠そうだね」

〇〇「まあ昨日はちよつと徹夜しちやっただからね」

まりな「私も同じとこ、だから今日は帰ったら早く寝るつもり？」

たえ「へー…昨日はお楽しみでしたね」

〇〇「ぶつ？違うよ？まりなさんとはなにもしてないよ？」

まりな「そうそう? キスぐらいだよ?」

たえ「私…お楽しみていただけですよ」

○○&まりな「あ?」

たえ「へー…令和最初のイチャイチャを、まあ仕事中はイチャイチャしないよう気を付けて♪それじゃあ」

○○「ああ? まつも、いつちやった…」

まりな「恥ずかしいところ知られちゃったね?」

○○「まあ僕とまりなさんが付き合ってるのはみんな知ってるし、仕事中にイチャイチャさえしなかったら大丈夫だとおもうよ?」

まりな「そうだね?…」

〇〇「なあまりなさ…いや、まりな」

まりな「は、はい」

〇〇「…昨日まりなは僕とゴールインていつてたな…僕も同じさ…新たなスタートラインに立とう、結婚してください」

まりな「もう…こういうのはムードが大事なんだよ…でも、はい、喜んで」

〇〇「ありがとう？」　ワァァ…パチパチパチ

まりな「みんな、いつの間に？」　香澄「おめでとう」

有咲「おめでとう」

たえ「おめでとう」

りみ「おめでとう」

紗綾「おめでとう」

モカ「おめでとう〜」

蘭「おめでと」

ひまり「おめでとう〜?」

巴「おめでとう!」

つぐみ「おめでとう?」

千聖「おめでとうございます?」

彩「おめでとうございますっ。」

イブ「おめでとうございますっ。」

麻弥「おめでとうっすっ。」

日菜「おめでとうっ？」

友希那「おめでとう」

紗夜「おめでとうございます」

リサ「おめでとうっ」

あこ「おめでとうございますっ。」

燐子「おめでとう……ございます」

こころ 「二人とも幸せにね♪」

薫 「おめでどう…ああ儂い」

花音 「おめでどう…です」

美咲 「あの…おめでどうございます」

はぐみ 「二人ともおめでどう？」

みんなにありがとう？

平成にさようなら

そして全ての読者へ、令和もよろしくお願いします！

季節は冬へ

ある日の昼下がりに

〇〇「おはようございます～ああ暖かい～」

まりな「はい、おはよう今日もよろしく！今日は冷えるね～」

〇〇「冷えますね～また寒い季節が来ちゃったな～とりあえず着替えてきますね」

まりな「了解！いっといで」

数分後

〇〇「お待たせしました、しかし冬は寒いからやですよ〜」

まりな「まあね〜雪がふれば交通網は麻痺するから、あまりいい気はしないよね…クリスマスとかだと嫌じゃないのよね」

〇〇「あれ不思議ですよ、普段はいやな雪もクリスマスだとロマンチックに感じるんですから」

まりな「まあそういうのってあるよね」

〇〇「まあでも…寒くてもこうすれば、暖かいですもんね」ギュ

まりな「もう…今は仕事だよ?」

〇〇「いいじゃないですか、今はお客さんいないんですし」

まりな「仕方ないなあ、お客さんくるまでだよ?」

○○「はい？」

10分後

あこ「こんにちはー？」

○○「お、いらっしやい！あこちゃん今日も練習お疲れ様」

あこ「ふふふ…今宵も秘密の特訓で…こう…ババーンとした力をみせてあげよう」

まりな「はい、それじゃあ2番の部屋使って、練習頑張つてね」

あこ「はい、いつてきまーす♪」

○○「しかし、メンバーとの練習日以外の日も自主練習にくるなんて偉いなああこちゃん」

まりな 「ロゼリアとそしてロゼリアのみんなが大好きなんだからだろうね…」

〇〇 「ふふ、あこちゃんをこうして見てると」

まりな 「昔の自分を思い出しちゃう？」

〇〇 「あなたはエスパーですか？まあたまに思い出すときはありますね」

まりな 「そっか…」 ギュ

〇〇 「ん？どうしました？」

まりな 「ねえ…〇〇くん…私は〇〇くんの夢を応援してるからね」

〇〇 「…はい、僕の夢はガールズバンドの子たちを精一杯輝かせること、まりなさん一瞬についてきてくれますか？」

まりな「うん…もちろん♪で、なんかいまのプロポーズみたいだね」

〇〇「はは、ですね（笑）」

数時間後

あこ「まりなさん、〇〇さんありがとうございました？」

〇〇「練習お疲れ様、3日後はロゼリアのみんなとだったね…練習もいいけどオーバーワークには気を付けるんだよ？じゃないと…取り返しがつかなくなるから」

あこ「はい？じゃあ失礼します」

まりな「お疲れ様、またね？…ねえさっきのオーバーワークはやっぱり〇〇くんの過去の教訓からかな？」

〇〇「さあどうでしょう?と次のお客さんだ、いらつしやいませ?」

まりな「(むう)ごまかされた、今度誘導しながら聞いちゃお)」

二人の時間

放課後〜ブオン!…ブロロロ

「え、だれ?」

「ナンパ?...あ、あの〜誰か待ってますか?」

〇〇「ん? ああ、はいそんなところです...あ、来ました」

彩「〇〇さーん? えへへ、お待たせしました♪」

〇〇「大丈夫! いまきた所だから」

「ね、ねえ丸山さん、ひよつとしてこの人て」

彩 「うん、私の彼氏さん♪じゃあみんなまた明日？」ガチャ…バン

○○ 「では失礼します」ブオン！ブロロロ〜

車内〜

○○ 「いやあちょうど彩が来てくれてよかったよ、少し早く着いてさ？」

彩 「あはは？でも私も急いだんですよ？○○さんに早く会いたかったから」

○○ 「僕もだよ、さ…今日は楽しもう！どこいきたい？」

彩 「○○さんの家に行きたいな…二人きりになりたいから」

○○ 「……わかった！今日は二人でゆっくり凄そう」ブオオオ…ブオオオ

〇〇宅へ

〇〇「着いた着いたくただいまーそしてどうぞ」

彩「おじやましまーす？、ねえ〇〇さんはやく」

〇〇「うん、行こう…ここで待ってて今、お茶入れるから」

彩「了解です？…ベットのしたみたりなんか」

〇〇「はは、期待には答えれないよ♪と、待ってて？」

数分後へ

〇〇「お待たせ？オレンジジュースでよかったかな？」

彩「ありがとうございます?……ぷはあ美味しい」

〇〇「そりゃよかった?……でも本当によかったの?」

彩「はい、たまにはお家デートしたいなあて思いました……ねえ〇〇さん隣に来てくれないませんか?」

〇〇「……いいよ?」

彩「えへへ♪ギユウこうしてると暖かいですね」

〇〇「そうだね?……もう冬か……来月になれば一ヶ月切るもんなあ」

彩「一年で速いですよね、ねえ〇〇さん」

〇〇「……なにかな」

彩「私…今日は帰りたくないです…」

○○「……彩ちゃん…いいよ、今日は彩ちゃんが帰りたくなるまで一緒にいる」

彩「ありがとうございます?…ねえ○○さん、せつかく二人きりなんですし…最近忙しかつたから、元気注入お願いします……ん」

○○「おう……ん…はあ…ん、彩ちゃん、ん」

彩「ん…はあ○○さん…ん……」ドサツ

カツトオオオオ!

○○「……はああ……」

彩「○○さん…もうこんな時間だ、私ちよつと連絡してきますね」

○○「ん、了解」

数分後

彩「お待たせしました♪さてと、夕飯作りましょう、お腹空いちやった」

○○「だね…なにがあつたかなあ…オムライスにしようか」

彩「わあオムライス大好物です？はやく作りましょう」

○○「はは、あわてないあわてない…しかしこうしてると」

彩「なんだか新婚みたいですね♪」

○○「あ、先にいようとしたの？」

彩「○○さんのことならお見通しですよ♪」

○○「次は負けないぞ♪と…よしじゃあ卵といて…彩ちゃん♪」

彩「はい♪…♪…」

なんやかんやあつて

○○「完成？皿に盛り付けて…よし持ってて食べよう」

彩「はい？…じゃあ手をあわせて」

「いただきます？」

紗夜さんご乱心（キャラ崩壊注意）

〇〇「あのう紗夜さん？さすがにこの体勢はマズイかと」

紗夜「問題ありません…さ、これからあなたの身体チェックをします、大丈夫です痛くしませんから」

〇〇「余計に怖いけど!?ね、ね？いまならまだ引き返せるから…だからさ、離してほしいなあなんて」

紗夜「あれだけ誘っててなにを言ってるんですか…さ、チェックを続けます、いただきます…」

〇〇「いただきますってなんだ？ちよ、あああああ？」カーン！レディ…ファイト！

／ぎやああああ／

数時間後

紗夜「ふう…よかったですよ○○○さん」

○○「まさか紗夜さんにおそわれるなんて…」シクシクシクシク

紗夜「襲ったなんて人間きの悪いこと言わないでください、身体チェックをしただけです」

○○「うう…もう紗夜さんとは二人きれにはなれな……は汗」

紗夜「……それは私への挑戦とみていいんですね、さあ今度はあなから求めるくらいに、私なしではいられないからだにしてあげます……ラウンド2いきますよ」

〇〇「ちょ汗これ以上むr……あああああ？」

／ワン！ツー！スリー！／

カンカンカンカンカーン

〇〇「もう……無理、ガク……」

紗夜「ふう……どうでしたか？〇〇さん……寝てしまいましたか、まああれだけ激しければ無理もないですね」

〇〇「スー……スー……？」

紗夜「さて〇〇さんも寝てしまいましたし、私も寝ないといけませんね明日も学校が

ありますし…ではおやすみなさい○○さん」

翌日…

○○「おはよう紗夜さん」

紗夜「あら、おはようございます…顔色悪いですよ？」

○○「紗夜さんのおかげで夢にでたんだ、おかげで寝不足だよチクシヨ…？…て、い
けね？僕はもう出るから紗夜さんもはやくでるんだよ？」バタバタバタ…ガチャ…バタ
ン…ブオンブロロロ…

紗夜「行きましたか…と、私ものんびりしてられませんね…ふふ○○さん、また、身
体チエツク、しましょう♪」ガチャ…バタン

C i R C L E

〇〇「おはようございます…」ゲソ

まりな「お、おはよう…ど、どうしたの？すごいゲソとしてるけど？」

〇〇「ああ昨日ちよつと寝れなくて？あはははは」

まりな「詳しくは聞かないけど、ちゃんと寝ないとだめだよ？今日は夜更かししない
よ」

〇〇「はい…あ、着替えてきますね？」

まりな「了解、寝ちゃだめだよ？」

〇〇「寝ませんよ？…では」

花咲川女子学園

紗夜「おはようございます？」ツヤツヤツヤ

香澄「紗夜先輩おはようございます？て、紗夜先輩けさイカ料理食べました？」

紗夜「イカ…いえ今朝は食べてないです、ただ昨日食べたのが影響してるのかもしれない」

香澄「へえ…」

紗夜「それよりも…戸山さん服装が乱れますよ、服装の乱れは心の乱れ、しっかりとしなさい、よし次からは気をつけるように」

香澄「あ…えへへへ？ありがとうございます？あ、では失礼します」

紗夜「では…さて次はどうやって誘うかしら」スタスタスタスタ

香澄ちゃんと冬キャンプ

ある水曜日の昼下がりにCiRCLE外のカフェにて

まりな「あ、○○くんに見てるの？」

○○「まりなさん、実は今週の土日にも冬キャンプいこうと思ってましてね、それでどこにしようか探してたんですよ」

まりな「冬キャンプかあ、でも冬キャンプで寒そう？」

○○「まあ夏とは違いますからね？でも星はきつと綺麗ですよ」

まりな「確かに星とか凄そう」

香澄 「○○さーん？」

○○ 「ん？おお香澄ちゃん、練習かい？」

香澄 「いえ…ただ通つたら見かけたから、なに見てたんです？あ…まりなさんと旅行の計画とか？」

まりな 「いやあ違うよ、○○くん今度の土日に冬キャンプいくんだって」

香澄 「冬キャンプかあ…楽しそう？私もいきたいなあ…○○さん私も連れてってくださいよ」

○○ 「いやあでも寒いよ？それに親御さんも駄目っていうだろうし」

香澄 「むー？そうだ？ちよつと失礼します？」 タタタ

〇〇「あ…ちよつと?…いつちやつた、て…まりなさん?そろそろ戻らないと?」

まりな「本当だ?いそごう?」

数十分後くカランカラン

香澄「はあ暖かいゝあ…〇〇さん、オーケー貰えましたよ?〇〇さんなら心配ないだろうて」

〇〇「そっか、それじゃあ行こうかじゃあ土曜日の朝に迎えに行くよ」

香澄「了解です?じゃあ楽しみにしてますね」カランカラン…

〇〇「ふう…それじゃあ見つけたら二名の予約いれとかないとな…高校生は大人でいいのかな」

まりな「それでいいはずだよ、でも香澄ちゃんて二人でキャンプかあ青春だねえ…間

違いは起こしちやだめだよ？」

○○「ぶ？起こしませんよ？もう？」

まりな「やあわからないよ？冬の満点の星空：ロマンチックな雰囲気二人の顔は次第に近づいていき、きゅー？」

○○「しないでですよ？もうセクハラですよ？」

まりな「ごめん♪ごめん♪でも引率は君なんだから、しっかりとね」

○○「はい？…あ、いらっしやいませ？」

そして迎えた土曜日早朝、ブオオオ：ブオオオ：ブオンブロロロ

○○「おはよう、香澄ちゃん」

香澄 「○○さんおはようございます！」

香澄母 「おはようございます…今日と明日は香澄をお願いします」

○○ 「はい…おまかせください、ではいつてきます」

香澄 「いつてきまーす？」 ガチャ…ボタン…ボタン、ブオン！ブロロロ…

車内

香澄 「○○さんとお出かけ♪」

○○ 「キャンプ地にはお昼にはつくから途中で朝ごはん、お昼は向こうでなにか作ろうか」

香澄 「はい…ああ楽しみ？あ…ラジオつけてもらっていいですか？」

〇〇「いいよ?…カチ」

「おはようございます?本日ーの天気は晴れ最高気温は12℃と寒い1日となりそうです、暖かくしてお出かけください」

〇〇「わあ寒くなるね、と…コンビニだとりあえず朝ごはんと飲み物買おうか」

香澄「賛成です?あ…〇ー〇んだ、私このおにぎり大好きなんですよ」

〇〇「香澄ちゃんも?僕もなんだ、あるといいなあ…」キイ…ガチャ…ボタン…ボタン

香澄「まあなかったら他のにするしかないですね」

〇〇「だね?と…お、あった…あった」

香澄 「よかったー？○○さんは何個食べます？私は一つにしますけど」

○○ 「僕は三つかな？あとはパンと飲み物を」

香澄 「わ、結構食べますね」

○○ 「いやあお腹ぺこぺこでさ、香澄ちゃんは1個で大丈夫？」

香澄 「はい…あ、後は飲み物で暖かいお茶を」

○○ 「了解、僕は紅茶にしようかな、他に欲しいものはないかな？」

香澄 「じゃあ○○さんが欲しい…なんて♪」

○○ 「物でお願いね？」

香澄 「えへへ冗談ですって♪」

「朝からイチヤイチヤと、家でやってくれ？」（レジにいた店員&周りのお客さんたちの心の声）

〇〇「もう？よしじゃあお金払おうか、すいませーん」

「いらっしやいませ？おはようございます！はい…ピ、ピ、ピ…合計で…円になります」

〇〇「ではちようどで」

「ちようどいただきます？こちらレシートですありがとうございます？ございましたか？」

車内くガチャ…ボタン…ボタン

〇〇「それじゃあ食べようか」

香澄「はい？いただきます？」

〇〇「いただきます？うん…美味しい」

香澄「はい…あ〇〇さんお茶お願いします」

〇〇「はい…お茶ガサササ…パキ、カラカラカラ」

香澄「ありがとうございます？コクコクぶはあ、美味しい？」

〇〇「はは…と、僕も紅茶を…パキ、カラカラカラ、コクコク…ふう、さて次はパンをガサ…ガサササパン！…ングング…うん美味しい？香澄ちゃんも一口どう？」

香澄「あ、じゃあ一口いただきます？…うん美味しいです？」

〇〇「本当に美味しいなあ？コクコク…ぶはあ、よしお腹も満たされたし…再び出発！」

香澄 「進行ー？」 ブオン！ブロロロ…

道中

〇〇 「目的地まではまだあるし、とりあえず予定をいうね、ついたらまずテントを立てて…たておわつたら散策、トイレの場所の確認だね…散策が終わつたら昼食作りメニユー冬きやん鍋だよ」

香澄 「やったー？夕飯はなににするんですか？」

〇〇 「うーん…それはまた現地で決めようか」

香澄 「了解です？…ふあ」

〇〇 「眠いかい？」

香澄 「えへへへ：昨日楽しみで寝れなくて？」

〇〇 「あーわかるなあ、その気持ち、近くに來たら起こすから寝てていいよ」

香澄 「じゃあお言葉に甘えて？おやすみな：s：スー：スー：」

〇〇 「眠ったか、本当に楽しみだったんだなあ、さて運転に集中しないと」ブオオオ
…ブオオオ…

数時間後くブロロロ

〇〇 「香澄ちゃん、香澄ちゃん」

香澄 「ん？ふあ、つきました？」

〇〇 「もうすぐで着くよ、と青だ」ブオオオ…

香澄 「うーん？ ああよく寝た？」

〇〇 「香澄ちゃんぐつつすりだったもんね、と…曲がつて…着いた？、駐車場にとめて…それじゃあ香澄ちゃんいこうか」

香澄 「はい？…」

そして手続きも終えて

〇〇 「この辺にしようか…香澄ちゃんテント立てるから手伝ってくれるかな？」

香澄 「はい？…これをこうして」

〇〇 「ここはこうして…よし完成？」

香澄 「お先です♪わあテントていっても中は意外と暖かいですね」

〇〇「まあこれは冬きゃん用のテントだからね、外には椅子もおいて、香澄ちゃん夜になつたら星空観賞しようか」

香澄「やったー？楽しみです♪」

〇〇「きつと綺麗だよー、と…そろそろお昼にしようか香澄ちゃんお水組んできてもらえるかな？」

香澄「了解です？」

〇〇「おし、それじゃあ具材をきつてきつて…おし…て違うかーwwこれだと一昔まえのアレになつちやうか(笑)」

香澄「お待たせしました♪」

〇〇「ありがとう♪よしじゃあ具材をいれて」

数分後

「完成？」

〇〇「じゃあ取り分けて、いただきます？」

香澄「いただきます？…あーん…はふはふ」

〇〇「あつ…はふはふ…うん美味しい？」

香澄「冬はやっぱ鍋ですよね、それに景色もいいですし、きてよかったー」

〇〇「喜んでもらえてよかった？…あーん…はふはふ」

香澄「ねえ〇〇さん、あーん」

〇〇「あーん…はふはふ、じゃあ香澄ちゃん…あーん」

香澄「あーん…うん美味しいです？」

〇〇「僕も美味しい？…景色も本当にいいし…夕飯は手軽にカップ麺でいいかな？」

香澄「いいですよ、その方が星空もいっぱい見れそうですし」

〇〇「じゃあ後で買いに行こうか…さて食べ終えたし少し休憩」

香澄「うーん…いい景色？空気も清んでで美味しい星空も期待出来そう」

〇〇「今日は夜も晴れるみたいだから、期待していいと思うよ？ただ冷え込むから暖かくしないとね？」

香澄「はーい？はやく夜にならないかなあ」

〇〇「すぐになるよ？ふう…」

そして迎えた夜

〇〇「そろそろ夕飯にしようか…」

香澄「ですね」わぁ星…寒いなあ」

〇〇「本当だ…こりや寒いや…やっぱきてよかった？と…お湯かけて…3分まとう」

香澄「まだかな、まだかな♪」

3分後

〇〇「よし、頃合いかな…それじゃあ…いただきます？」

香澄 「いただきます?…ズズ…ズズズー!」

〇〇 「ズズ…ズズズー…ああ暖かい…こういうところで食べるとカップ麺も美味しく感じるなあ」

香澄 「ですね〜それに星空も綺麗」

〇〇 「本当に綺麗だ、ズズ…ズズズー!」

香澄 「ズズズー!…はあごちそうさまです?…ねえ〇〇さん、今日はありがとうございます?」

〇〇 「どういたしまして?まあ最初はびっくりしたけど?退屈じゃあなかつたかな?」

香澄 「全然!もう凄く楽しくて、明日で終わりかと寂しいです」

〇〇「またいつかね…そんなときはまた楽しもう？さて…明日は朝早くに出発しないと
いけないし、そろそろ寝ようか」

香澄「うーん…もう少し星空見てたいなあ」

〇〇「こーら、夜更かしは肌の天敵だよ？今度星空観賞してあげるから」

香澄「はい？…ヨイシヨ…それじゃあ〇〇さん、おやすみなさい？」

〇〇「おやすみ香澄ちゃん」

翌日

香澄「ふあ〜？おはようございます？〇〇s、いない…トイレかな？」

〇〇「お、おはよう？香澄ちゃん」

香澄「あ、おはようございます？〇〇さん、トイレにいつてました？」

〇〇「まあね、さ…テント畳んで出発しよう」

香澄「はい？」

そしてテントも畳み…運び終わって車内へ

〇〇「それじゃあ忘れ物ない？」

香澄「はい？大丈夫です」

〇〇「よし、それじゃあ出発？」プロロロ

ブオン！ブロロロ

香澄 「着いた？〇〇さん本当にありがとうございます？」

〇〇 「どういたしまして？それじゃあ香澄ちゃんまたね」

香澄 「はい、また？」

〇〇 「それじゃあ…」ブオン！ブロロロ

香澄 「ふう…ただいま？」

王子さまと過ごすある冬の昼下がり

C i R C L E 外のカフェがある冬の昼下がり

〇〇「ズズー…はあ今日はちよつと暖かいなくでも風がふくとやはり冷えるけど?…ズズーしかし、せつかくの休みだと暇だ?」

薫「やあ…〇〇さん、休憩かい?」

〇〇「ん?おお、薫さん…いや今日は休みだよ、ただやることもないからカフェにふらっとね」

薫「そうか…よかったら私と一緒にどうだろう?」

○○「おお、もちろんいいよ?…おしじやあお札に奢るよ好きなの買っておいで…つ
財布」

薫「いや、そういう訳にはいかないよ…飲み物は自分で」

○○「いやいや一緒にお茶してくれるんだもん、そのお礼さ」

薫「そうかい?ではお言葉に甘えさせていただくよ」

○○「うん、いってらっしゃい」

薫「それじゃあ…また後で」

数分後

薫「ありがとう…私はカフェオレにしたよ」

〇〇「どういたしまして？ズズ…今日は暖かいね」

薫「そうだね、でも末からはまた寒くなるみたいだ」

〇〇「うへえ、寒いのはいやだあ？」

薫「私も寒いのは苦手さ…でも」

〇〇「でも？」

薫「ふふ…こうすると暖かいだろ？子猫くん？」ギユウ

〇〇「わわ?!薫さん、ち…近いな？／＼」

薫「ふふ…驚かせてしまったかい？でも寒いときは、誰かと暖めあうのが一番だから

ね…そう○○さんとこんな風に」

○○「そ、そうだね／＼薫さんカフェオレさめちゃう？」

薫「いけない、○○さんと密着したくて…ついね…ズズー、うん美味しい子猫くんと飲むと、さらに美味しさが引き立つよ」

○○「ありがとう？／＼ズズー…」

薫「そういえば、○○さん…一ついいかな？」

○○「…いいよ？」

薫「もしも…スカウトの人に君をスカウトしたいと言われたら、どうしたい？」

○○「…断るよ、他のこにも言ってるが今の僕の夢はガールズバンドの子達を精一杯輝かせる事なんだ、だからそういう話がきても断るよ」

薫「…そうかい、○○さんのその答えをきいて安心したよ、君は君が思ってる以上の存在だからね」

○○「はは、そういつてもらえると嬉しいな」

薫「ズズー…そして、私も安心した一人…○○さん、この後は時間大丈夫かい？」

○○「うん今日は1日暇だからね、僕も薫さんを誘おうとしてたから」

薫「おや、私と一緒に休日の一時を過ごしたいなんて嬉しいな…じゃあ飲み終えたら出発といこうか」

○○「だね？ズズー…」

数分後

〇〇「ふう美味しかった？」

薫「本当にね…さあ行こうか、〇〇さんどうせならお話してできる徒歩にしないかい？
車だと、あまり話せないからね」

〇〇「でもこの後はどんどん冷えるよ？薫さんは演劇やってるから喉とかも大事だし」

薫「ありがとう…でもさつきも言ったように、お話ししながら歩きたいし、こうすれば暖かいからね」ギユ

〇〇「そ…そうだね／＼じゃあ、行こうか」

薫「ああ…共に歩こう旅路を」

美咲ちゃんと遊園地

ある遊園地ゲート前

〇〇 「ん？おお、美咲ちゃんこっち？こっち？」

美咲 「あ…待ちました?！」

〇〇 「いや、まだ来たばかりだから大丈夫？さ…入ろう？すいません大人二枚でお願いします」

「かしこまりました、〇〇円になります」

〇〇 「ではちようどで」

「はい、ではいつてらっしゃいませ？」

○○「ほい、お待たせ」

美咲「あ…いまチケット代渡しますね」

○○「いやいや…奢るよ？それに一度、女の子に遊園地のチケットを奢るのやってみ
たかったからさ、だからお願い？」

美咲「で、ではお言葉に甘えて？…行きましょう？」

○○「おう♪」

遊園地内へ

○○「さーて、じゃあ何から行こうか…あ、まずは写真撮らない？ほらあそこのマス
コットと一緒に」

美咲 「あー…じゃあまずは写真から行きましょう、すみません…お願いします」

「はい、いいですよ？では…いきますよ、はいチーズ？カシヤ、はいチーズ？カシヤもう一枚いきます、チーズ？カシヤ、はいオーケーです？」

〇〇 「おお？ありがとうございます？…」

美咲 「ありがとうございます…しかし、てここでは言えないか」

〇〇 「ああ…確か美咲ちゃんはミッシェルの中の人だったね、やつぱ職業病みたいなのが来た？」

美咲 「はい、特に夏場とか着ぐるみの人をみると大変そうだなあ…と」

〇〇 「なるほど？ま…まあ今日はそういうは忘れてさ、パーと楽しもう？」

美咲 「はい?…さて、何からいきましよう?」

〇〇 「ジェットコースター…とか平気かな?」

美咲 「はい、大丈夫ですじゃあジェットコースターから乗りましよう」

〇〇 「それじゃあレッツゴー♪」

ジェットコースター

〇〇 「久しぶりだなあジェットコースター」

美咲 「私も久しぶりですよ、〇〇さん怖くはないですか?」

〇〇 「怖かったら乗ろうなんて言わないよ?あ…そろそろ下りだよ…ワアアアアア

…」

美咲 「きやー?…」 ガアアアア…ヒユウウ…カタン

「はい、おかえりなさい」

○○ 「いやあ楽しかった?絶叫系はいいなあ」

美咲 「はい、私もスカツとしました…次はコーヒーカップとかどうでしょう?」

○○ 「お、いいねえ…それじゃあコーヒーカップいこうか♪」

美咲 「はい?」

コーヒーカップ

○○ 「それ♪」

美咲 「♪…」

♪…

○○「あれ、これって」

美咲「えがおのオーケストラですね…なんかへんな感じですか？」

○○「いやあ、でも凄いこどだよ？そして曲も明るくて、本当遊園地にぴったりな曲
さ」

美咲「ありがとうございます…あ、終わりましたね」

○○「本当だ…よいしょ、それじゃあ次はどこにしようか？」

美咲「それじゃあ次は○○さんのいきたいところはもうどうでしょう？」

○○「僕のいききたいところ、よしじゃあ、ここはどうだろう？メリーゴーランド」

美咲 「わ、なんとなくか意外です…てつきりお化け屋敷にいくとばかり」

〇〇 「あー…ここだけの話しさお化け屋敷は苦手で？」

美咲 「なるほど…じゃあ時間ももつたいないですし、行きましょう」

〇〇 「行こう？」

メリーゴーランド

〇〇 「おお？懐かしいなあ子供の頃を思い出すよ」

美咲 「子供の頃はよく乗ったんですか？」

〇〇 「うん、近所のちよつとした遊園地みたいなのがあってさ、そのメリーゴーランドよく乗ったよ」

美咲 「へえ〜？あ、○○さん子供ってますよ」

○○ 「ん？本当だ…ふふ？」フリフリ…

○○ 「美咲ちゃん、メリーゴーランド終わったら昼食にしようか」

美咲 「あ、もうお昼か…じゃあそうしましょう」

そして昼食

○○ 「さあ食べよう今日は張り切っちゃった」

美咲 「わ…美味しそう…いただきます」

○○ 「はい、召し上がれ」

美咲「ばく…この唐揚げ美味しいですか？さめてるのにふっくらジュューシーで、後でレシピ教えてもらえませんか？」

〇〇「いいよ？さ…僕はハンバーグを、うん美味しい？」

美咲「あ、タコさんにカニさんウィンナー、懐かしい…」

〇〇「いやあ今日の遊園地が楽しみでさ、はしゃいじやった？」

美咲「あははは？なんというか、〇〇さんて少年みたいなどこありますよね」

〇〇「そうかな？でも昨日結構寝れなかったから間違いいではないかもね？」

美咲「あははは？（まあ私も今日が楽しみで寝れなかったけど／＼）あ、このあとどうします？」

〇〇「そうだね、とりあえず飲み物かって、ゆっくりとまわろうか」

美咲 「はい、あ…観覧車は？」

〇〇 「観覧車は帰り際にね、夕日をみなから締めくくりにしたくてさ」

美咲 「夕日の…まあデートの定番ですよね／＼」

〇〇 「ふふ…なんなら頂上で♪」

美咲 「な／＼」

〇〇 「さあいこう♪」

美咲 「あ、待ってください？」

以下はダイジェストでお楽しみください

○○「あ……こことか面白そうだよ」

美咲「ここも……面白そうです」

○○「うーん……タピオカ美味しい？」

美咲「ですね……でも食べ過ぎはよくないらしいので気を付けない？」

○○「だね？……うん美味しい？」

美咲「あ……○○さんゲームとかあるみたいですよ」

○○「おし、じゃあやってみようかな」

そして迎えた夕方、観覧車内、

〇〇「わあ…綺麗だ」

美咲「本当ですね、赤い夕方が町をてらしてて、本当に凄い」

〇〇「美咲ちゃん、今日はありがとうね」

美咲「こちらこそ、チケット奢ってもらったし…あの…また来ませんか？」

〇〇「もちろん、また来よう？」

「はい、お疲れ様でしたー足元気をつけてください」

〇〇「はい、美咲ちゃんほら」

美咲「はい…ヨイシヨ…よしじゃあ帰りましょうか」

〇〇「だね?…さあ帰ろう」

美咲 「なに言ってるんですか？」

〇〇 「一度言ってみたかったの？」 ゲートへ

遊園地の外へ

〇〇 「うう夕方は冷え込むなあ？ じゃあ美咲ちゃん、また」

美咲 「はい、チケットありがとうございます…それでは」

〇〇 「うん、また？」

友希那さんと猛特訓

C i R C L E ｳ スタジオ内

○○「よし…♪…」

一方ロビーでは

友希那「こんにちは…あら○○さんはいないのかしら」

まりな「○○くんなら、いまスタジオにいるよ？○○くんに用かな？」

友希那「いえ…今日は自主練にきたので…○○さんがいなかったらどうしたのかと
思ってた」

まりな「そっか、あ自主練習だったね三番使って…」

まりな「ええ…ありがとう…」

戻ってスタジオ内へ

〇〇「ふう…いいな歌は、よし次はこれ歌おう…（クリスマスのうたをうたいだす）」

廊下へ

友希那「あら…〇〇さんね、少し聞かせて貰おうかしら」カチャ…

〇〇「〜♪…♪…♪…ふう、もうすぐクリスマスかあ」

友希那「〇〇さん歌上手いのね、聞き惚れてしまったわ」

○○「わ、友希那ちゃん…いつからそこに??」

友希那「ついさつきよ、それより随分と熱心に練習してたけど、なにか大会とかあるのかしら?」

○○「まあね、今度のカラオケ全国大会に向けてちよつと練習をね」

友希那「そう…:…ねえ○○さん、よかつたら私が教えましょうか?」

○○「え?でも友希那ちゃんも忙しいんじゃない?」

友希那「確かに暇ではないわ、でも極端に忙しいという訳でもないし…:それに人に教える事で私も新たな発見が出来るかもしれないし…:どうかしら?」

○○「そうだね…:じゃあお願いしようかな?友希那師匠?」

友希那「なんか…:変な感じね／＼そう呼ばれるのははじめてだから…:とにかく私が教

えるからにはめざすは優勝よ、練習は過酷になるから覚悟して」

〇〇「はい…師匠？それじゃあさつそくお願い出来るかな？」

友希那「もちろん、私もそのつもりよ…先ずは…」

〇〇「よし…」

友希那「その調子よ次に…」

〇〇「」

友希那「」

数時間後

友希那「今日はここまで、次の休みはいつかしら？」

〇〇「次の休みは来週の水曜日だけど、大丈夫かな？」

友希那「……問題ないわ、それじゃあ来週の水曜日に」

〇〇「うん、お願いします？じゃあ出ようか」

友希那「ええ……カチャ……パタン」

ロビー

〇〇「友希那ちゃん今日は僕が出すよ、教えてくれたお礼」

まりな「ん？教えて貰ったてなにを？」

〇〇「歌ですよ、しばらく教えて貰う事になったんです」

まりな「そういえば、今度カラオケ大会出るって言ってたね、友希那ちゃんが師匠で最強だね〜〇〇くん頑張るんだよ？」

〇〇「はい？友希那ちゃん今日はありがとう？」

友希那「いえ…私も今日を通して自分なりにも発見があったからお礼いうのは私よ、ありがとう…そして次の水曜日…また頑張りましょう」

〇〇「うん、また水曜日？」

友希那「ええ…それじゃあ」

そして水曜日

友希那「そういえば、その大会はいつなのかしら？」

〇〇「再来週の日曜日さ、かなりレベルは高いよ」

友希那「そう……それじゃあ日曜日までに、きっちり仕上げるわよ」

○○「うん、お願いします?」

友希那「それじゃあ、始めましょう……♪♪」

○○「〜♪……♪……」

数時間後

友希那「〜♪……ふう今日はここまで、○○サビに入る瞬間に音程が外れかけてるわ、この課題は来週までに修正しなさい」

○○「は……はい?」

友希那「それと次の休みはいつかしら?」

〇〇「次も同じ水曜日だよ、今月は全部水曜日に休み入れたからさ」

友希那「わかったわ、それじゃあ次の水曜日に」

〇〇「はい？」

ロビー

まりな「あ…終わったみたいだね今日もお疲れ様？」

〇〇「あ…まりなさん、はい今日も終わりました？友希那ちゃん教えるのが上手で…上手くなってるのを自分でも感じてます」

友希那「当然よ、それよりも〇〇さん油断はしてはいけないわ来週はさらに厳しくい
くからそのつもりでいなさい」

○○「は、はい？あ…じゃあ、まりなさんまた明日」

まりな「うん、また明日？」

そして迎えた次の水曜日

友希那「さあ○○さん、今日はサビに入る時、音程が外れかけないようにする特訓よ…サビからいくわ…」

○○「はい？…」

友希那「…どうしても外れかけるわね、○○さん、ここはこうして…」

○○「うん、」

友希那「その調子よ、もう一度同じように」

○○「〜♪…〜♪〜♪〜♪〜♪〜♪…ハッ」

友希那「今の、今の感じを忘れないで…じゃあ頭から通して」

○○「うん、〜♪…〜♪〜♪〜♪〜♪〜♪〜♪〜♪〜♪〜♪」

友希那「…ほぼ完璧ね、でもまだ磨けばさらによくなくなるはず○○さん…今日はもう時間だけど来週はさらにレベルアップしてくわ」

○○「はい？お願いします！」

その後も厳しい練習は続いた

○○「いよいよ、今週か…友希那ちゃんと一緒に練習も今日が最後になるな」

友希那「正直いうと、ここまでになるとは思わなかったわ…○○さん正直いうと私から教える事はもうない、だから今日は私にみせて、いままでの教えた練習のすべてを」

○○「友希那ちゃん…うん…♪」

数時間後

○○「友希那ちゃん…今日までありがとう」

友希那「こちらこそ…あなたに教える事で私にも課題が見つかりレベルアップが出来た…○○カラオケ大会頑張りたい、大会は何時開始かしら？」

○○「夜の6時からさ、それまではここで仕事してるよ」

友希那「そう…それじゃあ○○さん、大会の日私もいくわ大会頑張つて」

〇〇「うん？じゃあ出ようか」

友希那「ええ」カチャ…パタン

そして迎えた大会当日

友希那「次ね…まさかオオトリとはね」

「ええでは次の方で最後となります、エントリーN.O. 25番！〇〇さん、それではどうぞ。」

〇〇「エントリーN.O. 25番〇〇です…歌う曲は」()には好きな曲を当てはめてお楽しみください」

友希那「(その調子よ、練習の事を思い出して)」

「ございます？」
パチパチパチパチ

たえちゃんと過ごす昼下がり

C i R C L E とある冬の昼下がり

ヒユウウ…ヒユウウ…

〇〇「うう外は寒そうだなあ、朝も寒かったし」

たえ「実際外は寒いよ～ねえ〇〇さん飲み物奢ってほしいな～なんて」

〇〇「休憩時間になったらね？しかし、本当寒くなつたなあ…たえちゃんはクリスマスとか用事あるの？」

たえ「ん～クリスマスは今のところないかな、でも香澄がきつと（クリスマススライプやりたい（≡▽≡））とか言い出すかも」

〇〇「ああ…香澄ちゃんならありえそうだね?…」

たえ「でも女の子にクリスマス予約聞くて…〇〇さん意味わかってる?ポピパの皆に言っちゃおうかな、〇〇さんに口説かれちゃったて」

〇〇「わわわ?それだけはやめて?あマフィンもつけてあげるから?」

たえ「よし言質とった?…休憩て何時からですか?」

〇〇「ん?三時半だからあと10分で休憩になるから」

たえ「まだ10分あるのかあ…よし」スク

〇〇「時計の針進めてもだめだからね?てかやめて?」

たえ 「ぶー（ ・ ε ・ ） ……にしても、店内は暖かいですね」

〇〇 「まあ暖房きかせてるからね」

たえ 「帰りはもっと寒そう？…〇〇さんせつかくだから送って欲しいかも」

〇〇 「ごめん？今日閉店までシフトだから無理？…」

たえ 「むう……来年は三年生かあ進路とかどうしよう」

〇〇 「なにか夢とかあるの？」

たえ 「夢かあ、夢というよりは願望はあるかも…ポピパと皆といつまでもバンドをしてたいお願い」

○○「そっか……その気持ち大切にね」

たえ「はい？」

○○「さて…休憩時間になったし、カフェ行こうか好きなの奢るよ？」

たえ「わあ、ありがとうございます♪じゃあミルクティーとマフィンお願いします？」

○○「オーケーよしじゃあ行こうか、まりなさん休憩行ってきます」

まりな「了解」

外のカフェ

〇〇「ううう寒いなあ？たえちゃん先に席取っててもらえるかな？」

たえ「了解です、じゃあ先に座ってるね」

〇〇「おう？さて……すいませんミルクティー二つとマフィン二つお願いします」

「かしこまりました少々お待ちください………お待たせしました？全部で〇〇円になります」

〇〇「では丁度で」

「丁度いただきます、ありがとうございます？」

〇〇「……お待たせ？熱いから気をつけて」

たえ「はい？いただきます、うーん美味しい」

〇〇「うしじやあ僕も…ズズ…うん美味しい？からだが暖まっていく」

たえ「……今年もあと少しですね」

〇〇「だねく色々あつたなあ」

たえ「私も色々あつた」

〇〇「たえちゃんは特に色々あつたね、ズズ…でもそれもまた思い出さ」

たえ「…思い出、あ〇〇さんの思い出も聞かせて欲しい」

〇〇「思い出かあ…色々あつて多分話しきれないよ？」

たえ「じゃあ最近の？最近の思い出エピソード聞きたい」

〇〇「最近かあ…となると冬キャンの星空鑑賞かなあ、空気が澄んでてさ満天の星空が輝いてたよ」

たえ「わあ、私もいつてみたい？」

〇〇「いくときは寒いから気をつけてね？と…そろそろ戻らないとゴクゴク…プハア…バクン…モグモグ、ゴクン…うしじやあ僕は先にいくね」タタタタタ

たえ「いつてらっしゃーい…〇〇さんも大変だなあ…ズズー…カチャン」

一周年記念回！友希那さんとの新婚生活く

ある早朝く新婚夫婦の自宅く

友希那「ねえ、○○…起きて朝よ」

○○「(…このまま起きなかつたらキスしてくれるかも) スー…スー…」

友希那「もう、早く起きないと…○○の貯めたスターでガチャ引いちやうわよ」

○○「ふあゝよく寝た、朝か」

友希那「やっと起きたわね、ほら朝くはん出来てるわ急いで食べましょう」

○○「おう?」

リビングく

友希那「それじゃあ、いただきます」

○○「いただきます?ズズー…うん美味しい?」

友希那「ありがとう／＼あ…今日は遅くなるのかしら?」

○○「いや今日は17時上がりだから早いよ」

友希那「そうわかったわ、ねえ最近の子たちはどうかしら?」

○○「そうだなあ、ああかつての香澄さんみたいな、パワフルなこがいるかな」

友希那「そう…あつてみたいわね」

○○「はは、多分卒倒するだろうなあ何しろ友希那たちは伝説だから」

友希那「あら、それじゃあひよっこりと行ってみようかしら」

○○「大騒ぎになるからやめてくれ汗」

友希那「冗談よ」

○○「友希那が言うのと冗談に聞こえないよ汗…ズズ…パク」

友希那「私たちだって充分にわかってるわ、どれ程の影響力があるかもだから安心して」

○○「お、おう…ズズ…プハア、よしごちそうさま…じゃあ行ってくる」

友希那「いってらっしゃい」ガチャ…バタン

C i R C L E

○○「おはようございます?」

まりな「あ、○○くんおはよう?」

○○「まりなさん、おはようございます?」

まりな「おはよう?今日もよろしく!」

○○「はい?では着替えてきます」

一方自宅へピーンポーン♪

友希那「あら…なにかしr…ムグググ!」

「いけないよ?不用意にドア開けちゃ」

友希那「むぐー…むー…:…ムガ?」

リサ「あたり…もう言ったでしょ、ドア開ける前はカメラインターホンで確認しなつて」

友希那「うっかりしてたのよ、それよりも何か用かしら?」

リサ「特に用はないよ、ただ、友希那これから家事でしょ、まだまだ新米奥さんのために私がお手伝いにね♪」

友希那「あら…助かるわ、それじゃ洗濯のほうお願い出来るかしら?私は洗い物をすませとくわ」

リサ「オーケー?それじゃ始めるとしますか?」スク

友希那「ええ」スク

そして再びC i R C L E

○○「よいしょ…ふう、よし二番スタジオの清掃完了?えーと…機材の調子は、よし……まりなさん二番スタジオの清掃完了しました、機材もオーケーです?」

まりな「ありがとう、じゃあ並んでお客さんたち待とうか」

○○「はい?…あ、いらっしやいます」

香澄「こんにちはー(≧≡▽≦)あ、○○さん今日も友希那さんとは熱いキスしました?」

○○「ぶふ？今日はしてないよ？あ…」

まりな「ほうほう、つまり何時もはしてると」

香澄「じゃあじゃあ、帰った後もやっぱり？」

○○「ま…まあ…してる、かな」

「きやー（／／▽／／）」（まりな&香澄）

○○「これ以上は、話せないよ？…そういうえば香澄さん今日は練習ですか？」

香澄「○○さんに急に営業モード入りしましたね？いやあ今日は仕事も休みもお休みなんだけど、暇でついフラッと…：それよりも他にお客さんいないし、今まで通りの話し方でいいと思いますよ？」

○○「フラツとて…まあ他のお客さんくるまでなら?…」

香澄「やったー?…ある」スカ…バタバタ

まりな「はい、抱きついちゃだめだよ?誤解招いちゃうから」

香澄「あ…えへへ?」

○○「香澄ちゃん抱きつくのはやめてね?そうそう、次のうちでライブだけど」

香澄「はい、そこは前回の打ち合わせどおりで、く…く」

○○「はい…じゃあ…」

まりな「(あー二人ともすっかり仕事モード入ってる、すっかり社会人だねえ)」

再び戻って自宅へ

リサ「よし、それじゃあ洗濯始めますか♪…やっぱり○○さんの服大きいなあ」

友希那「ジャーバシヤバシヤ、ジャー…キュ…ふう思ったより早く終わったわね、リサ手伝うわ」

リサ「サンキュー？…て、わあ○○さん凄いのきてるね？」

友希那「○○の趣味よ、それよりじろじろ見ないであげて…」

リサ「そうだね？…」

友希那「…よし洗濯はこんなものね、リサお茶入れるわ」

リサ「サンキュー♪新妻、友希那のお手並み拝見と」

友希那「何時も飲んでるじゃない…」ガラ…

リサ「いやあお決まりのセリフかなあて…ヨイシヨ」

友希那「どんな決まりよ汗…はい入ったわ…まだお昼にもなってないのね」

リサ「旦那さんの帰りが待ち遠しい?熱々だねえ」

友希那「あ、愛する人の帰りが待ち遠しい当然じゃない／＼ゴニヨゴニヨ」(小さな声で呟く)

リサ「まあすぐに夕方になるって?」

友希那「え…ええ／＼」

そして時間は流れていき夕方方々

〇〇「……もうすぐで上がり時間か、しかし香澄さんも変わらないなあ」

まりな「そうだねえ、あの活発さは何処から来るんだろう」

〇〇「今が楽しい、その気持ちからでしょうね……と、五時かそれじゃあまりなさ
ん先に失礼します」

まりな「うん、お疲れ様？また明日もよろしく！」

〇〇「はい……それじゃあお疲れ様でした」パタン

まりな「お疲れ様？」

道中

〇〇「うう夕方になると更に冷え込むなあ、うう？走るか」タタタタタタ

そして自宅前へ

リサ「じゃあ友希那、またね?て、○○さん仕事お疲れ様です?まりなさん元気ですか?」

○○「リサさん、元気も元氣びんぴんしてるよ?…寒くなつてねえ、リサさんもインフルには氣をつけてね?」

リサ「うん?あ、それじゃあ」

○○「ええ…また…ただいまー?」

友希那「あら、お帰りなさい…さつき外でリサさんにあつたでしょ」

○○「うんちようどバツタリあつてさ、外は寒いよ?あ…手洗いしてくる?」

友希那「ええ…それと、洗い終わったら」

〇〇「…ああもちろん？」

そして手洗いも終わり

友希那「じゃあ〇〇、今日も一日お疲れ様…ン」

〇〇「ただいま？友希那…ン」

友希那「ハ…それじゃあ夕飯にしましょう」

〇〇「だな？いやあお腹すいたあ」

友希那「今日はシチューよ」

〇〇「やったー？」

友希那「それじゃあ手をあわせて、いただきます」

〇〇「いただきます?…そうそう今日香澄さんが」

友希那「…あら彼女相変わらずなのね、まあそこが彼女のいいところでしょうけど、
そうそうリサつたら今日いきなり…ハア」

新婚夫婦の自宅に楽しそうな笑い声と会話が響いたそうなの

〇〇「♪♪」

友希那「…?」(…の部分は好きな会話シーンをご想像ください)

ちゅちゅ様登場！

○○「ほ、ほ、ほ……ふう、少し休憩……暖かい飲み物でも」チャリン……ピ……ガタタ……カシユ

「Hei……○○」

○○「ん？ああ……ちゅちゅちゃん？こんにちは、あ……暖かい飲み物のむ？」

ちゅちゅ「センキュー……いにくわ、○○は何してたのかしら？」

○○「ん？ああジョギングしてたんだけど、ちよつと休憩でいったところかな」

ちゅちゅ「へえ……ジョギングはいつからしてるのかしら？」

〇〇「去年かなあ、バタバタしたりすることもあるから、体力をつけたくてね」

チュチュ「なるほどね…所で〇〇、ウチにはくるきはないかしら…今よりも厚待遇を約束するわ」

〇〇「はは…前の僕ならおそらく受けてただろうね」

チュチュ「それじゃあ」

〇〇「でもね…そうすると僕の夢がたたれてしまう、ガールズバンドたちのこたちを精一杯輝かせるといふ夢が」

チュチュ「on…残念だわ、〇〇ほどの人材はそういないのに」

〇〇「せつかく誘ってくれたのにごめんね？」

チュチュ「いいわ、でも私は諦めないアンタをあのライブハウスから引き抜いてやるんだからー！」

〇〇「チュチュちゃん、しー？」

チュチュ「s o r r y…コク…」

「あ、チュチュ様ー？」

チュチュ「あら、パレオじゃない…何かしら？」

パレオ「チュチュ様を見かけたので声を…て、〇〇さんこんにちは！は…〇〇さん、ひよつとしてチュチュ様と密会を!？」

〇〇「違うよ!?!てか、密会とかどこで覚えたの?そんな言葉?もう、絶対他では言わないですよ?色々ややこしくなるから汗」

パレオ「?はい」

チュチュ「それよりもパレオ、私はいま営業の途中よ…少し静かにしてもらえないかしら」

パレオ「営業で、まさかチュチュ様〇〇を引き抜くのですか!?!」

チュチュ「ええ…もつともフラれたけどね、でも諦めてはいないわ…またいい条件を揃えくる、その時は改めて話しましょう」

〇〇「あ…ありがとう?…でも、きつと僕の答えは変わらないよ…:…さてそろそろい
くね、チュチュちゃんパレオちゃん最近は寒さも本格的になったから気をつけてね、こ
れカイロ」つかイロ

パレオ「あ、ありがとうございます?」

〇〇「どういたしまして♪それじゃ」タタタタ

チュチュ「ぐぬぬね、絶対引き抜いてやるー!」

翌日〱C i R C L E〱

○○「おはようございます?」

まりな「おはよう?○○くん、そうそう…さっきまでチュチュちゃんが居ただけど…○○くんチュチュちゃんフッタて本当?」

○○「ブ?まりなさん、それは凄い誤解です…フッタというよりは、チュチュちゃんがやってるラスのバンドスタッフとして誘われたのを僕が断つたというのが正しいです?」

まりな「知ってる、少しからかっただけ♪でも、どうして断つたの?うちより条件よかつたんでしょ?」

○○「確かに条件は良かったですね…でもそうすると夢が叶えれないですしガールズ

バンドのこたちとの約束を破ることになります…だから断ったんです」

まりな「…そっか、○○くんは本当にあのこたちが好きなんだね？」

○○「はい？だからこれからも精一杯輝かせたいと思ってます？」

町はクリスマス一色

商店街へ

〇〇「はー…今年もこの時期が来たなあ」

蘭「〇〇こんにちは」

〇〇「蘭ちゃん、こんにちは？お出掛けかい？」

蘭「うん、ちよつと楽器店に」

〇〇「そっか、気をつけてね」

蘭「うん、○○さんも気をつけて…○○さんは何してたの？」

○○「まあ夕飯の買い出しかな？そしたら、大きいクリスマスツリーみてさ…もうすぐクリスマスかあと思ってたね」

蘭「そう…あ、じゃあ○○また」

○○「うん、またね？…あ、そろそろいかないと」スタスタスタ（それぞれの目的地へ）

○○「はあ…しかし冷えるなあ」

あこ「あ、○○さん？こんにちは！」

○○「あこちゃん？こんにちは」

あこ「ねえねえ、○○さん今からあこことお出掛けしません？」

〇〇「いやあごめんね？今から買い出ししないといけなくてさ？」

あこ「むう、あ…じゃあ着いてっていいですか？」

〇〇「いいよ？」

あこ「やったー？〇〇さんとデートだよ」

〇〇「はは…しかし冷えるなあ、あこちゃんカイロとかどう？」

あこ「うーん、いいです、こうすれば暖かいですから♪」

〇〇「わわ？あこちゃんこれはちよつとまずいかな？」

あこ「いいじゃないですか♪私は気にしないですよ」グイ…フニ

〇〇「僕がきになるの？それに…ね？あこちゃんの、その…当たってさ？」

あこ「当たって…あ／＼」

〇〇「ね？さ…少しな…寒くなるけどカイロ渡すから？」

あこ「はい／＼あ、所で〇〇さんはクリスマス予定とかあるんですか？」

〇〇「予定かあ…ないよー泣、今年も一人寂しくメリーサミシマスだよ（TOT）」

あこ「まあまあ？…でも意外でした、てつきり大切な人と過ごすのだとばかり」

〇〇「…大切な、人か…」

あこ「…〇〇さん？ひよっとして」

〇〇「ん？いや、そうではないよ？…それより早くしないと日がくれちゃう、急ぎ」

う?」

あこ「!?わわ／＼／＼○○さん…て、手握っちやった／＼」タタタタ…

店内くく♪

あこ「着きましたね〜まずなにかいます?」

○○「そうだなあ、今日は冷えるから白菜の水炊きにしようかな、あこちゃん鶏肉と昆布持つてきてくれるかな?」

あこ「了解です♪」タタタタ

○○「さて、まずは白菜を…うーん、これかな♪後は椎茸と人参をいれて…」

あこ「○○さんお待ちせしました♪」

〇〇「ありがとう♪うん、いい感じの大きさだ♪…後はなに入れようかな…うーん、あまりごちやごちやするのもあれだし、これくらいかな」

あこ「……じゃあレジいきましよう♪」

〇〇「だね♪あ、あこちゃん先にレジの前の袋詰めスペースに行ってもらえるかな？」

あこ「了解です♪じゃあ先にいってますね？」 タタタタ…

〇〇「よし…さて」 カラカラカラ…

レジの前の袋詰めスペース

〇〇「お待たせ？待たせてごめんね？」

あこ「〇〇さん、遅いですよ？」

〇〇「いやあごめんごめん？さ…袋詰めしちゃおう」

あこ「はい？」

数分後

〇〇「よしじゃあ行こうか♪それと…はい、これチョコレート」

あこ「いいんですか？ありがとうございます？」

〇〇「巴さんには内緒でね？」

あこ「はーい♪じゃあいきましよう♪〇〇さん」

〇〇「行こう♪」

外へビュウウへ

〇〇「うう寒い？早く帰って仕込みしないと？…でもその前に、燃料補給と…ガコン、あこちゃんはなに飲む？」

あこ「〇〇さんと同じミルクティーで？」

〇〇「了解、ガコン…はい熱いから気をつけて」

あこ「ありがとうございます♪パキ…カラカラ…ゴクゴクゴク…プハア、ああ暖まる」

〇〇「この時期は温かい飲み物が美味しいよねへでも、暖房をきかせた部屋で食べるアイスもまた美味し」

あこ「ああーそれ凄くわかります、何故か冬のアイスで美味しいんですね」

〇〇「夏は氷系、冬はクリーム系でとこかな？」

あこ「でも気をつけないと、取り合いに…雪見だいふくなんて買って帰った日には…」

〇〇「一つをめぐって、戦いが」

あこ「それは我が魔眼の力をもってしても止められぬ争い、人心を弄ぶ雪見だいふくの魔力…恐ろしい…て、いけない？そろそろ帰らなきや？、じゃあ〇〇さんまた明日？」
タタタタ…

〇〇「うん、気をつけて？それじゃあ、また明日！…よし帰って仕込みしないと」
タスタスタ…

今日は楽しいクリスマス！

12月25日〜〇〇宅

〇〇「今日はクリスマスかあ…とはいっても、予定はないし、今日はシフトも休みだからなあ…オーナもまりなさんも」

「若いんだから、今を大切にしないと駄目だよ？」

まりな「〇〇くん、大切な日はやはり大切な人とすごさなきや♪」

〇〇「とか、変な気使うんだもんなあ、おかげでクリスマスじゃなくてサミシマスだよちくしょー泣…だれか来ないかなあ」ピンポン

友希那「私だけど、いいかしら？」

○○「あ…いま開けるよ?…いらっしやい」ガチャ

友希那「こんにちは、突然だけど良かったかしら？」

○○「もうぜんぜんOk、むしろウエルカムさ、何しろ今日は休みなうえに、一人で
凄く暇だったからさ?、それより友希那ちゃんこそ、どうしたの？」

友希那「特に理由はないわ、ただリサと話してたら○○さんところなら楽しく過ごせる
だろうから…て」

○○「なるほど?まあ何も無いけど上がってよ?いまジュース出すからさ…そういえ
ばリサさんは？」

友希那「リサなら、もうすぐくる」

リサ「やつほー? いやあいきなりごめんね、クリスマスなのに暇でき…来ちゃった♪」
○○「はは…いらつしやい? とりあえず寒いから中に入ろう、はいお待たせ? ココア
でよかつたかな?」

リサ「いただきまーす? …ああ暖まる〜」

友希那「ええ、所で○○さん…いきなり来た私たちが言うのもあれだけど、○○さん
この場面…恋人に見られたらマズイかしら?」

○○「うぐあ!?! …あはは、恋人はいないよー (TOT)」

リサ「友希那? クリスマスの日に、恋人の質問は高確率で地雷だった?」
友希那「そ…そう…ごめんなさい汗」

○○「あはは…気にしないで?、でも友希那ちゃんたちが来てくれて嬉しかったよ?
…でも二人は予定とかよかつたのかい?」

友希那「ええ…紗夜は日菜とクリスマスあこは、燐子とクエストだって言ってたわ」

〇〇「そつか…まあそれぞれクリスマスを過ごしてるんだなあ、よし…二人とも今日は時間大丈夫かな？」

友希那「ええ…問題ないわ」

リサ「むしろ誘ってくれないと、女二人で寂しい夜になっちゃうよ？」

〇〇「そつか?じゃあ今日はうちで夕飯食べてかない?ミニクリスマスパーティーでもやろうよ」

リサ「お、いいね?やろうやろう?友希那はどうかな?」

友希那「そうね、たまにはそういうのも良いかもしれないわね…それじゃあ、夕方に
なったら買い出しにいきましょう」

〇〇「だね…しかし、それまでは暇だな？」

リサ「まあ…でも案外時間がたつのは早いよ？」

〇〇「そうかなあ…」

そして迎えた夕方

〇〇「そろそろ頃合いだし、行こうか」

友希那「ええ…いきましよう」

リサ「外寒そ〜？」

○○「まあ充分に厚着しないとね? えー…鍵…鍵…」

リサ「ほい♪○○さん」

○○「ありがとう♪よし…じゃあ出発?」

リサ「進行?」

スーパ―

○○「さーてまずは、なに買おうか」

リサ「クリスマスasteいったら、やっぱチキンでしょ♪」

○○「チキンかあ…いいね? よし惣菜コーナーいこう♪あ…友希那ちゃん、ケーキ持ってきてもらえるかな?」

友希那「わかったわ」

リサ「じゃあ私たちは惣菜コーナーに♪」

惣菜コーナー

○○「えーと…これがいいかな、リサちゃんは欲しいのある？」

リサ「そうだなあ、あ…サーモンのマリネ食べたい？」

○○「マリネかあ、よしじゃあ魚コーナーからサーモン取ってくるから、待ってて」

リサ「了解？」

友希那「お待たせ…あら○○さんは？」

リサ「お魚コーナーいつてるアタシがサーモンのマリネ食べたいってリクエストしたか

らしい」

〇〇「お待たせ?…友希那ちゃんは他に食べたいのなにかい?」

友希那「そうね、特にないわ」

〇〇「そっかじゃあ会計済ませて、はやく帰ろう?」

リサ「だね♪はぁお腹空いた〜」

〇〇「帰ったらいっぱい食べよう、じゃあレジへ♪」

レジ〜

「いらっしやいます?…:〇〇チキンが三点、サーモンが一点、ケーキが一点で〇〇円になります?」

〇〇「二万円からでお願いします」

「二万円お預かりします…〇〇円のお釣りは、ありがとうございます。ありがとうございました！」

〇〇「よし…じゃあ袋につめて、帰ろうか？」

リサ「はやく食べたいなあ、あ…友希那ケーキ持つよ」

友希那「ありがとう…じゃあ私は〇〇さんの荷物を」

〇〇「ん？ああ気にしないで？重いのを持つのは慣れてるからね？」

友希那「私の気がすまないわ、それじゃあ…これならいいかしら？」（袋の片方をもつ）

〇〇「まあこれなら…でもいいのかい？」

友希那「ええ…さあ帰りましょう」

○○宅へ

○○「ふう着いた?よし…じゃあさつそく作ろうかな、友希那ちゃんケーキ冷蔵庫に入れたら野菜室から玉ねぎお願い」

友希那「ええ…○○さん、はい玉ねぎ」

○○「ありがとう?リサちゃん、マリネ液を作るからボウルにオリーブオイル60mlと酢を30mlに砂糖をこさじで1杯と塩をだいたい子さじで1杯、黒胡椒をひとつまいれパセリとピンクペッパーをいれて混ぜてもらえるかな?」

リサ「了解?」

○○「じゃあ僕は玉ねぎを薄切りにして水にさらす……サーモンを半分に切つて、リサちゃんさつきのマリネ液持つてきてもらえるかな？」

リサ「オーケー♪はい、マリネ液」

○○「ありがとう……よし……玉ねぎの水気を取つて……友希那ちゃんキッチンペーパーお願い」

友希那「これかしら？……っ」

○○「うん、これこれ？キッチンペーパーで充分に水気をきつて、薄切りにした玉ねぎをイン？……したらよく和えて、サーモンをイン？……したらまた和えて……よし冷蔵庫に一時間、友希那ちゃん冷蔵庫にお願い」

友希那「わかつたわ……それじゃあ、頃合いになったらチキンを温めましょう」

〇〇「だね?」

一時間後

〇〇「頃合いだね、買ってきたチキンを温めて」ピーピーガチャ

リサ「うーん、いい匂い?あ…サーモンのマリネだすね、よいしょ」コト

友希那「はい、お皿…それじゃあ…いいかしら」

〇〇「うん?いただきます?」

「いただきます?」

リサ「じゃあ私はマリネから…うーん美味しい?」

友希那「ええ口に入れた瞬間、マリネのさっぱりした味わいが広がるからチキンのこさを消してくれる相性ばっちりね」

リサ「本当リクエストしてよかったよ〜？」

〇〇「僕も作った甲斐があるよ？…うん美味しい？…」

そして夕飯も終わり

〇〇「はい、ケーキ？…、ココアをいれて…じゃあ二人ともマグカップもった？」

リサ「持ったよー？」

友希那「持ったわ…」

〇〇「じゃあ…メリークリスマス？」

「メリークリスマス」カコ（マグカップがプラのため…この音となってる）

友希那「うん…美味しいわ」

リサ「うーん美味しい？あれ、○○さんイチゴ乗ってなかった？」

○○「ああ、僕イチゴは先に食べちゃうほうでさ、あの酸味が苦手で」

友希那「そう…私とリサは後に取っとくわね」

リサ「そうそう…：ケーキのイチゴで、特別な感じがしてさ」

○○「ああ分かるそれ、ケーキの上に乗ってるイチゴやプレートチョコプレートで特別な感じがするよね？」

友希那「本当に不思議ね…：所で○○さん、今日泊まってもいいかしら？」

〇〇「いいよ？でも先ずは親御さんに連絡しないとね、リサさんも…さすがに無駄外泊は不味いから？」

友希那「じゃあ、ちよつと連絡するわ」

リサ「アタシもするね〜？……」

数分後

友希那「これで、気がねなく泊まれるわね」

リサ「アタシも連絡終わったよ〜？…〇〇さん、今日は楽しもう？」

〇〇「もちろん？…さあケーキまだあるよ〜？」

そしてパーティーも終わりく

〇〇「よし…洗い物も終わったし、そろそろ寝ようか…布団…布団、よいしょ…さすがに三つ並ぶと狭いね?…」

リサ「でもこの方が暖かいよ?私〇〇さんの隣もらい♪」

友希那「じゃあ私も〇〇さんの隣だから、〇〇さんは真ん中」

〇〇「了解?じゃあ友希那ちゃん…リサちゃん、おやすみ?」

友希那「おやすみなさい…〇〇さん」

リサ「〇〇さん、おやすみ〜?」

除夜の鐘をききながらあなたと

12月31日〜大晦日

〇〇「今年もあと五分か…あつという間だったなあ」

まりな「そうだね、今年もお疲れ様…にしてみも…〇〇くんとも、もう二年の付き合いか」

〇〇「そうですね…C i R C L Eでまりなさんに出会って、最初は色んな事を教わって、そして…一年がたったとき時にこ、恋人同士になつて…／／」

まりな「みんな祝福してくれたね♪…ねえ〇〇くん、今年もありがとう？来年もよろしくね」

○○「まりなさん…こちらこそよろしくお願ひします?…もう少ししたら初詣いきましようか」

まりな「うん…もうすぐカウントダウンか」ゴオ〜ン…ゴオ〜ン

○○「除夜の鐘か…」

まりな「所で、○○くんは来年の抱負は何かな?」

○○「抱負ですか、優しくあること、そしてガールズバンドのこたちを、今年以上の輝かせること…ですね」

まりな「そっか、○○くんらしい抱負だね…」

〇〇「そして…まりなさんを幸せにすること…」ギョ

まりな「ひゃ!?!／／〇〇くん？」

〇〇「…まりなさん今はまだ頼りない僕ですが、必ずまりなさんを幸せにします」

まりな「そ、それって…そういうこと、だよね？」

〇〇「……でなければ言わないですよ／／」パイ

まりな「……うん、待ってる、絶対に幸せにしてね〇〇くん？」

〇〇「はい!……まりなさんの抱負はなんですか？」

まりな「私は…〇〇くんと一緒にいられるようにすることかな♪」

〇〇「それは抱負というより願いじゃあ…嬉しいですけど／／」

〇〇「……除夜の鐘の音、いい音ですね」

まりな「そうだね……私も除夜の鐘の音だな」ゴオ〜ン……ゴオ〜ン

大晦日の夜、町に除夜の鐘の音が包み込む、人々はその中で煩惱を振り払い新年を迎える準備をする

〇〇「まりなさん……あーん」

まりな「あーん……うん、このミカン凄く美味しい？」

〇〇「特売でたくさん買ったんです、おかわりいっぱいありますよー♪」

ゴオ〜ン…ゴオ〜ン

まりな「それじゃあ〇〇くん、おかえしに…あーん」

〇〇「あーん…うん甘くて美味しいです♪…まりなさん目を閉じるください」

まりな「うん…」

〇〇「…ん…は、ごちそうさまです、まりなさん♪」

まりな「こつちこそ、ごちそうさま♪…」

大晦日の日、今年最後のキスをかわす二人…そして年が明ければ新年の最初のキスと
いった所か、熱い二人である

テレビからはカウントダウンが始まり新しい年が刻一刻と近づく

まりな「うん…ふ、大好き…」

○○「ん…ふう僕も大好きです…カウントダウンか、いよいよですね…まりなさん今年もありがとうございました！来年もよろしくお願いします？」

まりな「うん、来年もよろしく？○○くん」

C i R C L E 外カフェの特製タピオカミルクティーとス
ペシャルミートソースパスタ

○○町へ

○○ 「12時かあ〜…ん？」

「今日は○○の Pasta よ♪」

「やったー？○○ Pasta だ？」

「子供たちも大喜びの○○ Pasta、あなたも是非ご賞味ください？…」

○○ 「Pasta かあ最近食べてないなあ…てか Pasta の CM みてたら…お腹が空いた…」

店探そう」

〇〇「今の僕の腹はパスタ腹、美味しいパスタのお店は…そうだ確かC i R C L Eの外にカフェがあったな、ランチメニューパスタあるかも、いこう」

C i R C L E外カフェへ

〇〇「あった、あった…すいません」

「いらっしやいませ?…ご注文をどうぞ?」

〇〇「えつと…スパゲッティミートソースパスタとタピオカミルクティーください」

「かしこまりました?では少々お待ちください?」

〇〇「ふう…さてじゃあ座って待ちますか、わあ凄い…マカロンかなあれ…いかんい

かんジロジロみるのは失礼だ」

「お待たせしました？タピオカミルクティーです…パスタはもう少しお待ちください」

〇〇「はい、ありがとうございます？…いただきます」

カフェの特性タピオカミルクティー、甘くてすつきり、ぶちつとした食感も楽しい一品

〇〇「…うん、美味しい…カロリーは高いけど、この美味さの誘惑には抗えない、そしてメインのタピオカ…ぶちつとしてる、そろそろパスタかな」

「お待たせしました？スペシャルミートソースパスタです？」

スペシャルミートソースパスタ、ほどよい固さのパスタにお肉がゴロツとした肉の旨みたっぷりのミートソースがかかったカフェ特製パスタ

○○「おお、これはなかなか期待できそう…いただきます?…ズズ…パクパク…ズズ…うん美味しい?口にいれた瞬間に広がる肉の旨み…そして嬉しいゴロツとしたお肉…これをパスタと一緒に…うーん、やはり大当たりズズ…パクパク…」

○○「フオークが止まらない、無限パスタ天国…ズズ…パクパク…ズズ…ズズ…パクパク…最後にミルクティーを飲んで…ゴクゴクゴクゴク…ぷはあ…ごちそうさまでした」

巴「あ、○○さんだ…こんちは?」

○○「あ…こんちは?練習?」

巴「いや、お昼食べに来たんだ…○○さんはなに食べたんだ?」

○○「僕はパスタを食べたよ、ここのミートソースパスタ…お肉がゴロツとしてて美味しかった?」

巴「だろう？このパスタは私も一押しでき、私もこれから頼むんだ、○○さんはもう帰るのか？」

○○「そんな所…じゃあ巴ちゃん…風邪に気をつけてね」

巴「あはは、○○さんもな♪」

○○「もちろん？それじゃあ」

巴「それじゃあ♪」

退出

○○「知り合いにあつて少しびつくり、でもこういうのも悪くないな…さて明日からまた頑張りますか？」スタスタスタ

パレオちゃんとお話し

C i R C L E 外のカフェ

P M 1 7 時 0 3 分

〇〇 「ふう今日もお疲れ様、明日は閉店までかあ…とりあえずコーヒー買って休も……すいませんカフェオレ一つお願いします」

「かしこまりました？お会計500円になります」

〇〇 「じゃあちようどで」

「ちようどいただきます？でら左にそれでお待ちください」

〇〇「ありがとうございます?.....ふう」

パレオ「.....あ、〇〇さん?」

〇〇「ん?おお、パレオちゃんこんばんは?」

パレオ「こんばんは?いま帰りですか?」

〇〇「そんなとこ、とはいっても少し休憩してからだけだね」

パレオ「へえ...あ、いっしょしてもいいですか?」

〇〇「はい」

「お待たせしました?カフェオレです、熱いのでお気をつけください」

〇〇「はい、ありがとうございます?……よし、じゃあ座ろうか」

パレオ「はい?……ここにしましょう♪」

〇〇「そうしよつか?ヨイシヨ…ふう、ズズ…コク…はあ暖まる」

パレオ「〇〇さんはカフェオレが好きなんですか?」

〇〇「まあね、パレオちゃんはどんな飲み物が好きなのかな?」

パレオ「私ですか?……秘密です♪」

〇〇「あらら?」

パレオ「でも今日はついででした、〇〇さんに会えたんですもん」

〇〇「ありがとう?パレオちゃんは今からRASの練習かい?」

パレオ「はい？でもまだ時間があるので、こうやって時間つぶしてるんです、でも一人だと退屈なので、○○さんいてよかった♪」

○○「確かに時間を潰すなら複数でいるほうがいいよね、ズズー…しかしパレオちゃんでさ」

パレオ「なんででしょう？」

○○「凄く可愛いね、ちよつとデート気分♪」

パレオ「か…かわ!?!…ありがとうございます／＼」

○○「こつちこそ一緒にお茶つきあってくれてありがとうございますね？」

パレオ「こちらこそありがとうございます／＼あ、でも他の人に見つかったら誤解されるんじゃない」

〇〇「大丈夫、は僕からちゃんと説明するから」

パレオ「そうですか？あ…いけないそろそろ行かないと？じゃあ〇〇さん、また？」

〇〇「うん？またね…ふう…ズズー」

〇〇「パレオちゃんか…なかなか明るくて可愛いなあ、と…これだとなんか誤解されるな？…ズズーぷはあ…さて帰るか…カフェオレごちそうさまでした？」

「ありがとうございました？またのお越しをお待ちしてます？」

〇〇「…また来ます？ふう〜♪〜♪」（帰り道へ）

C i R C L E ビー〜ボタン！はあはあ…

まりな「あれ香澄ちゃん、どうしたの？」

香澄「はあはあ……た、大変です、まりなさん○○さんが○○さんが！」

まりな「お、落ち着いて？……○○くんがどうしたの？」

香澄「さつき、そのカフェでお茶しようと思つてたんですけど、席に座つた時にパレオさんと話してたのを聞いちやつて……その時に……チラツと聞いちやつたんです、僕からちゃんと説明するから……て」

まりな「……本当に？」

香澄「……はい」

早とちりに気をつけましょう

C i R C L E ロビィ

〇〇「おはようございます?」

まりな「あ、〇〇くん…引き抜きの話し受けるの!??昨日パレオちゃんと話してたって?」

〇〇「え?え?…ああ、あの事かあ?」

まりな「……やっぱり、受けるの?」

〇〇「いや受けませんよ?…大きな誤解です、あれは一緒にいるの見られたら誤解

される…その時は僕からちゃんと説明するって、話しだっただんです?…」

まりな「そ、そうだったの?よかったあ?、あ…〇〇くん多分今日忙しくなると思うよ。」

〇〇「え…マジですか汗」

まりな「うん、だって昨日話してきたの香澄ちゃんだったから…多分今頃、ほとんどのこたちに伝つてるとおもう」

〇〇「ははは…一人…一人に説明するか?」

P M 1 6 時 3 0 分

まりな「時間的にそろそろ放課後だね」

〇〇「ですね?…あ、いらっ s…」ガチャ…ダダダ!

香澄「○○さん、昨日話してるの聞いちゃったんですけど、○○さんいなくなっちゃうんですか!？」

○○「お、落ち着いて? あr」

有咲「○○さん言ったじゃねえか、私たちガールズバンドを輝かせるのが夢だつて…その夢捨てちまうのかよ!？」

○○「だから落ち着いて?…そこ、たえちゃんもりみちゃんも沙綾ちゃんもストップ?…いい? あれは単なる誤解だよ、僕は少なくともやめる気はないよ? てか、香澄ちゃん昨日何処でどこから聞いてたのさ」

香澄「○○さんの真後ろで、○○さんに声をかけようとしたら…説明云々、て話しを」

○○「そっか?…でもね、僕は少なくともやめる気はないよ?」

香澄「よ……よかったあ？私てつきり引き抜き受けるから、その説明とばかり？あ……いけない？私、紗夜先輩やこころたちにも喋っちゃった？」

有咲「香澄……責任もってお前からも説明しろよ汗……たつく香澄の早とちりでこっちは気が気じゃなかったの」

たえ「有咲、すっごい取り乱してたもんね」

有咲「う、うるせー？てか、たえも取り乱してたろ／＼」

沙綾「てか、みんな取り乱してたね？あ……」ガチャ……スタスタスタ

友希那「あら、貴女たちもいたのね……〇〇さん、単刀直入に聞くわ……RASのスタツフとして引き抜きを受けるのは本当かしら？」

〇〇「うん、さつきも話したんだけどね……単刀直入に言うて引き抜きは受けない！それは確かだから」

紗夜「しかし、戸山さんから聞いた話しでは…説明をすると聞いたそうですが」

香澄「あの…それは私の早とちり…です?」

友希那「つまり事実確認もせず他の人にも同じ事を言っただけで…」

香澄「返す言葉もないです?…○○さん、本当にごめんなさい?」

○○「あまり気にしないで?早とちりというのは誰でもあるから?」

あこ「でも今回の件で○○さんの影響の凄さがわかりましたね?」

燐子「そうだね?私も○○さんがいなくなるのは辛いですから」

まりな「いやあ○○くんモテモテだね♪」

○○「ははは汗あと何人に説明すれば…」

香澄「わ、私も手伝いますから頑張りましょう?」

有咲「香澄が手伝うのは当然だけどな」

香澄「あ、ありやしやく泣」

有咲「く、くつつくななあ?…」

その後、彼が他のガールズバンドたち誤解を解いてまわるのに二時間近くかかったそうです

巴ちゃんとカラオケデート

C i R C L E 前々ブオオン！…ザアア…ウイイン

〇〇「よっ、おまたせ？」

巴「大丈夫、待ってないよ？うう寒い寒い？さっついこう」ガチャ…ボタン

〇〇「この時季は冷え込むよね？…よし、行こうか」ブオオオオ…

道中

巴「さて、どこいく？」

〇〇「そうだなあ…カラオケとかどうだろう？最近行ってなかったし」

巴「カラオケかあ、いいなあ行こう♪」

〇〇「よし…それじゃあカラオケヘレッツゴー？」ブオオ…

数分後、カラオケボックス

巴「ふう着いた着いた、さっそく入ろう？」

〇〇「まあ慌てなさんなって、すいません二人で禁煙室お願いします」

「かしこまりました、お時間と機種はどうしますか？」

〇〇「フリータイムで機種は〇〇でお願いします、あとドリンクバーを二人で」（好きな機種を想像してお楽しみください）

「かしこまりました…退室時間知らせてないのでお気をつけください、10番室へどうぞ?。」

〇〇「ありがとうございます?よし行こうか」

巴「ああ?」

室内くガチャ…バタン

巴「うし、それじゃあさつそく歌うぞ、一番は私から…ふわふわ時間?」

〇〇「おお?メジャーだね、そいじゃ入力してミュージックスタート?」

く
く
く

巴「くくく…」

〇〇「……おおお！やあ、巴ちゃんのふわふわ時間よかったよ？」

巴「そ、そうか？それじゃあ次は〇〇さん頼むよ……あ、私飲み物持ってくる」

〇〇「お願い、僕はカルピスコーラで、比率はコーラ3カルピス7で」

巴「わ、わかった？……それじゃあ行ってくる」バタン

〇〇「いってらっしゃい？……よし、それじゃあ最初の一曲、孤独月」ピピピ

〜♪〜♪

〇〇「〜♪〜♪……」ガチャ……バタン

巴「おまたせ？……（〇〇さん楽しそうに歌ってるなあ）」

〇〇「……」

巴「○○さん歌上手いなあ、でも凄く悲しげな歌だったな…○○さんひよつとして」

○○「いやいや？そうじゃないよ？よし次は巴ちゃんだね、なに歌う？」

巴「そつか？…そうだなあ、じゃあツナグ、ソラモヨウ歌おうかな♪」

○○「おお？じゃあ入力して音楽スタート？」

巴「♪♪…」

♪♪…

巴「…ふうどうだったかな？」

○○「凄くよかったよ？思わず感動しちゃった」

巴「へへへ、ありがとうな？」

〇〇「こつちこそ素敵な歌声ありがとうね？さっ、どんどん歌おう？」

それから数時間後

〇〇「〜♪…♪」

巴「〜♪…♪…♪…ふうデュエットもいいな？」

〇〇「そうだね？それじゃあ次で最後にしようか…なに歌う？」

巴「そうだなあ…じゃあラストはこれにしよう、クインテイル☆すまいる♪」

〇〇「いいね♪よしミュージックスタート？」

巴「〜♪…♪…♪」

○○「〜♪〜…♪」

巴「〜♪〜…ふう楽しかった？」

○○「そうだね？また来ようか」

巴「ああ？よしじゃあ部屋出て会計いこうか」

○○「だね？」ガチャ…バタン

カウンター〜

○○「すみませんお会計お願いします」

「はい、ありがとうございます〜ございました？…お会計1900円になります」

〇〇「ではちようどど」

「ちようどいただきます？こちら割引券です次回ご利用じにどうぞ？…またのお越しをお待ちしています」

〇〇「はい？ありがとうございます？よし行こうか」

巴「行こう？」

車内く

〇〇「ふう楽しかった…もう15時かあ、お昼どうする？」

巴「〇〇さんの手料理食べたいな♪駄目…かな??」

〇〇「ぜんぜんいいよ？でも本当にいいの？なんならファミレスとかのが」

巴「いや、本当に○○さんの手料理がいいんだ?…ひよつとして食材とか厳しいかな??」

○○「それは大丈夫?よし、じゃあ僕の家で食べようか?そいじやあ出発」

巴「進行♪」ブオオン!ブオオオ:

まりなさんとの昼下がりが

C i R C L E

ある昼下がりが

〇〇「はあ…暇ですね…」

まりな「まあこの時間帯わね…」ギユ

〇〇「まあ夕方になると忙しくなる…て、なにしてんですか汗」

まりな「ん？この時間帯は暇だし、いいかなあて」

〇〇「いや駄目ですよ?…もしお客さんに見られたら、お互い気まずいですよ?」

まりな「まあ…それもそうか?…私たち付き合ってからもうすぐ二年だね」

〇〇「そうですね、両想いで知ったときは凄く嬉しかったです」

まりな「私も?でも先を越されたのは少し悔しかったかも」

〇〇「あははは?というか告白の順番がじゃんけんて、あの告白したのは後先にも僕らだけだとおもいますよ汗」

回想く

まりな「私はね…〇〇くんの事が!」

〇〇「待つてください…僕も今日貴女に伝えたい事があって、来たんです」

まりな「……私もあなたに伝えたい事があるの、そして想いは私からって決めてるから」

〇〇「まった…僕も想いは自分が先にと思ってるんです」

まりな「……それじゃあ平等にじゃんけんなんてどうかな？勝ったほうが先に想いを伝える…どう？」

〇〇「……わかりました、勝負は一回ですよ？」

まりな「もちろん！それじゃあいくよ？じゃんけんポン!？」

〇〇「ポン!？」

まりな「……負けちゃった…」

〇〇「……ではいきますよ、まりなさん…好きです」

まりな「……はい？喜んで？」

回想終わり

〇〇「いま思うと、すっごい告白でしたよ」

まりな「でもお互いが両思いだったから実現したんだと思う、バンドのこたちも祝福してくれて、応援してくれてる」

〇〇「そうですね、ねえまりなさん」

まりな「ん？なに？」

〇〇「これからもよろしくお願いします？」

まりな「……うん？こちらこそ、これからもよろしく！」

PM16:30

友希那「こんにちは」

○○「はい、いらっしやい?…」

あこ「まりなさん、○○さん今日も仲いいですね♪」

紗夜「宇田川さん、そう茶化すのは失礼ですよ…まあないとおもいますが、業務中はいちゃついたりは」

○○「しないよ?そんなことしたらクレームのもとだからね?…」と、おまたせ一番スタジオ使って?」つ鍵

友希那「ありがとう…それじゃあいきましょう」

紗夜「ええ、ではまりなさん○○さんまた」

○○「うんまた後で練習頑張つて！」

○○「…しかし、紗夜さんは相変わらずだったなあ」

まりな「いつも釘さされてるもんね？…でも業務中てことは業務が終わったら」

○○「まあ業務が終われば問題ないでしょう…さつ…そう思ったら元気が出てきました？と…二番スタジオの機材チェックいつてきます」

まりな「了解？」

そして閉店時間く

○○「よし、見回りも終わりましたし…そろそろですね」

まりな「だね…よし、○○くん今日も1日お疲れ様でした？」

○○「うん、お疲れ様？じゃあ帰ろうか」

まりな「うん、さあ帰ろう」…パタン…ガチャ

つぐみちゃんと過ごすカフェでの時間

羽沢珈琲店

〇〇「こんばんは？まだいいかな？」

つぐみ「〇〇さん？はい、いいですよ注文は何時ものでいいですか？」

〇〇「うん、お願い？……ふう、ヨイシヨと……いやあ外は寒いよ？」

つぐみ「まあ冬ですから？……どうぞおしほりです」

〇〇「ありがとう？……あああ暖かい、それにやつぱ落ち着くなあここは」

つぐみ「ふふ、ありがとうございます？あ、カフェオレお持ちしますね？……おまたせしました♪」

○○「ありがとう？ズズー、うん美味しい、仕事終わりにここで飲む、1日が終わった実感がするよー」

つぐみ「今日もお疲れ様でした？、でも○○さん楽しそう」

○○「まあね、キツイ部分もあるけど楽しいよ」

つぐみ「美人な先輩もいますもんね？まりなさん、優しいし」

○○「こらこら、大人をからかうんじゃないの？」

つぐみ「はいい♪……早く暖かくなってほしいですよね」

○○「そうだね……」

つぐみ「春は暖かいし、お出かけも楽しいし…ねえ春になったら一緒に出掛けませんか？」

○○「……」

つぐみ「○○さん？……ねえつたら？」

○○「……ハ、ん？ああごめん？ちよつと考え事してた？」

つぐみ「大丈夫ですか？結構疲れてるんじゃない？」

○○「大丈夫？からだは頑丈なほうだから？、それよりお出かけの話だったね」

つぐみ「はい？どうでしょう？」

○○「そうだなあ…行こうか？つぐみちゃんとデート行けるし」

つぐみ「で、デート／＼」

〇〇「そう……大人のデート教えてあげようか？」（ささやく）

つぐみ「お、大人の!?／＼そ、それって……つまり／＼」

〇〇「……なあって♪さっきのお返し♪」

つぐみ「……もおおお?／＼、でもお出かけはしたいです」

〇〇「暖かくなったらね、さて……飲み終えた事だしそろそろ帰ろうかな」

つぐみ「はい?ありがとうございました?お会計500円になります」

〇〇「じゃあ千円からで」

つぐみ「はい千円からお預かりします?…500円のおかえしです?」

〇〇「ありがとうございます?それじゃあつぐみちゃん、また明日くるよ♪寒いから風邪には気をつけてね」

つぐみ「はい?お待ちしてます♪〇〇さんもお気をつけて」

〇〇「うん?それじゃあカフェオレごちそうさま、またね」カランカラン…

つぐみ「…からだに気をつけてね、か…〇〇さん明日もお互い頑張りましょう♪と、いけない?看板かえさない?…うう寒い?、ヨイシヨツ…」ガチャ…カタン」

つぐみ「ふう、さて…おとーさーん、看板かえしたよー!」

そして〇〇も

○○「うう？寒い？寒い？、はやく春にならねえかなあもう…」ガチャ…キイ…バタン…ガチャン

○○宅

○○「はあ…デートか、…うし！そのためにもまた明日から頑張らないとな？つぐみちゃん明日もお互い頑張ろう？さて、夕飯にするかなにかあったかなあ…」

今日はバレンタイン♪

C i R C L E ♪ 2月14日 ♪

○○「おはようございます?」

まりな「○○くんおはよう♪そうだ、はい♪ハッピーバレンタイン?」

○○「ありがとうございます?家でゆつくりいただきますね」

まりな「うん、ゆつくり食べて……さあ今日も1日頑張ろう!今日もよろしく!」

○○「はい?よろしくお願ひします!」

まりな「でも〇〇くん今日はチョコで鞆のなかいっぱいになるだろうなあ」

〇〇「去年のことがあるからわりと返答しづらいなあ？」

まりな「去年凄かったもんね♪と…お客さんだ、いらっしやいませ？」

〇〇「いらっしやいませ？」

そして時間はあつという間にすぎPM16:00分

〇〇「うーん、あと一時間か」

まりな「お疲れ様?…さああとひとふんばり頑張ろう！」

〇〇「はこ♪」

そして上がり時間く

まりな「そろそろ時間だね、○○くんお疲れ様？」

○○「はい、お疲れ様でした？ではお先に失礼します」

まりな「お疲れ様？明日もよろしく！」

○○「はい、お疲れ様でした？」

道中く

○○「今日も疲れたなあ、帰ったら一休みして夕飯作ろうかな」トントン

リサ「○○さんこんばんは♪」

モカ「こんばんは〜」

〇〇「リサさんにモカちゃん…こんばんは？バイト終わりがい？」

リサ「そそ、いやあ偶然だけど会えてよかったあ、はい？ハッピーバレンタイン？そうだなからウチくる？友希那も渡したがってたし」

〇〇「そうなの？ならお言葉に甘えようかな」

モカ「ではでは〜その前にモカちゃんから〇〇さんにチョコのプレゼントで〜す」

〇〇「ありがとう？モカちゃん」

モカ「ふふふ〜ホワイトデー期待してますから〜」

〇〇「了解？それじゃあ行こうか」

リサ「といっても途中まで一緒だけどね♪」

モカ「○○さん両手に華てやつですね〜」

リサ「○○さんは両手に華東じゃないかな♪」

○○「ノーコメントで？」

そしてモカちゃんとも別れ、リサ宅〜

リサ「ふう着いた着いた〜あ、友希那〜？」

友希那「おかえりなさいリサ、そして…○○さんこれは私から」

○○「ありがとう？家でゆっくり食べるよ」

友希那「それと羽沢珈琲店に向かってももらえるかしら？」

〇〇「羽沢珈琲店さんに？わかった行ってみる」

友希那「それじゃあ私は戻るわ、リサ少しいいかしら？」

リサ「うん大丈夫：じゃあ〇〇さんまた明日？」

〇〇「うんまた明日？じゃね」

リサ「チョコ食べすぎて鼻血出さないようにね♪」

〇〇「それは反応に困るって？」

そして羽沢珈琲店へ

〇〇「こんばんは〜友希那さんに此方に向かうよう言われたのですが」

つぐみ「〇〇さんこんばんは？これ私からのチョコです？ハッピーバレンタイン♪」

〇〇「あ、ありがとう？所でここに来るよう言われたんだけど…ひよつとして」

つぐみ「私がモカちゃんにお願いしたんです、あ用事ありました?？」

〇〇「いや大丈夫？基本この後は暇だから?…:チヨコありがとうね?」

つぐみ「いえいえ、あ…:表の看板返してきますね」

〇〇「それじゃあ僕も出るね、つぐみちゃんお疲れ様?」

つぐみ「〇〇さんもお疲れ様です?」

〇〇「ありがとう?それじゃあね?」

カランカラン…

再び道中

〇〇「うう冷えるなあ…コンビニで温かいものでも買ってくか…」ウイン…

「いらっしやいませー」

〇〇「ホットコーヒーと…後は軽くなにか食べ物を」

紗夜「こんばんは、〇〇さん」

〇〇「紗夜さん…こんばんは？買い物かい？」

紗夜「ええ日菜がプリンを食べたいと言ったので買いに…〇〇さんは何を？」

〇〇「ホットコーヒーと後は軽く食べ物を買っていいこうとしてたところかな」

紗夜「そうですか…そうだ時間がありましたらウチに来てくれませんか？渡したいものがあるんです」

〇〇「紗夜さんのかい？いいよ？この後はなにも予定ないから」

紗夜「では会計を済ませていきましよう」

〇〇「うん？」

会計後く氷川姉妹宅く

紗夜「ただいま…」

日菜「あ…お姉ちゃんおかえりなさい？あ、〇〇さん…こんばんは♪」

〇〇「こんばんは？日菜ちゃん」

日菜「ちょうどよかったく〇〇さん、はいハッピーバレンタイン♪」

〇〇「ありがとう?」

紗夜「私からもあるんですよ、ちよつと待っててください」

〇〇「了解」

数分後

紗夜「おまたせしました、私からもチョコレートです／＼」

〇〇「ありがとう?家でゆっくりと食べるよ」

紗夜「どういたしまして／＼」

〇〇「と…それじゃあそろそろいくねチョコありがとう?ホワイトデー期待してて?」

日菜「ええもう帰っちゃうのくもうちよつといようよ」

〇〇「ごめんね？今日はアポもとってないし、僕も明日仕事だからさ？」

日菜「むう…じゃあ私が〇〇さんの家にいけb」

紗夜&〇〇「もつと駄目？」

紗夜「日菜、もう少しアイドルとしての自覚をもちなさい」

〇〇「日菜ちゃん、君は人気アイドルなんだから…もしメディアにとられたらパスパレにも影響がいくんだから、軽はずみな行動はだめだよ」

日菜「むう…なんかさっきの二人とも千聖ちゃんみたい」

〇〇「それ本人の前では言っちゃ駄目だからね？…と、そろそろいかないと？それじゃあ？」ガチャ…ボタン

再び道中

○○「すっかり遅くなっちゃった?…うう寒い?」

○○宅へ前

黒服「こんばんは、○○様」

○○「黒服さん…こんばんは?どうされました?」

黒服「はい…これは私たちからの気持ちです」

○○「チョコレート…あ、ありがとうございます?」

黒服「そして○○様…こころ様が○○様に渡したいものがあるとの事です、一緒に来て下さい」

○○「は…はい？」ガチャ…ボタン

車内

黒服「では向かいます、○○様シートベルトを」

○○「は、はい？わ？」ブオオオ…

弦巻亭々玄関

こころ「あ、○○？？こんばんは？」

○○「こんばんは？」

「さ、上がってちょうだい渡したいものがあるの」

〇〇「う、うん?…わわわ?引つ張らないで?」

「このころ「今日のためにみんな手作りで作ったのよ、ここよ…:はいハッピーバレンタイン♪」

薫「こんばんは、〇〇さん今宵は特別な日…私からも気持ちをごめたチョコレートを」

美咲「私からも…チョコレートです、いつも助かってます…」

花音「これは…私からのチョコレートです／＼〇〇さんいつも頑張ってるから／＼」

はぐみ「はい…〇〇さん?ハッピーバレンタイン♪これははぐみからのチョコだよ?」

〇〇「みんなありがとう?凄く嬉しいよ?…それじゃあ長居するのもよくないから、

そろそろいくね」

こころ「わかったわ、黒服さん○○をおうちまで送ってあげて」

○○「いや僕は歩いてくからみんなを」

こころ「それなら問題ないわ、私たちは次のライブに向けて話し合うとこなの」

○○「そっか、じゃあお言葉に甘えようかな？」

黒服「では…○○様こちらへ」

○○「はい…じゃあこころちゃん、花音ちゃん、美咲ちゃん、はぐみちゃん、薫さん…またね？」

薫「どうか○○さんに素敵な夜を」

花音「また？」

こころ「ええ♪またあいましょう？」

はぐみ「またね？」

そして車内へ

黒服「○○様……今日はありがとうございます」

○○「こちらこそありがとうございます……」

黒服「私たち含めこころ様たちからのおくりものは決して下心があるものではありません……いえ今のは忘れてください」

○○「はい？」

○○宅く

黒服 「つきました、○○様今日はありがとうございます」

○○ 「こちらこそありがとうございます？」

黒服 「それでは失礼します」ブオオオオ…

○○ 「……緊張したあ？ふう疲れた？今度こそ…」ガチャ…ボタン

○○ 「ふう…疲れた？…ん？まりなさんからだ、なにになに」

まりな 「いまからCIRCLEにこれないかな？ポピパとパスパレのこたちが渡したいのがあるって？」

○○ 「……いかない訳にはいかないよなあ？仕方ない車ですか？」チャリ……ガチャ…ボタン……ガチャ…ボタンブオン！ブロロロく

C i R C L E ぶブオン！ブオオオ…

〇〇「こんばんは？まりなさんさつきのはいったいどういう…」

香澄「〇〇さんこんばんは？」

彩「こんばんは？〇〇さん」

有咲「その…今日はバレンタインだろ？だから、私たちからチョコを贈ろうと思って
さ／＼」

沙綾「はい…ハッピーバレンタイン♪」

りみ「私のチョコも受け取ってください／＼」

香澄 「私たちの手作りですよ♪」

たえ 「私からはウサギのチョコレート味見もしたから大丈夫」

有咲 「つまみ食いになりかけたがな?…大事に食べてくれよな…その私たちの手作り
チョコ／＼」

○○ 「もちろん味わって食べるよ?」

彩 「次は私たちですね、○○さんハッピーバレンタイン♪これは私からの気持ちです
?」

千聖 「これは私から、ほらイブちゃんも」

イブ 「はい…○○さん私からのチョコ受け取ってください?」

麻弥「これはジブンからです、受け取ってください／＼／そういうえば日菜さんからは受け取りましたか？」

〇〇「はい？紗夜さんに呼ばれた時に、一緒に」

千聖「さすが日菜ちゃん抜け目ないわね…」

まりな「モテるなあ〇〇くん、というか目の前の光景で結構凄い光景なんだよね…」
ガチャ！

巴「まりなさん？〇〇はまだいますか…て、いた？よかった？」

〇〇「巴ちゃん？どうしたの？」

あこ「お姉ちゃんはやいよ？」

ひまり「ちょっと巴飛ばしすぎ？」

○○「わ？ビックリした？」

巴「ぜえぜえ？…○○さん！」

○○「は、はい？」

巴「これは私からの気持ちだ受け取ってくれ／＼」

ひまり「私からもハッピーバレンタイン♪」

あこ「あこからもチョコですよ♪…あれりんりんは？」

巴「あこ、途中まで一緒だったろ？やばいはぐれたか？」

ひまり「てか蘭もない? ……あ」ガチャ

蘭「三人とも飛ばしすぎ?」

燐子「……〇〇さんこれ私からのチョコです…受け取ってください…」

〇〇「あ、ありがとう?」

蘭「私からも…はい／＼お世話になってるお礼／＼」

〇〇「蘭ちゃん…ありがとう? みんなありがとう? 凄く嬉しいよ」

巴「へへ、どういたしまして♪」

ひまり「ゆっくり大事に食べてくださいね♪」

〇〇「もちろん？みんな今日は本当にありがとう？」

「「どういたしまして♪」」（まりな、香澄、有咲、沙綾、たえ、りみ、巴、ひまり、蘭、あこ、燐子、彩、千聖、イブ、麻弥）」

モカちゃんときまりなさんと

C i R C L E S

モカ○○「○○さん、まりなさんこんにちは」

○○「モカちゃん、いらつしやい？こんにちはは！」

まりな「いらつしやい？今日は練習？」

モカ「いえいえく暇だったのふらつと来ちゃいました」

○○「そっか、でも寒かったでしょ、はやく夏になってほしいよね？」

モカ「モカちゃんは春がいいですね、桜の下で食べるパンが美味しいんですよ」

〇〇「僕は夏が好きかなあ、そして温泉に浸かりたい冬景色の温泉もいいけど深緑の風景をみながら入るのもまった一興、なかなかいいもんだよ」

まりな「私は温泉に入るなら秋かな、紅葉をみながら入るの結構好き」

〇〇「いいですね、紅葉でも秋は少し寂しいです」

まりな「どうして？」

〇〇「秋は好きな季節が終わったのを実感するとか今年ももうすぐ終わるなあて
思いますから」

まりな「そっか、紅葉が終わると確かにすぐ冬だもんね」

モカ「好きな季節の終わりや年の終わりが近い時は寂しく思いますよね」

〇〇「でも一年ですぐだからね、年が明けたと思つたらもう夏がきたと毎年おもうから」

モカ「ですよね〜そうだ、〇〇さん春になったらお花見いきませんか？」

〇〇「花見かあ、いいね行こうか？」

まりな「おやおや、デートに誘われるなんて〇〇くんもやるねえ♪」

〇〇「もうまりなさんてば、すぐそう言うんだから？」

モカ「まりなさんもしきませんか？」

まりな「いいの？じゃあお言葉に甘えようかな♪〇〇くん両手に華だねえ」

モカ「モテモテですねえ」ニヤニヤ

〇〇「あはははは汗」

それから数時間後

モカ「あ、もう五時半かあ…ではではモカちゃんはそろそろ帰りますね」

まりな「あ、まってモカちゃん…〇〇くん送ってあげて外は暗いし女の子一人は危ないから〇〇は直帰て事にしとくね」

〇〇「わかりました、じゃあ先に失礼しますね…モカちゃん行こうか」

モカ「はい…いきましよう」

〇〇「まりなさんお疲れ様でした？」

まりな「お疲れ様、明日もよろしく？」

車内く

○○「よし、行こうか出発」

モカ「進行く♪」プロロロく

道中く

モカ「○○さん」

○○「ん？なにかな」

モカ「花見は行きたいところありますか？」

○○「行きたいところかあ、僕の地元¹に車の通りが滅多にない超優良な花見スポットがあるんだけど遠いからなあ？…あ、あそこならいいかも」

モカ「ああ、確かにあそはいいスポットですよねえ、じゃ花見はそこにしましょうか」

〇〇「だね、まりなさんにも伝えとくよ」

モカ「花見楽しみ〜♪」

〇〇「僕も楽しみ?と…着いたよ」

モカ「ありがとうございます?じゃあ〇〇さんまた明日〜」

〇〇「うん、またね?じゃあ」ブロロロ〜

春の陽気のカフェで

ある春の陽気のカフェで

〇〇「ズズー…ふう、あー…この後どうしようかな」

燐子「〇〇さん…こんにちは」

〇〇「ん？お燐子ちゃん、こんにちは？休憩かい？」

燐子「いえ…今日はおやすみだったので、散歩をしてた所です…〇〇さんは休憩ですか？」

〇〇「いや僕も今日はおやすみだからカフェで一杯で所かな」

燐子「そうだったんですか、あの…一緒にしてもいいですか？」

〇〇「もちろんいいよ?…」

燐子「じゃあ飲み物買ってきますね」

〇〇「了解?…ズズー、ふう…」

数分後

燐子「おまたせしました、あとこれ…一緒に食べませんか?」コト（マフィンをおく）

〇〇「マフィンか…いただくのかな、そうだ…マフィンのお金払わないとね…えーと
500玉しかないや?…お釣りはとつといてよ」

燐子「いえお金はいいです?…いつもよくしていただいるお礼です…」

○○「…そう？じゃあお言葉に甘えようかな？ありがとう？さっ食べよう？」

燐子「はい？…美味しい…○○さん

○○「ん？」

燐子「最近暖かくなってきましたね」

○○「そうだねくでも花粉がああ？」

燐子「○○さんは目にくるタイプですか？」

○○「まあね？今日は比較的少ないから、外にいられるけど多いと本当、涙目になるわ痒いはで、キツイよお？」

燐子「あはははは…あの○○さん」

〇〇「ん？なにかな？」

燐子「この後、時間ありますか？」

〇〇「もちろんあるよ？休みの日は基本暇だから」

燐子「じゃあ私の家に来ませんか？」

〇〇「燐子ちゃんの家にかい？……うーん、せっかくだけどゴメンね？さすがにちよつと、色々不味いからさ？」

燐子「そう…ですか、ではまた今度」

〇〇「うん？また機会があつたら、誘つてくれたのにゴメンね？」

燐子「いえ？…」

さらに数時間後

〇〇「うう…冷えてきたな？いま何時だろ？」

燐子「えつと…16時ですね」

〇〇「通りで？そろそろ帰ろうかな、これ以上は風邪引いちやうし、この次期はまだ暗くなるのも早いし」

燐子「そうですね…じゃあ〇〇さんまた明日」

〇〇「うん、また明日？」

燐子「それじゃあ」

道中〇〇side

〇〇「ふうマフィン美味しかったな？それに、燐子ちゃんとの時間も楽しかった、また機会があつたら誘つてみるか」

そして燐子 side

燐子「〇〇さんとの時間楽しかったな…また一緒にしたいな…」

翌朝、出勤道中

〇〇「あ、燐子ちゃんおはよう？」

燐子「おはようございます？…〇〇さん、また今度一緒にお茶しませんか？」

〇〇「もちろん？僕も誘おうとしてたから…とつ、そろそろいかないとじゃあ燐子ちゃん僕はいくよ、また」

燐子 「はい…また後で、お仕事頑張ってください」

〇〇 「ありがとう？燐子ちゃんも頑張って、それじゃあ？」 スタスタスタ

花音ちゃんとデート

花音ちゃん自宅前へ

ブオオオオオ…ブオオオオオ…ブオンブオオ…スチャ

〇〇「やあ、おまたせ」

花音「〇〇さん、おはようございます?」

〇〇「おはよう?よし、それじゃあ行こうか」

花音「はい…:今日はお願いします、それじゃあ乗りますね」

〇〇「よし、ヘルメットは……被ったねじゃあ行こうかしつかり掴まって……出発」
ブオオオン……

道中

ブオオオ……オオオオオ

花音「気持ちいいです？」

〇〇「いいもんでしょう？いつか免許取ったらツーリングしようね」

花音「はい？あ……そのコンビニで飲み物買いませんか？」

〇〇「そうだね？買っていいとか……曲がるよ」ブオオオン……ブオオオ……ス……

コンビニ店内

花音 「私は…ミルクティにしようかな」

〇〇 「僕もミルクティにしようかな、ちなみに花音ちゃんは午後〇ティー派かな？それとも紅茶〇伝派？もしくは白の〇沢かな？」

花音 「私は…午後〇ティーが好きです」

〇〇 「そっか…美味しいよね？よし、それじゃあ会計して行こうか」

花音 「はい…」

そして会計を済ませ外へ

〇〇 「よし…じゃあ出発するよ」ブオオオン…ブオオオ…

再び道中

〇〇「大丈夫？怖くない？」

花音「はい…大丈夫です？」

〇〇「そつか…じゃあこのまま峠に入るね」ブオオオン…ブオオオオ…

ブオオオオ…オオオオオオ

峠の展望台へ

ブオオオン…ブオオオオ…スチャ…

〇〇「ふう到着？」

花音「風が気持ちいいですか？あ、〇〇さん写真取りませんか？」

〇〇「もちろん、取ろう？カメラセットして…取るよ…はい、チーズ？」カシャ…

花音「…えへへ…あ、さっき買った飲み物飲みましょう」

〇〇「だね？でも今日は本当気持ちいいね、ピクニック…というよりは、こういう所に来るのには絶好だよ？」

花音「景色もいいし…最高ですよね」

〇〇「本当？」

そして時間はあつという間にすぎ夕方々

〇〇「うう…冷えてきたね？そろそろ帰ろうか」

花音「ですね？私も寒いです？」

○○「じゃあ行こうか…しっかり掴まったかな？」

花音「はい、出発しましょう」ギユ

○○「それじゃあ出発？」ブオオオン…ブオオオ…ブオオオ…

道中…ブオオオ

花音「あの、○○さん」

○○「うん？なにかな」

花音「今度は私のオススメスポットいきましよう」

○○「花音ちゃんのオススメスポットか…うん？もちろん行こう？」ブオオオ…
ブオオオ…

ブオオオ：

そして花音ちゃん宅へ

ブオオオン…ブオオオ：

〇〇「着いたよ？」

花音「ありがとうございます？じゃあ〇〇さん、また今度いきましよう？」

〇〇「もちろん？じゃね？」ブオン…ブオオオ…オオオオオ：

宇田川姉妹と過ごす昼下がりに

宇田川家宅前へピンポン

あこ「○○さんいらっしやい？」

○○「あこちゃん、こんにちは？」

巴「いらっしやい？さ上がってくれ？」

○○「おじやまします？今日はありがとうね？」

巴「こつちこそありがとうな？そうだ、私の部屋で話さないか？」

あこ「あこも○○さんと話したい？」

巴「じゃあ三人で話そうか、○○さん着いてきてくれ」

○○「了解？ そうだ、これ二人にお土産」

あこ「ありがとう？ じゃあ行こう♪」

巴の部屋へ

巴「ここだ？ いまお茶持ってくる」

○○「ありがとう？」

あこ「それじゃあ、あこはお菓子持ってくる♪」

○○「了解、あ…なにか手伝おうか？」

巴「○○さんは今日はお客さんなんだから、ゆっくりしててくれって今日は○○さんを癒す会なんだからさ」

○○「あ…ありがとう、それじゃあお言葉に甘えようかな？」

あこ「うん？今日はゆっくりしてって」

巴「すぐ戻ってくるからさ、よし…あこ」

あこ「うん♪」

そして数分後

あこ「○○さん、おまたせ♪」

巴「○○さんは……をよく飲むってまりなさんから聞いてるからさ、はい」(……には

好きな飲み物を当てはめてお楽しみください)

○○「ありがとう?」

あこ「あこからは、あこオススメのカステラだよ? ○○さんよく休憩の時にカステラをカフェで食べてるから」

○○「ありがとう? うを? しかもこれ:午前で完売する××カステラだ?」

あこ「ふふふ朝から並んだんです♪」

○○「ありがとうね?じゃあ、コップを持って乾杯?」

「乾杯」

○○「コクコク:うん美味しい?」

巴「よかった？ そうだ○○さん明日は仕事なのか？」

○○「うん、明日からまた仕事だよ？」

巴「そつか…じゃあ夜には帰っちゃうんだな…」

○○「うん？ 出勤の準備とかもあるからね？」

あこ「むー？…じゃあ今度は必ず泊まってね？」

○○「うん、ただその時は君たちのご両親にもアポ取らないといけないけどね？」

巴「必ず泊まりに来てくれよな？」

○○「もちろん？ 約束は必ず守るよ？」

そして数時間後

〇〇「あはははは…と…もうこんな時間か」

巴「本当だ…それじゃあ〇〇さん帰るまえに夕飯食べてつてくれないか？」

〇〇「いいのかい？」

あこ「もちろんですよ？あこたちが腕によりをかけちゃいます？」

〇〇「おお、じゃあいただこうかな？」

巴「よし？じゃあ、あこ私たちで〇〇さんの胃袋をつかもう♪」

あこ「もちろん？じゃあ〇〇さんリビングいきましよう♪」

〇〇「うん？二人とも今日はありがとうね」

巴「ははは、気にすんなって♪」

リビング

あこ「じゃあ○○さんは座って待ってて…所で○○さんはアレルギーは大丈夫？」

○○「アレルギーは…大丈夫？あ…でも卵はちよつと苦手かも？」

巴「了解？じゃああこ早速作ろう」

あこ「うん？」

そして数十分後

あこ「おまたせ？私たち特製のスペシャルカレーだよ？」

○○「おお？美味しそう♪」

巴「私たち特製レシピだから味は保証するよ？さっ食べよう♪」

あこ「○○さん、はい？スプーン」

○○「ありがとう？じゃあ手を合わせて」

「「いただきます？」」

○○「パクパク…うん？美味しい？濃厚で、口のなかで踊るよう…そしてほんのりと香るバター…まさに食の舞踏会」

あこ「よかった？」

巴「私たちも作った会があるよ？…うん美味しい？」

○○「本当…今日は何かから何までありがとうね？おかげで、明日からまた頑張れるよ

「？」

巴「うん、私からもわかる○○さん顔から疲れが無くなってるのがさ」

○○「最近はずかしかったからね？……パクパク……ふう美味しかった？ごちそうさま」

あこ「お粗末さまでした？もう帰っちゃうの？」

○○「うん、そろそろ帰らないと寝るの遅くなっちゃうから？今日は本当にありがとう？このお礼は必ずするよ」

巴「お礼なんて気にするなって？私たち楽しい1日を過ごせたからさ」

あこ「○○さん今度来るときは必ず泊まってね」

○○「うん？もちろん……じゃあ行くね」キィ……パタン……ガチャ……パタン

彩ちゃんと千聖ちゃんとお家デート

〇〇宅へピンポン

〇〇「はい…おお？いらっしやい？」ガチャ…

彩「〇〇さんこんにちは♪」

千聖「こんにちはは？さつそく上がってもいいかしら？」

〇〇「もちろん？いまお茶入れるよ、暖かいのと冷たいのどっちがいいかな？」

彩「私は暖かいのお願いします」

千聖「私は冷たいのをお願い」

○○「了解♪……おまたせ？さて、さっそくゲームでもする？」

彩「やります♪あ…私これやりたいです、○○イーの○鼓の○人」

千聖「ふふ彩ちゃんのお手並み拝見ね♪」

○○「よし、じゃあさっそくセットして…起動♪」

プレイ中

彩「わわわ？…えい？」

「発表♪♪クリアフェイリア泣」

彩「失敗しちゃった？……○○さんお手本みせてくれませんか？」

〇〇「もちろんいいよ？あつ千聖さんもどうかかな？」

千聖「私は〇〇さんの後でいいわ♪」

〇〇「了解、じゃあいくよ？………ス」

彩「雰囲気が変わった…？」

〇〇「く……く」ドドドドド

千聖「。D。）」

彩「(ノ)「へ。(……。(D。(……(ノ)「へ。(……。(D。(……。(D。))」

〇〇「………フウ………なんとかいつも通り出来た？」＼セイコウ／

彩「待つて待つて?○○さんいまなにやったの?」

千聖「手が人の動きじゃなかったのだけれど?」

○○「いや、普通にただけだよ?とは言っても僕も出来るようになるには苦労したけど?」

彩「(千聖ちゃん、いまの出来るよ?)」

千聖「(出来るわけないでしょう?)……コホン、○○さん他のゲームであるかしら?」

○○「他のかい?……となると、うーんないかな?」

彩「そつか?……あつ……そろそろお昼にしません?私おなか空いちやった」

千聖「あ……もうお昼ね、じゃあ○○さんなにか買いにいきましょうか」

〇〇「いや、二人がいくと騒ぎになるから、なにか作るよ？何でも言っ♪」

彩「じゃあ私ミートパスタ食べたいです♪」

千聖「私も同じのお願い出来るかしら？」

〇〇「もちろん？じゃあ少しまってて」

調理中

〇〇「粉チーズはかけるかい？」

彩「お願いします♪」

千聖「私はいいわ、なにか手伝ったほうがいいかしら？」

〇〇「大丈夫？ゆっくりしてて？」

8分後

〇〇「ざるにとつて…湯切りをしたら皿に移して、おまたせ？ミートは市販だけどね？召し上がれ♪」

彩「いただきます？」

千聖「いただきます♪…美味しい？」

彩「本当に美味しいです♪」

千聖「ふふ、じゃあ彩ちゃん食レポの練習しましょうか箸上げをしつかりとして」

彩「ええ？ええと…パスタのほどよい固さと、ソースのお肉がゴロツとしててパスタに絡んで口にいれヒヤ…かんじやつた？千聖ちゃん急にはずるいよー（>「<）」

千聖「ふふごめんなさい♪でもいずれは、こういう仕事も来るだろうから練習はしておいたほうがいいと思うわよ？」

彩「うう確かに?……そうだよね、私頑張る！」

○○「(頑張れ?) よし、僕も……うん美味しい?」

そして昼食も終わり

○○「ふう、おなかいっぱいになったら眠くなっちゃったな?」

彩「私も眠くなっちゃった?……○○さん寝ちやいます?」

○○「ブハツ? 彩ちゃん、言い方?」

千聖「そうよ？彩ちゃん、あなたアイドルなんだから言い方を気をつけないと？……でもそうね○○さん一緒に昼寝しない？」

○○「そうだね？ちよつと限界だし、寝ちやおうかな……いま布団引くよ」

千聖「私も手伝うわ」

○○「いや大丈夫？少し待ってて……」

数分後

○○「よし、布団引き完了？じゃあ僕は真ん中に」

彩「あつ○○さんたら正直なんですわね」

○○「まあね♪ふあ、じゃあ彩ちゃん千聖ちゃん、おやすみ」

彩「おやすみなさい♪」

千聖「おやすみ？」

三人は夢の中へ

数時間後…

千聖「んん…ふあ、いま何時かしら？」チラ

PM20:35分

千聖「いけない？寝過ごしちゃった？彩ちゃん、○○さん起きて？」

彩「うーん、もう少し」

○○「あと5分」

千聖「……二人ともお説教が必要かしら？」

○○「ああくよく寝た？……いま何時だ？」

千聖「夜の８時すぎてるわよ？はやく彩ちゃん起こさないと？」

○○「うを？彩ちゃん起きて！」

彩「んん……おはよう、いま何時？」

○○「夜の８時すぎてる？……二人とも家まで送るから車に乗って？」

彩「お願いします？」

千聖「お願い？……」バタバタバタ

車内く

○○「二人とも忘れ物ないかい？」

彩「大丈夫です？」

千聖「私も大丈夫」

○○「よし、じゃあ出発！」ブオン…ブオオオンく

膝枕シリーズ 日菜ちゃん

氷川家くピーンポーン

日菜「あ、○○さんいらっしやい♪」

○○「こんばんは？ 日菜ちゃん」

日菜「さっ上がって？」

○○「おじゃまします♪ いやあ今日凄く楽しみにしてたよ？」

日菜「私も今日は朝から、楽しみにしてたよ♪ あ、部屋に案内するね？……はい、ここだよ？」

〇〇「おじやまします♪、よいしょ…そういえば紗夜さんは練習かい？」

日菜「うん、帰りは夕方になるって、はい〇〇さん」コト

〇〇「ありがとう？ズズー…うん、美味しい？」

日菜「どういたしまして♪あ…そうだ〇〇さん最近寝不足で聞いたけど…」

〇〇「いや、寝不足ではないから大丈夫？まあ昨日は寝れなかったけど…ふあ…と、ごめんね？」

日菜「あつ…〇〇さん私が膝枕してあげるよ♪」

〇〇「いま膝枕してもらったら寝落ちしちゃう？」

日菜「遠慮しないでよ♪、さっごろくんでして？」

○○「じゃ……じゃあお言葉に甘えて……ちよつと照れちやうな？それにだん……だん……と意識……g……スウ」

日菜「……○○さんよく頑張ってるね、いいこ……いいこ……」ナデナデ（頭を撫でてる）

○○「スー……？スー……？」

日菜「……○○さん無茶や無理は駄目だよ……ふあ私も眠くなっちゃった……スー……？……スー……？」

数時間後

○○「んん……ふあ、いま何時だろ……」

PM17:40分

〇〇「うわ？おもいつきり寝ちやった？」

日菜「んん…あ…〇〇さんおはよう」

〇〇「おはよう？…結局今日はほとんど寝ちやった？せつかくの休みだったのにごめん？」

日菜「どうしようかな？」

〇〇「今度埋め合わせするから？」

日菜「じゃあまた遊びに来て？」

〇〇「…わかった？、それじゃあそろそろ行くね…日菜ちゃん今日はありがとう？おかげで疲れがすっかり取れたよ」

日菜「どういたしまして？」

〇〇「それじゃあ、またね？」 パタン……ガチャ…バタン

〇〇帰宅道中

〇〇「日菜ちゃんの膝枕…柔らかかったな…て、なに考えてんだ？…日菜ちゃん…」

日菜自室では

日菜「〇〇さんの寝顔…お姉ちゃんとは違う感じがしたな…ていうよりはキュン…てした…まさか…ね」

／ただいま／

日菜「あっお姉ちゃんだ？お帰りなさい？」

紗夜「ただいま、あらお母さんはまだ帰ってないのね…○○さんはもう帰ったのかしら？」

日菜「うん、さつき帰ったよ、今日は○○さんと一緒にいられて、凄くるんっ♪てした1日だった？」

紗夜「そう…○○さんを困らせたりはしてないわよね？」

日菜「してないよ」

季節は冬から春へ

C i R C L E

○○「うーん?…今日は暖かいですね」

まりな「そうだね、やっと暖かくなってきたよ」

○○「日も長くなってきたし、いよいよ春だ?」

香澄「こんにちは?」

まりな「香澄ちゃん、こんにちは?」

〇〇「いらっしやい？個人練習かい？」

香澄「そんな所です♪」

〇〇「了解、それじゃあ一番使って」

香澄「はーい♪」

まりな「……そうそう〇〇くん、桜が満開になったら一緒に花見にいかない？」

〇〇「花見かあ、いいですね？いきましよう」

まりな「決まり♪いいとこピックアップしとくね」

〇〇「僕のほうでも探しときますね、満開が楽しみだあ？」

まりな「そうだね？…にしても本当に今日は暖かいね」

〇〇「そうですね、春眠暁をなんとやら、家にいたら百ぱー寝てましたわ（笑）」

まりな「確かにそれぐらい暖かいね……寝ちや駄目だよ？」

〇〇「寝ませんよw」

数時間後、

香澄「すいませーん！」

〇〇「はい……今日はもう終わりかい？」

香澄「はい？」

〇〇「了解、じゃあ……〇〇円になります」

香澄 「ちようどでお願いします♪」

〇〇 「……ちようどいただきませう♪ありがとうございます!」

香澄 「また来ます♪そいだ、二人は今年花見とかいくんですか?」

まりな 「もちろん♪そして帰りはもちろん♪」

香澄 「え?えええ!?!」

〇〇 「まりなさん?誤解されちゃうでしょ?」

まりな 「ふふごめん♪香澄ちゃん今の冗談♪」

香澄 「あ…ああびつくりした汗…もう本気にしちゃいましたよ?」

まりな 「いやあ、これやるとほとんどのこたちが同じ反応するから」

香澄 「二人とも付き合つてても不思議じゃないですもん、私たちの間でも噂になつてますよ。二人とも付き合つてるんじゃないかって」

まりな 「いつも一緒にいるからね。帰り道も方向が同じだから、あがり時間が一緒の時はそのまま一緒に帰るし」

〇〇 「近所の人からもよく言われるなあ？」

香澄 「まさか本当は付き合つてるけど隠してたりして？」

〇〇 「基本隠し事が苦手だから？」

まりな 「わたしもわたしも？」

香澄 「そうなんだ。……じゃあ私は帰りますね、仕事頑張ってください？」

〇〇「うん頑張る？」

まりな「帰り道、気をつけてね？」

香澄が帰って数分後

まりな「……香澄ちゃん結構鋭いところあったね？」

〇〇「ですね？思わず顔に出そうになりましたよ？……でもいずれはバレるでしょうし、そろそろ話してもいいのでは？」

まりな「うん、時期をみて話そう……きっとみんな祝福してくれるよね？」

〇〇「みんないいこたちばかりですから、きっと祝福してくれますよ？」

まりな「そうだね？さっもうひと踏ん張り頑張ろう！」

○○「たそけ」○○

耳かきは定期的に

○○宅へ

○○「うーん？今日も気温が気持ちいい？」

彩「そうですね、春の陽気て本当に気持ちいいです…あつ○○さん随分耳垢溜まってますね」

○○「ちよ？見ないで？…いやあ最近忙しくてついね？」

彩「駄目ですよ？定期的にしないと…あつそうだ私でよかったですらしましょうか？」

○○「いやあ悪いよ？というか恥ずかしい／／／」

彩「でも○○さんは職業柄しとかないと……ね？」

○○「そ、そうだね？じゃあ…お願いしていいかな??」

彩「はい？膝の上に頭おいてください？」ポーン

○○「お願いします?…ヨイショ」ゴロン

彩「それじゃあいきますね〜痛かったら手あげてくださいね♪」ガサツ…ガサササ

○○「ん……（ひ、膝枕／＼……無心に無心……）」

彩「凄く溜まってますね、聞こえづらいとかなかったですか？」

○○「うん、特にそういうのはなかったかな?…」

彩「そっか…でも耳垢の放置はだめですよ？痛くないですか？」

〇〇「うん、大丈夫？…凄く心地いい」

彩「よかった？…うーんヨイシヨ…フウ」

〇〇「はう!?／＼」

彩「あ…ひよつとして耳敏感とか？」

〇〇「うん…少しね?／＼」

彩「へえ…ニマー…フウ…フウ」

〇〇「はうあ!?!／＼あ、彩ちゃん？小刻みはやめて／＼はう!?!」

彩「えへへ♪ごめんなさい♪〇〇さんの反応が可愛くてつい♪……よし、右は終わり

です左いきましよう」

〇〇「あ、ありがとうございます？…じゃあお願いします？…ヨイシヨ」ゴロン

彩「ありやあ、左も凄いですね？…ヨイシヨ」ガサササ…

〇〇「彩ちゃん耳かき上手だね、よくメンバーの子たちとかにもしてるの？」

彩「はい？千聖ちゃんたちによくするんです♪」

〇〇「そっか…でも本当に気持ちいいよ？…でも今日はせつかくのオフだったのによかったの？僕の家で」

彩「はい？それに〇〇さんといると落ち着くっていうか…心が休まるんです」

〇〇「そっか…彩ちゃんの助けになるなら僕も嬉しいよ？」

彩「ふふ♪……よし、じゃあ仕上げに入りますね、フウ…フウ」

○○「あううう／＼これは慣れないなあ？」

彩「フウ…ふふ♪よし、完了です♪起き上がって大丈夫ですよ？」

○○「ありがとうございます？いやあスッキリしたよ？聞こえる音もクリアになった気がする」

彩「よかった？○○さん？これからは定期的にしてくださいね？」

○○「うん？なるべくするようにする？」

彩「約束ですからね？指切り」

○○「うん…約束する？」スツ

彩「うん？」ギユ

〇〇「さて…指切りもした事だし、そろそろお昼にしようか？ なにか食べたいのある？」

彩「それじゃあカルボナーラ食べたいです♪」

〇〇「OK？ じゃあちよつと待っててね…♪」ジャーー！…カチチチ…シユボ！

彩「〇〇さんのカルボナーラ楽しみだな？」

C i R C L E

こころ 『あ、○○こんにちは?』

○○ 『こころちゃん、こんにちは?今日は自主練かい?』

こころ 『ええ♪部屋は空いてるかしら?』

○○ 『ちよつと待っててね:うん一番が空いてるよ』

こころ 『よかった?それじゃあいいかしら?』

○○ 『いいよ?練習頑張つて?』

「こころ『ええ♪』

一番室へ

こころ『それじゃあさつそく始めようかしら、まずは…えがおのオーケストラからね
…♪…♪…♪』

数時間後へ…

こころ『こんなところね、そろそろ終わりにしようかしら…』キィ…パタン

〇〇『お、今日はもういいのかい？』

こころ『ええありがとう？…そういえば今日はまりなはおやすみなのかしら？』

〇〇『まりなさんは今日は夜からだね』

「こころ『そうなの……じゃあ今は二人だけね?』」

〇〇『こころちゃんその言い方は誤解招くからあまりそういう言い方したら駄目だよ?』

「こころ『……?〇〇がそういうならわかったわ?あ……じゃあ私は帰るわね』」

〇〇『了解?』

外へ

「こころ『ありがとう?外まで送ってくれて』」

〇〇『それじゃあこころちゃん帰り道きをつけ……危ない?』グイ……

「こころ『ええ、○○も頑張つて……きや？……』」

「ブオオオ!!……」

○○『あの車なんキロだしてんだ？……こころちゃん怪我はないかい??』

「こころ『え……ええ？……あの○○……／＼』」

○○『あ……ごめん？、ふうもう大丈夫そうだね?』サツ

黒服「○○様、先ほどはこころ様を助けていただきありがとうございます、」

○○『いえ？当然のことをしたただけですよ？……では僕はこれで』

黒服「このお礼は必ず……ではお嬢様、いきましよう」

「……ええ……」

回想終了

「あの時から、私の中の○○への気持ちが変わってる、○○に会いたくて○○の事を考えると胸がキューとなる、この気持ちはいつたいなにかしら？今度、花音たちに聞いてみましょう」

翌日、C i R C L E 外のカフェ

○○「ズズー……ふう」

「あ……○○じゃない、こんにちは？」

〇〇「ごころちゃん、こんにちは？」

ごころ「!?／／／、こ…ごころにちは?／／／」

〇〇「ちよ?顔赤いよ?大丈夫?」

ごころ「だ、大丈夫よ?…ね、ねえ今は休憩中かしら??」

〇〇「いや今日は休みなんだ」

ごころ「そ…そうなの、じゃあうちに来ない?実は、相談があるの」

〇〇「相談…どんな相談なのかな?」

ごころ「それは私の家で話すわ…駄目かしら?」

〇〇「……いいよ？じゃあ飲み終えちやうから少し待つてね」

数分後

〇〇「プハッ…よし行こうか」

こころ「ええ…（…なぜかしら、〇〇がうちに来る…そう思うと嬉しい気持ちと、ドキドキしてくるのは）〇〇…／＼」（聞こえないくら小さな声で呟く）……

エイプリルフール特別回

C i R C L E

〇〇「おはようございます?」

まりな「おはよう?」

〇〇「おはようございます♪そうだ、まりなさんちよつとお話が」

まりな「なにになに?ひよつとして告白とか?そ、それなら閉店後に／＼」

〇〇「いえそうではなくて…ちよつとお耳を失礼」

まりな「あ…はい、ふん…ふんふん…なるほど（。―▽―）それは確かに面白そうかも」

〇〇「でしよう？ふふ、」

「ふふふ〜」
「」

〇〇「じゅあ、まりなさんため息を合図に」

まりな「了解♪」

そして数時間後〜

PM16時30分〜

〇〇「…」（すでに役作りしてる）

あこ「こんにちは〜!」

〇〇「……あ、ああいらっしやい?」

紗夜「おや、どうかされましたか? 元気がなかったようですが…」

友希那「風邪かしら? 今の時期は気をつけないとだめよ…」

〇〇「いやあそうじゃないんだ? ……と、はい今日は三番使つて?」

あこ「悩みがあつたらあこに言つてくださいね? 力になりますから?」

リサ「……(あ…) まあ、とりあえずさ時間押してるから練習しよう♪〇〇さんまた」

〇〇「うん、また後で」

スタジオ内へ

ズダダダ…ジャーン♪

あこ「くうくいまの凄いババーン！て来た？」

友希那「そうね、今日はみんな完璧に近い演奏ができてる、でももちろん細かいミスもある、次はそこを重点的に修正していくわよ」

紗夜「はい…しかし、今日の○○さんのあの様子、あれはまるで」

あこ「それ、あこも気になってました…なんか悩んでるっていうか思い詰めたような」

友希那「…しかし本人から話さないと、周りがどうこうは出来ないわ…」

リサ「うーん…本人が話す気があるかだけどねえ、○○さん一人で抱え込みそうだし」

友希那「……後で○○さんに聞いてみましょう、さあ練習を再開しましょう」

ジャン♪…

ロビー〜

○○「そろそろ練習が終わる頃ですね…ではまりなさん」

まりな「うん♪…」ガヤガヤガヤ

あこ「すいませーん！」

まりな「はい？練習お疲れ様、次はいつにする？」

紗夜「明後日の夕方5時からお願いします」

まりな「了解♪…うん予約完了したよ、それで今日の了解料金が○○円になります」

友希那「ええ…丁度で」

まりな「…うん確かに？そうそう、実は」

〇〇「…はあ…」（思い詰めたような表情）

まりな「どうしたの？朝からため息ばかりついて」

〇〇「…ああ…なんでもないです？」

友希那「〇〇さん…仕事に私情を持ち込むのはだめよ…でも悩みがあるなら話さない、話すまで目は離さないわ」

〇〇「うぐ？…観念するよ、実は引越す事になってね町を離れなくちゃいけないんだ」

あこ「ええ!？」

リサ「町を離れなくちゃ…て、なんで？」

〇〇「まりなさんにも話したんだけど…僕の知り合いさんがはじめたライブハウスのスタツフとしてしばらく働く事になってね、その人は凄く世話になった人だから断れないんだ」

あこ「そんな…あこ〇〇さんがいなくなるの嫌です？」

紗夜「〇〇さんがそこまで…それで期間はどれ程？」

〇〇「少なくともみて三年…ひよつとしたらずっとて事も」

リサ「……そっか……ねえ、みんな…まりなさん見てみて」

あこ「……え？」

友希那「リサ、今はそれどこじゃ」

紗夜「今井さん、今は○○さんをどう引き止めるか…え？」

まりな「……じゃーん♪」

《エイプリルフル大成功》

あこ「え？ええええ？……じゃあ○○さんが引越すていうのは」

○○「うん、嘘♪今日はエイプリルフルだからね」

リサ「まあ私は気づいてたけどね♪でも面白そうだから協力しちゃった♪」

紗夜「今井さん…もう、○○さんエイプリルフルでもこの嘘はやめてください、心臓に悪いので…」

リサ「あれ、紗夜…泣いてる？」

紗夜「泣いていません？」

隣子「でも涙が？」

紗夜「これは偶然目にゴミがはいっただけです？…」

友希那「○○…あなたはあなたが思ってる以上に影響力があるの、今後はこんな嘘はやめてちょうだい」ギユ

○○「はい？…」

あこ「でもよかった？○○さんが引つ越さなくて」

○○「あはは？ごめんね？……それよりみんなそろそろ帰らないと不味いんじやあ」

リサ「うわ本当だ？帰らないと？」

あこ「わわあ？じゃあ○○さん、まりなさんまた明日？」

紗夜「では」

友希那「○○さん、明日おかえしを期待してなさい」

○○「あーははは、遠慮しとくよ汗」

まりな「いやあ、しかしリサちゃん意外、見事に引つ掛かったね」

○○「ですなくてつきり見破るとばかり、あ…三番の清掃してきます」

まりな「了解？」

思い出

公園へ

〇〇「はあ……いい天気だな……元気にしてるかな」

たえ「あれ、〇〇さんじゃん……やつほ、何してたの？」

〇〇「おお、おたえちゃん……こんにちは？なにちよつと思ひ出に浸ってたてとこさ」

たえ「へえ、どんな思ひ出に浸ってたの？」

〇〇「僕の地元の行き付けのお店さ、店の人もいい人たちでさよく通ってたんだよ、こつちに上京するつてときもいっぱいお土産くれて」

たえ 「へえ、なんてお店？」

〇〇 「ん？店の名前はね××てお店さ、お店の人たち元気かなあて思ってたさ」

たえ 「きつと元気だと思う……休みの日とか帰らないの？」

〇〇 「新幹線使えば、日帰りで帰れるだろうけど、お金がね？まあお盆休みになったら帰るよ」

たえ 「その時は私も着いていきたい」

〇〇 「そうになったらおたえちゃんは宿を探さないかね」

たえ 「〇〇さんの家は駄目なの？」

〇〇 「誤解されちゃうよ汗」

たえ「むう、でもちよつと行つてみたいかも……〇〇さんがハマるつて事は凄く美味し
そうだし」

〇〇「めつちや美味しいよ、距離が遠くなくなつたらお土産に持つて帰れたんだけど
なあ」

たえ「そんなに遠いんだ」

〇〇「新幹線と電車を乗り継ぎしないといけないからね……さ、この話はおしまい！そ
れより、おたえちゃん今日はどうしたの？」

たえ「散歩、天気がよかつたら」

〇〇「そつか……まあ確かに今日はいい天気だね桜も見頃だし」

たえ「ポピパのみんなでお花見いきたい」

〇〇「花見かあ、いいね桜の下でワイワイと…花見団子をパクツと」

たえ「凄く美味しそう…あ…知ってる？桜の下には」

〇〇「はい？ストップ？…そういうのはね？」

たえ「？」

〇〇「そうだ、花見団子の色に意味があるのは知ってた？」

たえ「知らなかった、どんな意味があるの？」

〇〇「上のピンクが春、緑が夏、白は冬を表してるんだ…つまり春夏秋冬を表してるんだよ」

たえ「あれ、じゃあ秋は？」

○○「秋は、秋がない……飽きがない……飽きないでこらしょうよ……まあダジャレだね……もしくは商いの意味があるって聞いたなあ」

たえ「へえ、そうだったんだ今度ポピパのみんなにも話してみる」

○○「僕から聞いたってのは内緒でね？」

たえ「なんで？」

○○「理由は聞かないで？お願い」

たえ「○○さんが言うなら……」

○○「ありがとう？……さて少し冷えてきたしそろそろ帰ろうかな、送っていいこうか？」

たえ 「大丈夫、じゃあ○○さんまた今度」

○○ 「うん、気を付けて帰ってね…それじゃあ？」

たえ 「うん、それじゃあ？」

香澄 「あ…おたえー？」

たえ 「あ、香澄？」

香澄 「なにしてたの？」

たえ 「○○さんと話してた」

香澄 「○○さんいたの？うー？私も話したかった？」

たえ 「今度C i R C L Eで話そう？」

香澄「うん？」

桜の木の下の下で

ある桜の下へ

サアアアアア

〇〇「うーん気持ちいい？絶好の花見日和だあ」

まりな「そうだね？」

〇〇「天気もいいし、今日は楽しみましょう♪あ…お弁当おきますね、はい…コップです」

まりな「ありがとう？じゃあお茶を注いで…乾杯♪」

○○「乾杯？ゴクゴク…プハア、ふう…さっ食べましょう？どれも自信作なんですよ？」パカ

まりな「わあ、美味しそうだね、じゃあいただきます」

○○「召し上がれ？…僕も、うん美味しい♪」

まりな「美味しい〜♪この唐揚げ凄く美味しいよ？レシピ知りたいな〜」

○○「ふふ〜内緒です♪」

まりな「お願い？なんでもするから」

○○「…じゃあ他言無用ですよ？醤油とコシヨウ、そして卵…そしてニンニク、これはチューブのがいいです。後は中華の粉…いわゆる創○シヤ○の粉末タイプのかけてよく混ぜるんです。後は漬け込んで粉をつけて揚げるだけです」

まりな「そっかあ、今度やってみる？」

〇〇「是非やってみてください！あ、ほらタコさんウインナー？」

まりな「おお、懐かしいなあ昔よくお願いしてたよ」

〇〇「カニさん派とタコさん派で別れましたよね、僕は両方好きでしたけど」

まりな「私も両方好きかなうちなみに赤いウインナーはどうだった？」

〇〇「めっちゃ好きでした、あれ凄く美味しいんですよ」

まりな「わかる、凄く美味しいよね：そうだリングオ剥いたんだ、食後に食べよう？」

〇〇「いいですね？あ、ウサギさん」

まりな「可愛いでしょう♪……にしても桜、綺麗だね？」

〇〇「そうですね、そして周りを見渡せば桜のトンネル……サアアアア」

まりな「風も気持ちいいね？もう少ししたら桜吹雪でより幻想的なんだろうなあ」

〇〇「でも桜吹雪、僕は少し寂しく感じますね」

まりな「桜が散るとすぐに夏だもんね……ねえ食べ終えたら少し歩かない？桜のトンネル〇〇くんと歩きたいなあ」

〇〇「いいですね？僕もまりなさんと歩きたいと思つてましたし」

まりな「じゃあ食べよう？」

〇〇「ほぐぐ」

数分後

〇〇「ふう食べた食べた」

まりな「美味しかったア？じゃあ、行こうか」

〇〇「はい♪……それにしても綺麗だなあ」

まりな「そうだね5月になれば、新緑の季節で緑の葉からの木漏れ日が綺麗なんだろうなあ」

〇〇「そして秋になれば紅葉ですよ？うーん？きてよかった♪、一人もいいけど誰かとうこうやって歩くのもまたいいものです」

まりな「そうだね？それぞれ違った良さがある……ねえ来年もまた来よう♪」

〇〇「もちろん♪……さてそろそろ帰りましょうか」

まりな「そうだね？じゃあ戻ろうか」

そして後片付けを終えて、まりな宅前へ

〇〇「じゃあ、まりなさんまた明日？」

まりな「うん、また明日？帰りは気をつけてね」

〇〇「はい、じゃあ僕はこれで？」スタスタスタ

まりな「うん？…」フリフリ……ガチャ…バタン

リサ姉と春キャンプ

あるキャンプ場

○○「うーん…気持ちいい？ 陽気もいい感じだ」

リサ「そだね、桜も綺麗だし、来てよかった？」

○○「この時期は桜が見頃だからね？ 春キャンプの醍醐味だよ」

リサ「しかもキャンピングカー、まさか○○さん持ってたなんて」

○○「いやいや、キャンピングカーは流石にレンタルだよ？…」

リサ「そ、そっか？ そうだお昼にしよう？ 今日にはアタシ特製の手作り弁当だよ♪」

○○「いいね〜？ じゃあお茶もいれて、乾杯？」

リサ「乾杯♪……うーん美味しい？」

○○「うん、このハンバーグも美味しい？ こんなに美味しい料理を毎日食べられたら最高だなあ」

リサ「あはは、なんかプロポーズみたい／＼」

○○「だね？ …でもリサちゃんのお婿さんになった人はきつと幸せだね立候補しちやおうかな？」

リサ「○○さん…ひよっとして酔ってる??」

○○「酔ってないよー？」

リサ「そっか？もう（本気にしちゃうじゃん／＼）○○さん、その発言はアタシ以外にはしちやだめだよ？」

○○「もちろん？」

数分後

リサ「ふう食べた食べた？そうだ、デザートにて思ってたクッキーも持ってきたんだけど、食べる？」

○○「食べる♪て言いたいけど、今は苦しいから少し休憩してからにしようかな？
……でもいい天気だよね」

リサ「本当……○○さん今日はありがとうだね？」

〇〇「こつちこそありがたいがどう？さて、もう少ししたら中に入ろうか」

リサ「うん？」

数時間後　PM18：30分

〇〇「んが？うう冷えてきたな？……柔らかい…あ？リサさん起きて？」

リサ「ん？…ううーん、おふあよう〇〇さん…アタシの膝枕どうだった？」

〇〇「柔らかかった…じゃなくて？ぼくいつから寝てた??」

リサ「三時間くらい？まあアタシもそれくらい寝ちやつたけどね？……とりあえず顔洗ってさ夕飯にしよう？」

〇〇「そうだね？」

ジャー…バシャバシャバシャバシャ…

〇〇「プハツ…ふうさっぱりした、寒いから夕飯は中で食べようか」

リサ「だね？…夕飯は何にする？」

〇〇「ふふふ～夕飯はキャンプらしく、カレーだよ？」

リサ「おお？〇〇さんのカレー楽しみ♪」

〇〇「ちよつと待っててね？…♪（～には好きな曲を当てはめてお楽しみください）

数分後～

〇〇「出来たよ〜？さあ食べよう」

リサ「美味しそう♪じゃあ水とサラダを並べて、いただきます？」

〇〇「いただきます？……どうかな??」

リサ「うん？凄く美味しい？コクがあつて…それでいてしつこくない」

〇〇「よかった？うん？美味しい？……サラダもしゃきしゃきしててみずみずしい」

リサ「そして窓からは夜桜、昼とはまた違った良さがあるよ〜？」

〇〇「不思議だね、月明かりに照らされる夜桜で、凄い幻想的…」

リサ「そうだね〜…」

数分後

○○「美味しかった？さっ渴くまえに洗っちゃうね？」

リサ「ぷはあ美味しかった？あ、じゃあ洗い物はアタシがするね」

○○「いやいや、リサちゃんはゆっくりしてて…」

リサ「ううん？してもらってばかりは悪いから？ほら○○さんは座ってて」グイグイ

○○「わわ？…それじゃあお言葉に甘えようかな？」

リサ「うん？後で一緒に動画みよう♪」

○○「うん？…じゃあ待ってるね」

リサ「うん♪」

数分後く？

リサ「おまたせく？」

〇〇「ありがとうね？はい、準備出来たよ？なに見たい？」

リサ「じゃあ〇〇さんのオススメみたい？」

〇〇「OKじゃあ、あれ見ようか？」

数十分後く

「もうウィリー〇〇」

〇〇「あははははw」

リサ 「ははははw」

○○ 「はあ苦しい？何回見ても面白いわ」

リサ 「いやあ笑った？じゃあ次はアタシのオススメいこうかな、音楽なんだけどさ」

○○ 「いいねえ？……それではリサさんのオススメ…二曲続けてどうぞ！」

リサ 「一曲だつてば？」

○○ 「いやあラジオつぼくしたくてさ？」

リサ 「もう？……それじゃあ行くよ？」

♪ (栄光の架橋)

○○ 「いい曲だね」

リサ「そうだね、夢への思いそして、それまでの道のり…なんかアタシたちにも合い
そうでさ」

〇〇「そうだね、僕もそう思う…部屋からあちやんと燐子ちゃんの叫び声した時は
ビックリしたけど？」

リサ「…でも今があるからさ」

〇〇「だね？」

く…

リサ「終わったね…さて時間も遅いし寝よつか」

〇〇「うん、そうしよう？…」

リサ「○○さん寝坊しちやダメだよ？」

○○「しないよ？」

翌日

○○「ふあゝ？…」

リサ「うーん？おはよう○○さん」

○○「おはよう？さっ顔洗ったらチェックアウト済ませよう」

リサ「うん？」ジャー…バシヤバシヤバシヤバシヤ…キユ

そしてチェックアウトも終わり、帰りの時

ブオン…ロロロロロ

〇〇「それじゃあ忘れ物はないかな？」

リサ「大丈夫？ まあキャンピングカードだから心配はないよ？……それじゃあレンタカー屋さん目指して出発？」

〇〇「進行♪キュウリのぬか漬け〜？」　ブオオオ〜

膝枕シリーズ～彩ちゃんの膝枕

彩宅へ

彩 「○○さん今日はありがとうございました？」

○○ 「お安いご用だよ？それに今は何があるかわからないからね？…」

彩 「本当にありがとうございます♪そうだ、○○さんお礼に」ポーンポーン

○○ 「ポーンポーンで…いや悪いよ？」

彩 「私がしたいんです、私じゃ嫌ですか？…」 シュン

○○「むしろお願いします…でも、本当にいいの？」

彩「はい♪どうぞ…」

○○「ヨイシヨ…なんか照れるな／＼」

彩「ふふ♪ゆつくり休んでください？」

○○「でも昼は驚いたよ？今日の夜一緒にいてほしいて言うから、まりなさんたら目が点になってたし」

彩「ドッキリかと言われましたよね？でも信頼できる人ですぐに○○さんが浮かびましたから」

○○「ありがとう？…ふあ、」

彩「眠いですか？」

○○「少しね?…最近、忙しかったか…ら…:…:スウ…」

彩「いつもお疲れ様です?○○さん、みんな○○さんやまりなさんには心から感謝してるんですよ」ナデナデ

○○「スウ…:スウ…?」

彩「だから、これからもみんなの力になってください?…」

数時間後くA M 1 : 2 5 分く

○○「…:…:はっ…:やば寝てた?…:…:もう夜中じゃん?」

彩「…:…:ん?あ、起きました?○○さんぐっすりでしたよ」

○○「そっか?ごめんね、ずっと同じ体勢で疲れたでしょ?」

彩「いえ、私も寝ちやいましたから？」

彩「さて、○○さん布団いきましよう」

○○「そ、そうだね？お言葉に甘えるよ」

彩「こつちです♪」

寝室

○○「ヨイシヨ：じゃあ彩ちゃん、おやすみなさい？」

彩「はい、おやすみなさい○○さん？」ピツ：

翌日

○○「ふあく…おはよう彩ちゃん」

彩「んん…おはようございます♪○○さん、今から朝ごはん作りますね」

○○「手伝うよ？昨日のお礼」

彩「ありがとうございます♪じゃあ作り始めましょう！」

○○「おう！」

台所くトントントン

○○「これぐらいかな…ズズ…」グツグツグツ

彩「○○さん味噌汁ですか？」ジユウウゝ

○○「うん、いい感じ？アジのほうはどうかかな？」

彩「もうすぐで焼けます……よし、出来ました？」

〇〇「じゃあ並べて食べようか」

彩「はい？」

リビング

彩「じゃあ……いただきます？」

〇〇「いただきます？……ズズはあ、美味しい？」

彩「本当？美味しいです、アジもいい感じ？」

〇〇「だね？それに彩ちゃんが一緒だから朝食も楽しいよ♪」

彩「私も○○さんと一緒に朝食楽しいです♪」

○○「誰かと食べるというのはやっぱりいいね？」

彩「ですね？」

数分後

○○「ふう美味しかった？さて自分の分洗つとくね」

彩「洗つときますよ？」

○○「いやいや、やっぱり自分の分くらいは洗わないと？」ジャァー…

彩「でも時間大丈夫ですか？」

○○「よし終わった？それなら大丈夫……夫……」AM7:45分

彩「確か○○さん今日シフトの日じゃあ」

○○「彩ちゃん…この時計進んだりは」

彩「進んでないです？」

○○「うわあああ？急がないと？……じゃあ彩ちゃんまたね？」
バタバタバタ…ガ
チャ…バタン

彩「……お仕事頑張ってください？○○さん」

ねこLOVE同盟

公園がある昼下がり

〇〇「ほら、おいで〜」

「ニャー…」

「ニャー…」

〇〇「よしよし、可愛いなあ〜…」

「コロコロコロコロ…」

友希那「こんにちは、○○さん」

○○「やつ友希那さん…それじゃあねこLOVE同盟、第○○回会合を始めようか」

友希那「ええ…まずは私から、石のうえで日向ぼっこお腹をみせてよ」

○○「か、可愛い…それじゃあ次は僕から…上目遣いでみつめる、おねだり…」

友希那「…素晴らしいわね」

「ニャー…」 ナデナデ

○○「おお、ヨシヨシ…いやあ今回もいいの見れたよ」

友希那「私もいいの見れたわ、ありがとう…所…」

○○「ん？なにかな」

友希那「……いえなんでもないわ／＼」

ぬこ s 「……」

〇〇「そつか…しかし、ここのこたちは本当に人懐っこいね」

友希那「そうね…あつ」バツ…スタ…タタタ

〇〇「いっちゃったね…じゃあ僕たちも解散しようか、じゃあ友希那さん次回の会合で」

友希那「ええ…」

友希那宅く友希那自室

友希那「はあ…今日も言えなかったわね、次の会合でこそ必ず…〇〇さん…」

回想

○○『可愛いなあ♪ヨシヨシ』

友希那『○○さん…なにしてるのかしら』

○○『友希那さん…ねこちゃんたちと少しね』

『ニャー…』

友希那「…：キュン／＼本当に人懐っこいわね…」ナデナデ

○○『僕もすっかり常連だよ、ねこ好きにとってはたまらない』

友希那『そうよね、ニャーちゃん可愛いわよね』

○○『ニャーちゃん？あ、友希那さんもねこ好きなの？』

友希那「クライじやあないわ／＼」

○○『つまり好きということか？じやあさ同盟組まない？ねこLOVE同盟』

友希那『……悪いけどバンドが忙しいk』ニャー…

『ニャー♪』

友希那『時間がある日は私から電話するわ』

○○『オーケー♪』

回想終わり

友希那「それから…いっぱい○○さんと会合して、暇さえできれば○○さんにあつて

…だん…だ…ん○○き…んの…／＼

「…」スタ…タタタ…

その日の夜

ぬこ1 『ニヤー（いるか？）』

ぬこ2 『ナ〜（いるぜ）』

ぬこ3 『ニヤー（珍しいなこの時間に、どうした…）』

※以下翻訳が入ります

ぬこ「ああ、たまに来る二人の人間がいるだろ」

ぬこ2 「ああ、あの仲のいい…それがどうかしたか？」

ぬこ3 「なにかあったのか？」

ぬこ1 「ああ、昼間：嬢ちゃんの様子がおかしかったらつけたんだ…そしたらよ……
ゴニヨゴニヨ…」

ぬこ2 & 3 「なに!? 恋してるらしい!？」

ぬこ1 「声がでけえよ? 周りに聞かれたらどうするんだ?」

「ニヤーニヤーニヤー」(ちなみに人間にはこう聞こえます)

ぬこ1 「……タク…それでだ次、二人が来たら俺たちであの二人をくつつけるぞ、嬢ちゃんをバツクアツプだ」

ぬこ2 「でもよ、うまくいくか？」

ぬこ3 「まあ…やるだけやるしかないだろう…ともかく勝負は次来たときだ」

ぬこ1 「ああ…じゃあ解散だ、抜かるなよおまえら」

ぬこ2 & 3 「おう…」ニヤー

そして迎えた、会合の日

〇〇 「やあ友希那さん」

友希那 「ええ…こんにちは〇〇さん」

〇〇 「じゃあ始めようkおわ?…」ニヤーニヤー（スリスリ）

友希那「危ない？」ガシ…グイ

〇〇「わわわ？…ありがと!?!?!」

友希那「…?!?!?!/いえ/」

〇〇「そ、それじゃあ始めようか？」

友希那「ええ?/」

ぬこ1「ニャーニャー（おまえらプランBだ）」

ぬこ2&3「ニャー（ラジャー）」

ぬこ「ニャー」バリ…スタ

〇〇「いた？ツメが引つ掛かったちやつたかな？」

友希那「大丈夫？」

〇〇「大丈夫？消毒液つけるから？……染みるなあ」

ぬこー「悪いな、これも嬢ちゃんのためだ、おまえら最終プランだ、嬢ちゃんをダンのほうにたおれさせろ」ニヤーニヤーニヤー」

〇〇「しかし今日はねこ同士の会話が凄いな？」

友希那「そうね、なにかあるのかしら？わわ？ニヤーちゃんたちが私の周りをぐるぐるとして、きやあ？」

〇〇「あぶねえ？……友希那さん大丈夫？」

友希那「え、ええ／＼ありがとう／＼……ねえ〇〇さん今からいいかしら？」

〇〇「いいよ?どうしたの?」

友希那「ここだと人目があるから私の家でもいいかしら?」

〇〇「わかった…それじゃあ行こうか」

友希那「ええ／＼」

ぬこ s 「(後は嬢ちゃん次第だ、頑張るんだぜ……)」

マスクさんとツーリング

ブオオオオオ〜…ブオン…ブオオオオ…スチャ

〇〇「プハア…よし、少し休憩したらまた出発するか」ピンコーン、ピンコーン、

「いらっしやいませっ」

〇〇「ええーと、ホットミルクティーをカゴにいれて…後は肉まん買ってくか……すいません」

「いらっしやい？ホットミルクティーが一点ですね150円に」

〇〇「すいません、あと肉まんを一つお願いします」

「かしこまりました、あわせて250円になります」

〇〇「では丁度で」

「丁度いただきます、ありがとうございます？」

〇〇「ありがとうございます？…」

店外へ

「……あ、〇〇さんじゃん」

〇〇「マスクングさん、こんにちは？」

マスクング「よっ？今日はどうしたんだ？」

〇〇「天気がいいから、ふらっときたんだ…今日は気温も高くて暖かいし」

マスクング「確かに、今日は暖かいよな、なあ私も一緒にいいか？」

〇〇「もちろんいいよ？」

マスクング「じゃあいこうぜ？」

〇〇「うん、でもちよつと待っててね：ゴク：ゴク：プハア、よし行こうか」

マスクング「ああ？」ブオン！ブオオオオオオ

ブオオオ

数十分後く…ブオン…ブオオオ…

道の駅く

○○「ふう…少し休憩しようか、うーん？」

マスキング「大分走ったよな、なあこのあとはどこに向かう？」

○○「そうだね、とりあえず休憩終わったら気の向くまま…かな、どこか行きたいとことかある？」

マスキング「いや…○○さんにひたすら着いていくよ」

○○「そっか…さて少しお店覗いていつこかお土産とか見つかるかもしれないし」

マスキング「だな？」

店内く

○○「わあ、ここの野菜安いし新鮮だなあ…」

マスクング「饅頭とかも売ってんだな…○○さんは何にする？」

○○「そうだなあ、とりあえず野菜を少しとお饅頭にしようかな」

マスクング「じゃあ会計済ませて出発しようぜ」

○○「だね？」

会計後く駐車場

○○「いやあ買った買った…詰めて…よし、こっちは出発準備完了したよ？」

マスクング「わたしも出発準備できたぜ」

〇〇「よし、じゃあ出発しようか？」ブオン！…ブオオオ〜

ブオン！ブオオオ〜…

ブオオオブオオオ〜…気がつくど辺りは夕焼けに

〇〇「…もう夕方か…時間がたつのは早いね」

マスキング「そうだな、そろそろ帰るか」

〇〇「そうだね…結局海まで走って来ちゃったね？」

マスキング「そうだな…夏は海水浴客とかで賑わってんのかな…」

〇〇「遊泳禁止区域じゃないならきつとそうじゃないかな、さつそろそろ行くかうか」

マスクング「だな、いこうぜ？」フツ

ブオン！ブオオオ

ブウウウウ

ブウウウウブオン！ブオオ：マスクング宅前

マスクング「悪かったな、家の前まで付き添ってもらって」

○○「いやいや、今の世の中物騒だからね：じゃあマスクングさんまたね？」ブオン
！ブオオオ：

季節は春から夏へ

公園へ

ジージージージー

〇〇「今日も暑いなく今年も来たぜこの季節」

あこ「あ、〇〇さん今日は？」

〇〇「あこちゃん？今日は！」

あこ「今日も暑いですね？…」

〇〇「暑いね?…ジュース飲む?」

あこ「いただきます?買ってきますね」

〇〇「いつてらっしやい?…ふう、セミが元気に鳴いてるな」

数分後

あこ「ただいまー?…あこも〇〇さんと同じのにしちゃいました」

〇〇「そっか、まあこの季節はスポーツドリンクが一番いいからね」

あこ「お揃いですね?しかし今日も凄いですね暑さ?」

〇〇「まあ夏だからね、ただ僕は花火とかあるから夏は好きかな」

あこ「花火かあ〇〇さんは今年も見に行くんですか?」

〇〇「まあね、良かったら一緒にいくかい？」

あこ「いいんですか!?!はい？是非？」

〇〇「じゃあ今度いこうか」

あこ「はい？約束ですよ♪」

それからしばらくして

まりな「あ、二人とも今日は??::今日はデートなのかな？」ニマニマ

〇〇「ふふ、そうだとしたらどうします？」

あこ「…あ、〇〇さんまだ内緒にしとこうと話したばかりじゃないですか？」

〇〇「……いやあでも何時かはバレる訳だし」

まりな「え？え？本当に出来たの？ええ？いつの間に？…」

〇〇「去年あたりだったかな？」

あこ「でしたかね？……まあ」

〇〇「嘘なんですけどね」

まりな「へ？」

あこ「あこたち付き合っていないですよ♪」

〇〇「いやあ、まりなさん反応面白いのでつい（笑）」

まりな「もう？びつくりさせないでよ？」

あこ「えへへ♪……今度、友希那さんたちにもやってみようかな……」

〇〇「それは……やめたほうがいいと思う？……紗夜さんなんか泡ふいて倒れかねないし汗」

まりな「確かに、やめといたほうがいいかも？」

〇〇「というか、誰にもしないようにしよう？変に噂が広まるのもマズイしさ」

あこ「それもそうですね？……そうだ、まりなさん何処かいく予定だったんじゃないやあ」

まりな「ううん特に予定はないんだ、散歩してたら二人を見かけてね」

〇〇「そうだったんですか……それにしても本当暑いですね？」

まりな「そうだね…それじゃあ二人とも私はそろそろ行くけど、二人とも熱中症には気を付けてね？」

〇〇「はい？まりなさんもお気をつけて？」

まりな「うん、じゃね」

まりなさんが帰ってから数時間後

夕方

〇〇「あはは…ん？もう夕方かあ話し込んで気づかなかったな、よしそろそろ帰るかな」

あこ「本当だ？お姉ちゃんに怒られちゃう？それじゃあ〇〇さん、また？」

〇〇「うん、また明日？」

まりなさんとサマーキャンプ

キャンプ場へ

〇〇「よし、設営完了！薪も用意したし、昼にしようかな」

まりな「しようしよう？…火つけて、温まったら焼きはじめよう」

〇〇「はい？…しかし晴れてよかったですよ、雨だと日程もずらさないといけないし」

〇〇「確かにね、今日は絶好のキャンプとバーベキュー日和だ？…おつ温まりましたねじゃあ焼きますか？」

まりな「うん？」
「ジュー」

〇〇「豚や牛もいきますね、ヨイシヨ」ジュー…

〇〇「はぁいい匂い…お腹空いた〜」

まりな「まだまだだよ〜しつかりと火を通さないと…あつ串焼き裏返すね」

〇〇「あつ僕が?…あちち?…よし」

まりな「大丈夫?」

〇〇「はい、大丈夫ですよ?…あつ豚と牛焼きましたよ?鶏は…もう少しですね」

まりな「ありがとう?〇〇くん、あーん」

〇〇「あーん…うん美味しいです?じゃあまりなさん、あーん」

まりな「あーん…うん美味しいよ?焼くの代わるね」

○○「では…お願いします?…お肉いれときますね」

まりな「ありがとう?…:…:それ」ジュー…

○○「しかしバーベキューは楽しいんですが、服に匂いがね?」

まりな「あゝそれはまあ仕方ないよ?…:…:でもぬかりはないよゝじやーんフアブ〇ーズ♪食べ終わったらシユてね?」

○○「おお?…:…:これできがねなくバーベキューを楽しめますよ?…:…:あつまりなさん、あーん」

まりな「あーん…:…:美味しい?…:」

数十分後

まりな「はあ食べた食べた？美味しかった♪」

〇〇「キャンプといえばバーベキューですよね♪それじゃあ片付けちゃいますね」

まりな「手伝うよ？してもらってばかりじゃ悪いから？」

〇〇「ありがとうございます♪…このあとはどうします？」

まりな「そうだね、フリスビーでもしてみない？」

〇〇「いいですね？やりましょう♪」

まりな「それじゃあちやちやと終わらせちやおう♪」

〇〇「はい♪」

数分後…

まりな「じゃあいくよ？それ？」

〇〇「おつと…ほい？」パシ…ヒュ

それから数時間後…夜

パチ…パチパチパチパチパチ

〇〇「夜か…今日は楽しかったな」

まりな「私も…明後日からはまた仕事か」

〇〇「お互い頑張りましょう…：…どれ一曲…：…♪」（曲は好きな曲を想像してください）

まりな「いい曲だなく…（もったいないなあ）…ねえ、〇〇くん…：…」

○○「ん？……どうしました？」

まりな「……ううん、なんでもない」

○○「……？……♪……」

まりな「やっぱり上手だね？……そろそろ寝よつか」

○○「ですね、ふあ……ではおやすみなさい、まりなさん」

まりな「おやすみ？○○くん」

季節は夏から秋へく

10月某日く

〇〇「うーん?…:秋だなあ」

チュチュ「Hai〇〇」

〇〇「チュチュちゃん、こんにちはは?どうしたの?」

チュチュ「別に、ただ見かけたから声をかけただけよ、今日は休み?」

〇〇「まあね、家にいるのもアレだしカフェでお茶でもしようかなって思ってたさ」

チュチュ「ふーん、ねえ○○わたしもいい？」

○○「ん？いいよ？……」

チュチュ「待ってて」

数分後

チュチュ「お待たせ、私はミルクテイにしたわ」

○○「ミルクテイ美味しいよね？あつお菓子食べる？」

チュチュ「いいのかしら？」

○○「どうぞ？」

チュチュ「t e n k y u ……いただくわサク…ねえ○○」

○○「ん？」

チュチュ「○○にとっての秋はなに？」

○○「ん？僕は食欲の秋かな♪秋は美味しいものいっぱいだから」

チュチュ「そう…私は Myu-j i k k u ……音楽の秋ね、と…それじゃあ○○私は行くわ」

○○「了解、これから練習かい？」

チュチュ「ええ」

○○「そうか、練習頑張つて！」

チュチュ「もちろんよ、それじゃあ」

ズズー…カチャ

○○「ふう、いい天気だなく…、そろそろ秋キャンプの準備しとくか、紅葉楽しみだな」

まりな「あつ、○○くん？こんにちは♪」

○○「まりなさん、こんにちは？…：…休憩ですか？」

まりな「そんなとこ♪…：…いい天気だね」

○○「そうですね、気温も丁度いいし」

まりな「そろそろ○○くんの行事の秋キャンプの時季かな？夜は冷え込むから暖かくね」

〇〇「はい♪……それじゃあ僕はそろそろ行きますね、では」

まりな「うん？また明日ね」

〇〇「ええ？では」スタスタスタ

帰りの道中へ

〇〇「とりあえず買い出しもしとかなないと、炭に着火材に、キャンプの買い出して何故か楽しいよな……ん？」

香澄「あ、〇〇さんこんにちは？……散歩ですか？」

〇〇「うん、そんなところ……すっかり秋だね、行楽日和だ♪」

香澄「そうですね、〇〇さんはどこか旅行の予定とかあるんですか？」

〇〇「旅行の予定は今はないかな、でもキャンプには行くつもり」

香澄「キャンプ、私も行きたい！〇〇さん、私も」

〇〇「ごめんね？キャンプは今回はソロで行きたいから」

香澄「うう？わかりました？……それじゃあ〇〇さんまた？」

〇〇「うん、待たね…」スタスタスタ

再び道中

〇〇「キャンプは何処へ行こうか、場所決めとかないとな…うーん？いい天気だ♪…少し休憩、ふう…今年もあと3ヶ月ちよいか…早いよなあ」

美咲「あ、〇〇さん…こんにちは」

〇〇「美咲ちゃん、こんにちは？散歩かい？」

美咲「いえ、ハロハピの会議です…ここからいきなり召集がかかって」

〇〇「あはは？こころちゃんも相変わらずだね？…あ、それじゃあ急がないと」

美咲「ですね、では〇〇さんライブとかになったらその時はお願いします」スタスタ
スタ…

〇〇「任せて？…今日は知り合いによく会うなあ…ふあゝやば寝ちやい…そ…う
…」スヤア

数時間後

？「ーん、ーさん…」

〇〇「ううん…スー…スー」

「〇〇さんてばっ…」

〇〇「うん?…やば寝てた?うう…冷えてきたな?…ん?」

リサ「やつと起きた?こんなところで寝てたら風邪引くよ?ほら起きて」

〇〇「リサさん、ありがとう?…うう冷えるな?起こしてくれてありがとうね」

リサ「どういたしまして♪じゃあ冷えるし気をつけてよ?」

〇〇「うん…じゃね?」タタタタタ…

季節の変わり目は風邪にご用心

〇〇「クシツ…」

まりな「大丈夫？風邪？」

〇〇「熱はないみたいなのですが…」

まりな「この時季は風邪引きやすいから気を付けてね？」

〇〇「はい？……」

翌日

○○宅へ

○○「ううん…何時だ？…もう昼か、食欲ない？、喉乾いたしお茶取ってくるか」

○○「あーポーとする…お茶、お茶…あつた…パキ」ゴク、ゴク、ゴク

○○「プハツ…戻ろ」

○○の部屋へ

○○「ヨイシヨ…ゲツホ？ゲツホ？…」スヤア…

それから数時間後へ…PM20:30分へ

ガチャ…

まりな「○○くん？入るよ〜？」

○○の部屋〜

○○「はあはあ…うう」

まりな「○○くん大丈夫？…」

○○「まりなさん？…幻覚かな…」

まりな「違うよ？…ご飯は食べた？」

○○「食欲なく…て？」

まりな「駄目だよ？…待ってて台所借りるね」パタン…タタタタタ

○○「…う?!」ボタン!ズダダダダ…ガチャ…

／おロ〃ロ〃ロ〃ロ〃／

ジャア…ボタン…スタスタスタ

ガチャ…ボタン

○○「ぜえぜえ、頭痛てえ…」

数分後

まりな「○○くん大丈夫じゃ?」

○○「大丈夫じゃないです?…いい匂い」

まりな「うどん作ったんだ、ふーふー…あーん」

〇〇「あーん…ズズー、美味しいです」

まりな「良かった？」

数分後

〇〇「ふうごちそうさまでした、まりなさん身体ふきたいので少し出してもらえますか？」

まりな「それなら私がふいたげるよ？…今の〇〇くんとても一人に出来ないし、ほら後ろむいて」

〇〇「は、はい？」

まりな「ふくよ？」 サパア…ピト

〇〇「ひゃ!?!んん」

まりな「もう少しだからね〜……はいおしまい前はふける?」

〇〇「はい?」

数十分後〜

〇〇「よいしょ…ふう、まりなさん今日はありがと…ゴツホゴツホ?ありがとうござ
います?..」

まりな「気にしないで?……今日は私も泊まっていくから、明日はちゃんと病院にい
くこと」

〇〇「いや、このまま家で安静に」

まりな「いくこと」ニコ♪

〇〇「はい(汗)」

まりな「はい、今日はもう寝よう…」

〇〇「ずっと寝てたからあまり寝れない？」

まりな「じゃあ寝られる歌を歌ってあげる…何がいいかな？」

〇〇「じゃあ君の知らない物語で」

まりな「……いいよ……♪♪」

〇〇「……(あ、だんだん眠く…なっ…て)スウ…」

まりな「……♪…どうかな?……眠れたみたいだね…さて万一のためにしつかり診て

ないとね」

翌日く…

〇〇「ううん…朝か……まりなさん一晩中、看病してくれてたのか？」

まりな「ううん…あっおはよう？体調はどう？」

〇〇「昨日よりは大分楽になりました？」

まりな「そっか、じゃあご飯食べたら病院行こう」

〇〇「はい？…」

まりな「さっ下に行こう」パタン

〇〇「……………病院苦手なんだよな汗」パタン

キャンプ地から電話で

道中くブウンく

〇〇「ふぁーいい天気で絶好のキャンプ日和だ♪……と、少し休憩と」ブオン……ドルル……ガチャン

道の駅く

〇〇「うーん？大分来たなあ、えーとあと半分か、とりあえず飲み物かお……」ピツ……ガシヤン

〇〇「ゴクゴクゴク……ぷはあ……すっかり秋だなあ……コク」

15分後

〇〇「そろそろ行くか…ヨイシヨ」ガチャン…ブオン！ブウン

〇〇「着いたら昼にするかな、今日は炭火焼きハンバーグ♪」ブウン…

キャンプ場駐車場へブオン…ドルルル…ガチャン

受付

〇〇「明日まで一泊で」

「はい、テントですか？」

〇〇「はい」

「では3000円になります、チェックアウトは明日の10時です」

〇〇「わかりました？」カララ…パタン

キャンプ場へ

〇〇「ひゃあ絶景だなあ、さて何処にしよう…」

数分後へ

〇〇「よし、ここにするか…テントを立てて…設営完了！…さて焼くか」ピコン♪

〇〇「ん？まりなさんからだ」

まりな「やつほー♪キャンプ場ついた？」

○○「いま、つきました」

まりな「そっか、どこのキャンプ場？」

○○「□□キャンプ場で所です」

まりな「そっか、後で写真送って♪」

○○「了解です」

まりな「ついでにお昼ご飯もお願い♪」

○○「オコトワリシマス」

まりな「ふふふ、いいのかな？君のいるキャンプ場に猫100匹を放った♪」

○○「うわなにをするくあwせdrtfgyふじこI p」

〇〇「くたばつちやつたじゃないですか」

まりな「こつちもお腹空いてくたばりそうだよ」

〇〇「……さてそろそろ本当に焼かないとな……十分に熱して、いざ焼き上げ」
ジユウウウ

〇〇「はあ、いい匂い……空気のいい所で炭火焼きハンバーグ……絶対美味しいよ」
ジユウウウ

〇〇「片方もしっかり火を通して……出来た？炭火焼きハンバーグ、後はカップのスープにお湯を入れて……昼食の完成？」

炭火焼きハンバーグとカップのスープ

外飯効果で美味さ倍付け

〇〇「いただきまーす…うん美味しい♪空気もいいし来てよかった♪………全ての喧騒から離れて暮らすのもたまにはいいね…」♪

〇〇「ん？あこちゃんからだ…はい、さぞ」

あこ「〇〇さん？いまなにしてみました？」

〇〇「ん？今はキャンプに来てるよ…どうしたの？」

あこ「暇だからどうしてるかなあて思いました、それよりキャンプいいなあ、あこも行きたかったです？」

〇〇「ごめんね？今回はソロで行きたかったからさ、今度一緒に行こうね？」

あこ「絶対ですよ？それより……〇〇さんさつき危ないこと言いかけなかったですか？」

〇〇「いや言っていないよ？……と、じゃあそろそろいいかな？」

あこ「はい？じゃあ〇〇さん、また？」プツ…ツーツーツー

〇〇「あちゃんとキャンプか、時間が合えば行ってみたいな……うん美味しい♪
……ズズー…スープも美味しい♪」

数十分後

〇〇「はあ食べた食べた、ごちそうさま♪さて道具や食器類洗わないとな」

数分後

〇〇「ひやあ冷たかった?……よし道具詰めて散策するか」

〇〇「……ん?近所に温泉あるのかあ後で行くか。」

〇〇「ここはトイレか………テント戻るか」

テントへ

〇〇「はあ……紅葉が綺麗だなあ……あつ焚き火用のまき集めとかないとな」

数分後

〇〇「こんなもんか、後は松ぼっくりを集めて、よし夜はこれで大丈夫、うーん?」

夜へ

パチ……パチパチパチ

〇〇「ああ暖かい…ウトウト…そろそろ寝るか火を消して…おやすみ」

翌朝

〇〇「ふあ…よく寝た？チェックアウト済ますかテントを片して」

受付

〇〇「チェックアウトお願いします」

「はい…〇〇様ですね…」

数分後

「はい、チェックアウト完了です又のご利用お待ちしております？」

○○「はい？」カララ…パタン

○○「いやあ楽しかった♪」ガチャン…ブオン！ドルルル

○○「それじゃあ家に向かって、出発♪」ブウン…

チユチユちゃんとおこちちゃんと

C i R C L E 外のカフェ

〇〇「ズズー…カチャン…今日は少し冷えるな、冬が近いなあ」

あこ「あつ…〇〇さーん？」

チユチユ「h a i 〇〇」

〇〇「チユチユちゃん…にあこちゃん、珍しい組み合わせだねどうしたの？ズズ…」

チユチユ「偶然あったのよ、所で〇〇こんな所で一人で居たって事はナンパでもするつもりだったの？」

〇〇「!?ブフツ?...ガツホ?ゲツホゲツホ?...」

あこ「だ、大丈夫ですか？」

〇〇「大丈夫だよー?...:チュチュちゃん?僕はナンパとかしないよ?!

チュチュ「そう:...てつきり〇〇もクリスマスに備えてナンパするつもりだと思ったわ」

〇〇「しないよ?...どこ情報なのさ?」

チュチュ「まりな月島よ:...昨日偶然あつてね、結構酔ってたけど、〇〇が寂しいからナンパでもしよかな:...て言ってたって」

あこ「え:...〇〇さんナンパするんですか?」

〇〇「しないよ!？」

チュチュ「そう…因みに私は対象に入るかしら？」

〇〇「チュチュちゃんやあこちゃんみたいに可愛い子達は、ガッツリ対象だよ…まあ年齢差あるから厳しいけどね…でも二人とも今の話し他では言っちゃダメだよ？」

チュチュ「あら自分意外には言ってほしくないってヤツかしら？」

〇〇「そうじゃないよ?…さて、そろそろ僕はいくよ」

あこ「えー…もう少し話しましょうよ?今日は休みなんですよね？」

〇〇「まあね、でも買い出しいかないといけないからさ?」

チュチュ「じゃあ私たちもいいかしら?…つまりデートてわけ」

あこ「○○さんと!?!あこ是非行きたいです!」

○○「いいけど夕飯の買い出しだよ?」

チュチュ「yes∴問題ないわ行きましょう」

○○「わかった、じゃあ行こうか?」

あこ「やったー?○○さんとデートだ♪」

○○「一旦車を取りに行くね」

あこ「了解です?」

数分後

○○「よし、シートベルトはしたかな?」

チュチュ「ええ」

あこ「装着完了です？」

〇〇「よし、それじゃあ出発？」ブオン…ブロロ

スーパー

〇〇「鶏肉と…人参と…」

チュチュ「そういえばdinnerはなににするのかしら？」

〇〇「ん？…さて、今夜はわたくしがいただくのは鶏肉と濃厚クリームのカレー
シチューです…」

あこ「いきなりどしたんです!？」

チュチュ「w a i ! ? ○ ○ ……どうしたの??」

○○「ん? いっぺん言ってみたかったの…二人も今度言っでござらん? いい刺激になるから」

チュチュ「そう…試してみるわ」

あこ「あこもやってみます♪」

○○「(o≡▽。)o」

翌日

チュチュのマンション

パレオ

チュチュ「チュチュ様、今夜はなににしますか？」

チュチュ「(今ね) さて、今夜私がいただくのは、ビーフジャーキーよ」

パレオ「チュチュ様!?!いきなりなにを？」

マスク「チュチュ…悪いもんでも食ったか？」

レイヤ「チュチュ…少し疲れてる?…熱はないみたいだけと」

パレオ「あのチュチュ様?先ほどのはいったい?？」

チュチュ「な、なんでもないわ?／＼」

同日ファミレスにて

あこ「さて、今回あこがいただくのは…牛挽き肉たっぷりの濃厚デミグラスソースハ
ンバーグです」

友希那「……あこ？どうしたの？（汗）」

リサ「あこ…疲れてる??」

隣子「あこちゃんいきなりどうしたの？」

あこ「い…いえ？ちよつと言ってみたくなつて？」

友希那「そ…そう（汗）」

あこ「あははは？／／…」

翌日

チュチュ「○○はどこ？出てきなさい！○○！」ジャキン

あこ「○○さんは何処だだ！あの人は何処へいった！」ガチャン…ジャキンジャキン
まりな「さ…さあさつきまではここにいたけど？」

クリスマスケーキ選びは結構楽しいよね

11月某日

○○「うーん、なににしようかなあ」パラ：

香澄「○○さーん？、なに見てるんですか？」

○○「ん？ああ、クリスマスケーキのカタログさ、今年のクリスマスケーキはどれにしようかなって思ってたさ」

香澄「ケーキかあ、○○さん甘いもの好きなんですか？」

○○「もう大好き？だからクリスマスの日には必ずケーキ食べるようにしててさ、去

年はチョコにタルトを食べたなあ」

香澄 「胸焼けしませんでした?」

〇〇 「全然大丈夫だったよ? さて、どれにしようかなあ…」

香澄 「あつ…これとかどうです? 濃厚チーズケーキ」

〇〇 「チーズケーキかあ、いいね? おっと…このクリームケーキも美味しそう♪、あーこっちは可愛い!」

香澄 「本当だ? 食べるのが勿体ないくらい」

〇〇 「抹茶系もいいなあ、うーん? 迷っちゃおう?」

香澄 「でも〇〇さん、凄く楽しそう♪」

〇〇「まあね、毎年の事だけとケーキ選び楽しいよ？」

香澄「〇〇さん、いますごく輝いてるから楽しいの気持ちが私にも伝わってきます
♪」

〇〇「そつか………決めた！今年はこのたつぷりのクリームケーキにしようつと♪
……早速予約だー？」

香澄「私もいい一緒に行つてですか？」

〇〇「いいよ♪」

ケーキ屋へ

「いらっしやうませー」

〇〇「クリスマスケーキの予約したいんですが……このたつぷりのクリームケーキで受

け取り日は12月25日の17時でお願いします」

「かしこまりました?では12月25日17時…予約承りました、では3500円になります
ます」

〇〇「丁度で?」

「丁度いただきます、こちら予約票です大切に保管してください」

〇〇「はい…ありがとうございます?」

香澄「あ、すいませんこのショートケーキ二つください♪」

「はい…では600円になります」

香澄「丁度で?」

「丁度いただきます、こちらケーキです？ありがとうございます！」

○○「終わったかい？」

香澄「はい♪行きましよう♪」

○○「行こう」

羽沢珈琲店くカランカラン

○○「やつほ」

つぐみ「あ、○○さんいらっしやいませ♪」

香澄「こんにちは？」

つぐみ「ふふ、二人でデートですか？私もいきたくないななんて

〇〇「はは、よかつたら今度デートしてみる？」

つぐみ「あー浮気だなんていけないんだー」

〇〇「あはは？こりや一本とられたよ？……と珈琲と…香澄ちゃんは何にする？」

香澄「私はカフェオレで♪」

つぐみ「了解です？ちよつと待っててくださいね♪」

〇〇「しかし、今日は冷えたな〜」

香澄「ですね〜クリスマスまえに風邪引かないよう気を付けなにとですね」

〇〇「そうだね？…あ、いい匂い」

つぐみ 「お待たせしました？ 珈琲とカフェオレです？」

〇〇 「ありがとう♪ズズー…うん美味しい♪」

香澄 「カフェオレも美味しい♪…あー動きたくないなー」

〇〇 「わかるな〜おしりに根がはるよね〜ズズー…ふう温まる〜」

つぐみ 「ゆっくりしていつてくださいね♪…11月ももう終わりが近いですね〜」

〇〇 「そうだね〜クリスマスが終われば年末まであつという間だし、時間の流れの速さを感じるよ〜ズズー…」

香澄 「今年も色々あつたなあ…」

数分後…

〇〇「さて、そろそろ帰らないと…つぐみちゃんお会計お願い」

つぐみ「はい？カフェオレと珈琲で1000円になります♪」

〇〇「ん、丁度で」

つぐみ「丁度いただきます、ありがとうございます♪また来てくださいね♪」

〇〇「もちろん♪香澄ちゃん行こうか」

香澄「はい♪…」カランカラン

外へ

〇〇「それじゃあ香澄ちゃん…気をつけてね」

香澄「はい？じゃあ〇〇さん、また？」

季節は秋から冬へ～

C i R C L E

〇〇「おはようございます、今日も冷えますね～?」

まりな「そうだね?夕方も冷え込むみたいだし、お互い風邪には気を付けないとね?」

〇〇「ですね、あっ着替えてきますね」

まりな「了解?……冷えるな～?」

数分後～

〇〇「お待たせしました?……まりなさんはクリスマスはどうします?」

まりな「まあ部屋で一人サミシマスかなあ…あつひよつとして誘われてる?」

〇〇「違いますよ?……僕も似たようなもんです?」

まりな「残念、まあお互いサミシマスてことかな」

〇〇「ですね(笑) ippそのこと流行らせてやろうか」

まりな「いいね?せえの」

〇〇まりな「メリーサミシマス♪……H A H A H A?」

「はあ(泣)」

〇〇「さて、スタジオとステージの掃除行ってきますね」スタスタ…

まりな「了解?…私もフライヤーの補充しとかないとね」

数十分後

〇〇「掃除終わりました?」

まりな「おかえり?…じゃあお客さん待とうか?」

〇〇「はい?…しかし外は寒そうですね」

まりな「寒いよ、ポスターの張り替えしてる時、凄く寒かったもん?」

〇〇「やっぱり、これだけ寒いと雪が心配だよ」

まりな「雪で不思議だよ、普段は降ってほしくないのにクリスマスの日雪はロマンチックに感じるんだもん」

〇〇「あーわかります、クリスマスの雪は僕も好きです」

まりな「でもクリスマスが終わると、その雪が…ね」

〇〇「クリスマス魔法が解けるんですよ…」

まりな「そうそう？……ねえ〇〇くん」

〇〇「なんででしょう？」

まりな「クリスマスさ、よかったら一緒にすごさない？」

〇〇「いいですけど…僕でいいんですか？」

まりな「もちろん♪……どうかな？」

○○「はい？僕でよければ是非！……クリスマスが楽しみだ？」

まりな「よかった？うん、私も♪」

数時間後くPM16：30分く

あこ「こんにちはー？」

まりな「いらっしやい？」

紗夜「こんにちは、湊さんたちももうすぐ着きます」

友希那「こんにちは、予約してた湊なのだけど」

○○「いらっしやい！……はい、確かに、今日は二番使って」

友希那「わかったわ、さあ行きましょう」

リサ「さあ今日も頑張ろう〜？」

〇〇「……しかし、クリスマスかあ誰かと過ごすのは今年が初めてかも」（去年のクリスマス回とは時列が別です）

まりな「意外、〇〇くんモテそうだからってつきり」

〇〇「はは、去年まではサミシマスでしたよ？……だから今年のクリスマスは凄く楽しみです」

まりな「それは私もだよ？楽しいクリスマスにしようね♪」

〇〇「は〜？」

クリスマスすぎるとあつという間だよね

羽沢珈琲店

カランカラン♪

つぐみ「いらっしや…あつ…○○さん？」

○○「こんにちは？いつものお願いできるかな？」

つぐみ「はい？大丈夫ですよ♪」

○○「お願いします？…よいしょ」

つぐみ「今年もあと少しですよね〜」

〇〇「そうだねクリスマスすぎるとあつという間ていうしね〜」

つぐみ「ほんと、あつという間ですよねクリスマス終わってからもう二日たちますし」

〇〇「毎年この時期は同じこと思ってるよ（笑）…あついい匂い」

つぐみ「もう少しで出来ますよ？よし…お待たせしました♪」

〇〇「ありがとう？…ズズ…うん美味しい♪」

つぐみ「ありがとうございます？…しかし今日も冷えますね」

〇〇「だよ、中頃から急激に冷え込んできたもんね…年末年始は雪も降るみたいだし…つもりすぎないといいけど？」

つぐみ「雪かき大変ですもんね？」

〇〇「ほんと…それなのよ？手はかじかむし風は痛いし…ううー？」

つぐみ「まあまあ、もし大変なら私も手伝いますから」

〇〇「ありがとう？…ズブー…はあ、温まるなあ」

つぐみ「ゆっくりしていつてくださいね♪」

〇〇「うん、そうさせてもらうね？」

カランカラン♪

つぐみ「あつ…いらつしやいませ？…モカちゃん？」

モカ「やつほーあ、〇〇さん、こんにちは〜」

〇〇「おうモカちゃん、こんにちは」

モカ「おやおや…これはひよつとしてお邪魔でしたかな？」ニマニマ

つぐみ「違うよ？…あつ〇〇さんのデートが嫌ってわけじゃなくてその？……もう
！モカちゃん？」

〇〇「あはは、気にしなくて大丈夫だよ？」

モカ「つぐ…照れてる〜」ニシシ

〇〇「でも、相変わらず仲がいいね？二人とも」ズズー

モカ「ふふふ〜……そういえば〇〇さんは大晦日はやはり、まりなさんと二人ですご
すんですか〜？」

〇〇「ブツホ?…ゲツホ?ゲツホ?…モカちゃんいまなんて?」

モカ「ですから、〇〇さんとまりなさんは大晦日はやはり、二人で過ごすのかなくて」

〇〇「ははは?残念ながら大晦日は一人で年越しかな?」

つぐみ「え?そうなんですか?私たちてつきり、まりなさんと過ごすんだとばかり」

〇〇「あはは?残念ながら一人だよー?」

モカ「じゃあ私と一緒に過ごしませんか?」

〇〇「…きもちは嬉しいけど、やはり大晦日は家族で過ごすのが一番だからね…だから気持ちだけ受けとるよ…それに今年の大晦日は考えたい事もあるからさ」

モカ「むう…わかりました〜…」

つぐみ「(考えたい事で、なんだろう…)」

〇〇「うーん?…ああお尻に根が張っちゃったかも」

つぐみ「ふふ、このまま一緒に住んじゃいますか?なーんて♪」

〇〇「いいかもね〜…スヤア」

モカ「あらら、寝ちやつた〜」

つぐみ「疲れてるのかな、忙しいみたいだし」

カランカラン

モカ「しやせ〜」

つぐみ「モカちゃん?…いらつしや…てひまりちゃん♪」

ひまり「やつほくて、○○さんも来てたんだ…:て寝てるし?」

モカ「店のなか、暖かいからね〜:それと○○さんとつぐみが一緒に住むって〜」

ひまり「え?ええ?／＼」

つぐみ「モカ?誤解されちゃうでしょ?…違うよ?モカの悪ふざけ?…:」

ひまり「なんだあ、びっくりさせないですよ?…:○○さんいつから寝てるの?」

つぐみ「ほんのさつきだよ、よっぽど疲れてるみたい」

ひまり「いつも頑張ってるもんね…」

モカ「そうだよね」

そして数時間後

つぐみ「○○さん…○○さん」

○○「んが!?…ううん、寝ちやってたか?いま何時??」

つぐみ「夜の8時になります、そろそろ閉店です?」

○○「やば?…ガッツし寝ちやった?ごめんね?」

つぐみ「いえ?…あっお会計お願いします?」

〇〇「うん?…お代ここに置いてくね?」

つぐみ「はい、ちょうどです…〇〇さんまた来てくださいね♪」

〇〇「もちろん?…じゃね?」カランカラン…

つぐみ「…よし、後片付けしますか」

夢の回想く前編

12月30日

〇〇「あー暇だわ…今年もあと二日か…クリスマスすぎると本当早いよなあ」

ピンポーン♪

〇〇「ん？はい！…誰だろう」ガチャ

パレオ「〇〇様こんにちはー！」

〇〇「パレオちゃん、こんにちは？…どうしたの？」

パレオ「はい、○○様に先日話した例の件についてお聞きしたくて、結論は出ましたでしょうか？」

○○「例の件について……か……ごめんね、まだ出てないんだ」

パレオ「そう……ですか、わかりました！ チュチュ様には私から伝えておきます！ それでは？」

○○「うん、また……」

パレオ「では結論が出たらご連絡を？……」ボタン

○○「……はあ、結論でいったてなあ……ミュージシャン……かあ」スツ……

名刺：△△ミュージック

回想く

チュチュ 『Hei まりな月島、〇〇はいる?』

まりな 『〇〇くん? いま二番スタジオの掃除してるからそろそろ戻ってくるとおm』

〇〇 『二番スタジオの清掃終わりました。てチュチュちゃんにいらっしやい? どうしたの?』

チュチュ 『ちようどよかったわ、○○…あなた昔は歌手を目指していたみたいね』

○○ 『あーそんな時もあったなあ、まあ昔の話だよ？…でもどうしたの？』

チュチュ 『今の話しで察しなさいよ？…○○もう一度歌手を目指してみない？』

○○ 『もう一度かい？うーん、今はもうガールズバンドのこたちを輝かせるって新しい夢があるしなあ』

チュチュ 『そう…でも以前、あなたカラオケ大会？とかに出て優勝してるじゃない、あの時にあるレコード会社の社長がいてね…であなたを探してるようだったから私が知り合いなのを伝えたら伝言と名刺を渡すよう言われたってわけ』

○○ 『そうなのか…△△ミュージック？…うえ！…この名刺…本物？』

まりな 『△△ミュージックで、数々の有名ミュージシャンを排出してる事務所じゃん』

『？』

チュチュ 『本物よ、それで…どうかしら？…○○？』

○○ 『…』

チュチュ 『…あの時の歌っていたアンタは凄く楽しそうだったわ、やはり夢は簡単には捨てられないもの…アンタはどうしたい？』

○○ 『…少し考えさせてくれないかな？…』

チュチュ 『…わかったわ、アンタの選択よ…しっかり考えなさい…』

回想終わりく

○○ 「はあ…どうすりやいいんだ？…今までは勧誘が来ても断る気だった、でも思い出してしまう…あのステージでの楽しかった瞬間、高揚感…そして夢だったミュージ

シヤンの夢が目の前に……………こんなに迷う日が来るとはね？」

ピンポーン♪

○○「今度は誰だろ……………はーい！」ガチャ

香澄「○○さんこんにちはー！」

○○「香澄ちゃん、どうしたの？」

香澄「えへへく暇だから遊びに来ちゃいました♪……………あがつていいですか？」

○○「いいよ？……………いま暖かい飲み物いれるね、ヨイシヨ」

香澄「お邪魔しますす♪……………ん？」ス…

○○「ココアでいいかな？」

香澄「……あつごめんなさい？○○さん、ちよつと急用ができちやつたんで失礼しますね？」

○○「そう？……わかった、気をつけてね」

香澄「はい？」バタン…バタバタバタ…

T O b e c o n t i n u e d

夢の回想く後編

香澄 s i d e 〵

ハアハアハアハアハア!

バタン!

香澄 「有咲いる!?!…:…はあはあ…」

有咲 「香澄? てどうしたんだ? 肩で息して」

香澄 「大変なの、○○さんが…:○○さんが!」

有咲 「落ち着け？○○さんが…どうしたんだ？」

香澄 「○○さんが…C i R C L Eからいなくなっちゃうかもしれない!!」

有咲 「は？いやいや？そんなわけないだろ？香澄？笑えない冗談わ…」

香澄 「冗談なんかじゃないよ？…これみて！」 つスマホ

有咲 「たつくスマホなんか渡してどうしt…香澄、この画像は本物なのか？」

香澄 「本物だよ？…（そうだ…）」

有咲 「…△△ミュージックで超有名事務所じゃねーか？○○さん昔は歌手目指してたって話だし…香澄、この話はまだ私と香澄しか知らないんだよな？」

香澄 「うん、だから今、友希那先輩たちにも名刺の画像を送ったところ？」

有咲「……送ったのか!?!……まだ決まってもないのに?」

香澄「だ、だって? みんなの知恵も借りたいし?……あつ返事が」

蘭「香澄、それ本当?」

モカ「モカちゃん笑えない冗談は好きじゃないなあ」

ひまり「香澄ちゃん画像で本物!?!」

※長くなってしまうため省略します

紗夜「戸山さん笑えない冗談はよくありませんよ?」

香澄「冗談じゃないです?……こころん!」

こころ「ガッテンよ!……みんな私の家に来てちょうだい緊急会議を開くわ」

「こころ亭」会議室みたいな部屋」

「こころ」と、言うわけで○○引き止め作戦会議なのだけど…香澄詳しく話せるかしら？」

香澄「うん、すでに画像が回ってると思いますけど、○○さんは△△ミュージックで大きな事務所からスカウトを受けてます、○○さんはよく私たちガールズバンドを輝かせるのが夢っていつてくれてました、だけど大手の事務所からスカウトがきて揺らいでる…：：：なら○○さんが好きって言うてくれた私たちの演奏を聞いてもらうのがいいと思うんです！」

友希那「戸山さん…気持ちわかるけど、○○さんがいつ答えをだすかもわからない、明日にでも結論を出すかもしれない状況のなか、練習は出来ないし…：：集中だつて出来ないからいいパフォーマンスは出来ないわ」

紗夜「それにライブハウスだってあるかどうか…」

香澄「ライブハウスならまりなさんがC i R C L Eが空いてるって！」

蘭「いつの間にも練習は？」

りみ「一曲ずつはどうか？それなら今からC i R C L Eで練習すれば段取りとかも決めれるんじゃない？」

リサ「一曲ずつか、それなら少し無理して詰め込めばなんとか…友希那はどう思う？」

友希那「……一曲だけならなんとかかなるかもしれないわね」

紗夜「湊さん、本気ですか??」

友希那「……まあムチャかもしれないけど、それでも○○さんを引き止められるなら

…ね」

紗夜「……わかりました、少し詰めてみましょう」

彩「私たちはごめんなさい？さすがに今からじゃあスケジュール調整出来ないから？」

香澄「うん、みんなムチャいってごめんなさい？」

こころ「あら謝ってる暇はないわ、今からC i R C L E といって練習しなくちゃ…黒服さんたち」

黒服さん s 「はい、すでに用意は出来てます、皆さまこちらへ」

そしてC i R C L E

まりな「みんないらっしやい、すでに黒服さんたちから話は聞いてるよ、ステージも

空いてるから存分に練習して……」

香澄 「ありがとうございます……」

友希那 「時間が惜しいわ、ステージで段取り決めと練習をしましょう」

まりな 「私は○○くんに電話しとくね……」プルル…プルル…

○○side

○○ 「……どうすれば、みんなの笑顔と……あの時の感覚が同時に思い出す……プルル…プルル…ん？まりなさんからだ、はい…もしもし？

まりな 「あ、○○くん？実は香澄ちゃんたちが明日大晦日ライブをやるって事になつてね、明日出れないかな？いや…というか○○くんにみてもらいたいみたいなんだ」

〇〇「明日ですか?……はい、大丈夫ですよ」

まりな「ほんと!?よかつた?じゃあ明日、よろしくね?」ガチャン…ツーツー

〇〇「ライブか……しかしいきなりだな?…」

まりな side

まりな「これで大丈夫…しかし、〇〇くんも罪な男だね」

香澄たち side

ジャン♪

香澄「今のだいい感じじゃなかった?」

友希那「さつきよりはマシになったわね、でもまだまだいくわよ…そして弦巻さん？
あなたたちはオオトリよ、成功の鍵はあなたたち次第…頼んだわよ」

こころ「まかせて？素晴らしいトリを飾ってみせるわ」

薫「限られた時間の中で最高のパフォーマンスとはね、ああ…なんて夢いんだ」

ミッシェル「はい、練習に戻ろう…本番は明日だよ」

花音「そうだね、こころちゃん練習に戻ろう？」

こころ「そうね…さあみんな、沢山練習しましょう？」

香澄「うん？…みんな、絶対成功させましょう！」

「「おー！」」

そして運命の日がやってくる

12月31日〜大晦日〜

C i R C L E控え室〜

香澄「うう緊張してきた？」

友希那「ここまで来たら全てぶつけるだけよ、○○さんも見てる…」

蘭「○○さんはスタッフとして…だけどね、でも○○さんはいつも私たちの演奏を褒めてくれる」

モカ「演奏の後に飲み物の差し入れもしてくれてるよね〜」

「こころ「それに凄く笑顔だわ？」

ひまり「だから今日のライブは絶対成功させなきゃね?…えいえいおー?」

「「……」」

ひまり「なんでー?」

モカ「お約束お約束」

まりな「そろそろ始まるよ?…ポピパのみんな準備はいい?」

香澄「はい?…じゃあみんな行こう!」

有咲「うし、やるか」

たえ「頑張ろう」

りみ「○○さんに伝わるかな、私たちのメッセージ」

沙綾「伝わるよ、きつと…さっ、行こう」

香澄「それじゃあ行くよ？ぽびば、びぽば、ポピパパびぽばー!!」

ステージく

きやあああ！

香澄「皆さんこんにちは？今日は大晦日スペシャルライブに来てくれてありがとうございます
ございます？それじゃあ聞いてください、Step×Step…く♪」

きやあああ？

香澄「ありがとうございました？続いてはAfterglow?」

きやあああ？

蘭「みんなこんにちは？…今日はありがとう…それじゃ聞いて…いつも通りのB r a
n d n e w d a y s」

きやあああ？…

蘭「ありがとう？続いてはR O S e l i a」

きやあああ？

友希那「…みんな今日は大晦日ゲリラライブに来てくれてありがとう？それじゃあ
さっそく聞いて…H E R O I C A D V E N T U R E」

♪

きやあああ?…

友希那 「聞いてくれてありがとう? さて、このライブも次で最後になるわ」

「ええー」

友希那 「それじゃトリはこのバンドよ、ハローハッピーワールド」

きやあああ?…

「こころ 「みんなー? ハロー」

「はろー?」

「こころ 「それじゃいくわよ、ハッピーラッキースマイル?」

「イエーイ?」

「こころ「みんな、凄く素敵な笑顔よ？それじゃあ聞いて…キミがいなくちゃっ！」

きやあああ？

○ ○ s i d e

○ ○ 「…みんな相変わらず凄いな…さっ最高に輝かせないとな？…」

♪

きやあああ？

「こころ「みんな聞いてくれてありがとう？…それじゃ最後に…今日のバンドメンバーたちを紹介するわね♪みんなーあがってきて？」ゾロゾロゾロ

香澄「ええ今日は突然のゲリラライブにも関わらず、遊びにきてくれてありがとう？」

：以上を持ちまして大晦日スペシャルライブは終わりです、本当にありがとうございます、ごさいますか？」

「以上を持ちまして、大晦日スペシャルライブは終わりです、帰りのさいは混雑が予想されますので、後方より順番に退場していただいています、…走りまస్తు思わぬ事故につながる恐れがあるので、走りませんようお願いします」

控え室へ

香澄「疲れた」

友希那「ライブ中、チラツとだけけど○○さんが見えたら、凄く楽しそうだったわ」
チユチユ「Heiみんな、今日のライブは素晴らしいライブだったわ、この私をここまで感動させるなんてね…ライブ前だと水を差すから言わなかったけど…今から言うわ、○○はいま、△△ミュージックという事務所からスカウトされてる…まあ知ってるとは思うけど…○○がどんな答えを出そうと、その時は受け入れなさい！…邪魔したわ

ね」スタスタ

りみ「そっか、私たちの思い通りいくとはかぎらないもんね」

紗綾「しかし、私たちは全力を出しきりました、そのお陰でお客さんたちにも喜んでもらえましたし」

こころ「くよくよしても仕方ないわ、後は〇〇次第よ」

〇〇side〜CIRCLEロビー

〇〇「……みんな凄かったなく……それに……ふふ、そうだよな……決まったよ答えが」

まりな「そっか……」

〇〇「少し電話してきます」

まりな「了解」

休憩室

〇〇「プルル…プルル…」

「はい、~~×~~ですが…」

〇〇「もしもし…〇〇と言います」

「あつ…お電話ありがとうございます…それで返事のほうは？」

〇〇「はい、お気持ちはありがたいのですが僕には、いまの仕事が続ける事にしました…今の仕事が好き…今日それを再確認出来ました？…」

「…わかりました、では機会があればその時は」

〇〇「はい、失礼します……さて、香澄ちゃんたち労いにいきますか」

控え室

〇〇「みんなお疲れ様」

香澄「あの〇〇さん、大手からスカウトを受けてるって聞きました！……その……〇〇さんはどうしたいですか？」

〇〇「いつそれを？……断ったよ、さつき断りの電話をいれてきた」

あこ「ということは、〇〇さんこれからもC i R C L Eにいてくれるんですか??」

〇〇「うん？君たちのライブをみて改めて確認出来た、やっぱり僕は君たちを精一杯輝かせたい……てね」

有咲「しかし、まさかゲリラでライブする事になるとは思わなかったぞ？」

紗夜「ええ、見事振り回されましたね」

こころ「あら、でもお陰で楽しいライブが出来たわ？」

花音「あははは？」

〇〇「僕も昨日電話来たときは驚いたけどね？……でも皆のおかげで、どつしりと大晦日を迎えられる、ありがとう？」

まりな「みんな、そろそろいいかな？」

紗夜「はい、いま出ます今日はこの場を貸していただきありがとうございます？」

「「「ありがとうございます？」」」

ロビー

まりな「みんな今日はありがとう?…さっ帰りは気をつけて帰ってね」

こころ「大丈夫? 黒服さんたちが皆を送ってくれるわ…さっいきましよう?」

〇〇「じゃあみんな、お疲れ様…よいお年を?」

香澄「〇〇さん、また来年?」

有咲「〇〇さん…また迷った時は今度は相談してくれよな…その…」

たえ「有咲プロポーズみたい」

有咲「ななな／＼なに言ってんだ!?!／／」

沙綾 「あはは、有咲かお真っ赤か…さっそろそろ行こう〇〇さんまいいお年を？」

りみ 「〇〇さん、またね？」

〇〇 「うん、また」

紗夜 「私たちも失礼しましょう」

友希那 「そうね…残ってるのは私たちだけみたいだし」

リサ 「そうだね、じゃあ〇〇さん、まりなさんまた来年？」

まりな 「うん？気をつけてね」

〇〇 「また来年？」

あこ「またねー？」

燐子「お二人ともよいお年を、今日はありがとうございました？」

〇〇「うん、よいお年を」

まりな「道中気をつけてね？」

そして全員が帰っていった。

〇〇「じゃあまりなさん僕も失礼します」

まりな「お疲れ様？気をつけ帰ってね」

〇〇「はい？ではまりなさん、よいお年を？」

大晦日、一年を振り返って

〇〇「今年もあと一時間か…早かったなあ」ピンポーン♪

〇〇「ん？誰だろう…はーい」ガチャ

まりな「こんばんは♪」

〇〇「まりなさん？こんばんは♪…あがつてください」

まりな「うん？お邪魔します…いやあ、今年もあと一時間かあ〇〇くんはどうだった？一年を振り返って」

〇〇「まああつという間の一年でしたね…でも楽しい一年でした」

まりな「そっか…私もあつという間だったなあ、ねえ来年はどんな一年にしたいかな？」

〇〇「まあ来年もガールズバンドのこたちを輝かせたい…ですね？」

まりな「そっか…〇〇くんらしいしといえよ〇〇くんらしいね？じゃあ私は〇〇くんといま以上の関係になりたい…：にしようかな？」ズイ

〇〇「え…えーと、酔ってます？／／」

まりな「ううん、素面だよ？…：なーんて、冗談♪」

〇〇「もう／／…」

まりな「〇〇くん、反応が可愛いからつい…ね♪…でも次言うことはほんとのこと、〇〇くん」

○○「はこ」

まりな「来年もよろしくね♪」

○○「はい？よろしくお願いします？」

○○「さっ…飲みましょう？…」

まりな「うん？…とと、じゃあはい○○くん」

○○「はい？いただきます…とつとと…乾杯？」

まりな「乾杯♪…コクツ、はあ…来年はどんな一年になるんだろう」

○○「それはわからないけど、素敵な一年にしたいですね？…コクツ…」
「ゴーン…ゴーン

ン

まりな「あつ…除夜の鐘」

〇〇「これ聞くと、いよいよ…て感じがしますよね？」

まりな「そうだね…そろそろテレビでもカウントダウン始まるんじゃないかな？」

〇〇「ですね、つけましようか」ピッ

ゴーン…ゴーン

大晦日の夜、除夜の鐘が町に鳴り渡り年明けが、一刻と近づいてくる

まりな「二分切ったよ？…」

〇〇「いよいよですね？まりなさんカウントダウンの準備はいいですか？」

まりな「もちろん？わあ二分半きつたー？」

テレビからはカウントダウンの数字が下がっていき、これも一年の最後を思わせる

〇〇「一分切りましたよ？」

まりな「いよいよだね？……」

〇〇「まりなさん、来年もいっぱいC i R C L Eを盛り上げていきましょう！」

まりな「うん？沢山盛り上げていこうね？」

二人は来年のことを近いながら、カウントダウンを進めていく…来年の一年はどうなるか？

きつと楽しい一年になるだろう

〇〇「いきまよ？・10！

まりな「9！」

〇〇「8！」

〇〇「7！」

十秒をきりいよいよ新年が幕をあける、この後は新年挨拶で忙しくなるだろう

しかし〇〇やまりなたちはその忙しさもきつと嬉しい忙しさだと感じていると思う

年が明けてく

○○「うーん？朝か……て、昼過ぎてるじゃん？……とりあえずお餅食べるか」
ブウウウ…チン♪

○○「焼けた焼けた♪いただきます…うん美味しい♪……食べたら散歩にでもいくか」

数分後く

○○「冷えるな？……暖かい飲み物買ったら帰ろつと？」

コンビニく

リサ「いらっしやいませ〜？」

リサ「しやせ〜」

〇〇「こんにちは〜寒いね？」

リサ「〇〇さん、いらっしやい？冷えるね〜」

モカ「いつしよに肉まんはいかがですか〜？」

〇〇「モカちゃん、早い早い？……でも肉まんも買おうかな、あとはホットミルク
ティーをいつしよに」 トン

リサ「ありがとうございます♪……全部で250円になります？」

〇〇「じゃあちようどで？」

モカ「ありがとうございます……所で○○さんは今日はこのあとどうしますか？」

○○「ん？まあ……この後は家で寝正月かな」

リサ「いいなー、そういうえばC i R C L Eていつからでしたっけ？」

○○「C i R C L Eは5日から始まるよ、初日は早めにかかないといけないし……うう？」

リサ「大変そうですね？頑張ってください？」

○○「うん頑張る？」

○○「それじゃあそろそろ帰るね、リサちゃんたちも頑張ってる？」

モカ「ありがとうございます」

リサ「ありがとうございます？頑張ります♪……」

○○「じゃね？……」

道中

はぐみ「あつ……○○さん？こんにちは！」

○○「はぐみちゃん、こんにちは！……お使いかい？」

はぐみ「ううん、散歩してたんだ？○○さんはなにしてたの？」

○○「僕はコンビニの帰りかな、寒いから暖かい飲み物買った帰り」

はぐみ「そうなんだ？……」

○○「とっ…じゃあそろそろ行くね」

はぐみ「うん、じゃあね」

○○「それじゃ」

再び帰り道

○○「ううく冷えるなあ」

香澄「あつ…○○さん？」

あこ「こんにちは」

○○「おつ、あこちゃんに香澄ちゃん…珍しい組み合わせだね？」

あこ「さつきそこでバツタリあつたんです♪」

香澄「寒いねくて話してたんですよ…○○さん」

○○「なにかな？」

香澄「隙あり」ピト

○○「ひゃあああ!?!…香澄ちゃん?なにをするの?」

香澄「いやあ、隙だらけだったのでつい」

あこ「凄い反応でしたね?…あつなに買ったんですか?」

○○「ん?ああ、コンビニで飲み物買ったんだ」

香澄「わあ温かい…私もなにか買ってこようかな」

○○「それがいいと思うよ、冷え込むから?……それじゃあそろそろ帰るね?二人も道中気をつけてね」

あこ「はい?」

○○「じゃね♪」

そして自宅へ

○○「今日は知り合いによく会ったなあ、えーと…鍵…鍵…あつた、」ガチャ

まりな「あつ…○○くん?いま帰ったの?」

○○「まりなさん、こんにちは?はい、いま帰った所です」

まりな「そつか…あがつていいかな?お餅持ってきたんだ♪」

○○「もちろんいいですよ？…あがってください？」

まりな「おじやまします？」 バタン

マスキングとケーキ作り

〇〇「ズズー……ええと材料は……ふむふむ」

ますき「ん？あれ、〇〇さんじゃん……なにしてんだ？」

〇〇「うん？……ますきさん、いやねケーキ作りに挑戦してみようと思ってね材料と作り方を調べてたところ」

ますき「ケーキか……じゃあ私も一緒にいいか？……〇〇さんケーキ作りの経験は？」

〇〇「まだホットケーキしか作ったことないかな？」

ますき「それじゃあたしが教えてやるよ、初めてならインストラクターいた方がいい

からな」

〇〇「いいのかい？それじゃ、お願いしようかな♪」

ますき「よっしゃ…都合のいい日ていつだ？」

〇〇「今週の土日はどっちも空いてるけど…どうかな？」

ますき「じゃあ今週の日曜日いいか？」

〇〇「大丈夫？じゃあ日曜日、材料はこっちで用意しとくね」

ますき「さんきゅー…じゃあ日曜日な」

〇〇「うん？…さて、ケーキにあう飲み物は…」

数分後

〇〇「結構な荷物になりそうだな?……しやあない車出すか」

〇〇宅

〇〇「えーと、車と家の鍵は…あつた?……よししつかりしめて」キュルル…ブオン

〇〇「出発〜♪」ふおおお〜

道中

〇〇「〜♪おつ…あれは…やつ♪」

香澄「え……てつ〇〇さん?…わあ可愛い車ですね、乗ってもいいですか?」

〇〇「あーごめんね?この車、一人しか乗れないんだ?…」

香澄 「えー?…でも二人乗れそうですよ?…」

〇〇 「まあね?でも二人乗りすると違反になっちゃうんだ?だからごめんね」

香澄 「むう…それはそうと、何処かいくんですか?」

〇〇 「うんスーパーに買い出しにね…とっそろそろ行かなきゃ、じゃあ香澄ちゃん、気をつけてね」

香澄 「はい?〇〇さんも気をつけて!」

〇〇 「うん、それじゃ!」

ふおおお

スーパー

〇〇「先ずは小麦粉と…バター、牛乳、砂糖に…こ、香料と…卵、生クリームか…おつと、イチゴを忘れるとこだった、材料はこれくらいかな…よし、レジいくか」

「いらつしやいませ?…全部で□□□円になります」

〇〇「では丁度で」

「丁度いただきます…ありがとうございます?」

再道中

〇〇「いやあ車できてよかった?…さっはやく帰らないとな」

〇〇宅

〇〇「ううゝ寒い寒い…ただいま」ガチャ…バタン

そして日曜日

ピンポーン

〇〇「はいはい……おっ……ますきさん、いらっしやい？」

ますき「よっ……さっ早く始めようぜ？」

〇〇「だね？……それじゃ先生、お願いします」

ますき「なんか照れるな／＼……それじゃさっそく小麦粉をボールに入れてくれ」

〇〇「了解？」

※その他の過程は事情によりすつ飛ばします

ますき「そしたら、後はオーブンで焼くだけだ、入れて…28分かん待つ、よし…待つ間にホイップクリーム作っちゃおう」

○○「はい？先生」

ますき「まずは氷水をいれてその上にボールを置いてくれ、置いたらボールに生クリームと砂糖を入れてハンドミキサーで泡立てる」

○○「オーケー」カシャカシャカシャ…

ますき「少し緩いくらいになったら冷蔵庫で冷やす…これでクリームは完成だ」

28分経過

ますき「そろそろ焼き上がる頃だな…出してみようぜ」

〇〇「だね?……おお綺麗に焼き上がったよ?」

ますき「それじゃクリームを塗ったらイチゴを乗せて、完成だ?」

〇〇「わあ…美味しそう?」

ますき「なかなか上手く出来たな?……しかし二人だとちよつと多いな」

〇〇「よかった持ち帰る?一応、ドライアイスとかもあるからさ」

ますき「じゃあそうするよ…後は…箱があれば」

〇〇「それも大丈夫…こんなこともあるかと思つてね」

ますき「〇〇さん…ケーキ屋でもはじめるつもりなのか?汗」

○○「いやいや、ただ持ち帰る用のは一応用意しとこうと思ってさ……よし切り分け完了！」

ますき「じゃあ持ち帰り用のは箱に入れとく」

○○「うん？こつちも分け終わったよ、それじゃ手を合わせて…」

「いただきます♪」

紗夜さんとギター演奏

ジャーン♪……

〇〇「……ふう、久しぶりにさわったなギター、やっぱり楽しいや」ガチャ……

紗夜「〇〇さん？」

〇〇「ん？おお、紗夜ちゃん？どうしたの？」

紗夜「〇〇さんがギターを引いているのを見かけたものですから、ギターは長いんですか？」

〇〇「ギターはそれなりに長いかな、中学の時にあるギタリストの演奏を見てさ……

それがギターを始めるきっかけになったんだ」

紗夜「そうですか……でもさつき少し聴いたのですが、お上手でしたよ？ 私……お世辞は言いません」

〇〇「ありがとうございます？ 紗夜ちゃんにいつてもらえると自信がつくよ？」

紗夜「私も練習まではまだ時間がありますし……よかつたら一緒に弾きませんか？」

〇〇「一緒にかい？ もちろんいいよ？」

紗夜「ありがとうございます？ では合わせるので、音のほうお願いできますか？」

〇〇「オーケー？」 ジャーン… ジャーン… ジャーン♪

紗夜「ありがとうございます？ では…曲はどうしましょう？」

○○「曲は……~~×~~にしようか」(好きな曲を想像してお楽しみください)

紗夜「では……それでいきましよう?」

ジャーン♪……

○○「くうくうなかなかよかったんじゃない?」

紗夜「ええ……凄くいい感じでした、もう少し演奏しませんか?」

○○「いいね?……よしじゃあ次は○○、いってみようか」

紗夜「わかりました？では…」

ジャジャーン

紗夜「…：…凄くいい感じでした？」

〇〇「誰かこうして弾くのも、いいよね？それより紗夜ちゃん、時間大丈夫？」

紗夜「あつ…：そろそろ時間ですね、では〇〇さん…：また今度いつしよに弾きましょう」

〇〇「うん？練習頑張つて！」

紗夜「はい？それでは…：ギイ…：バタン

〇〇「さて…：ソロ演奏再開といきますか」ジャジャ…

紗夜 side

ジャーン♪…

あこ「うううすつごくよかった？」

リサ「だね〜特に紗夜：絶好調だったじゃん：先に来てたし、自習連でもしてた？」

紗夜「そんな所です」

友希那「流石ね、でも無理はだめよ？」

紗夜「はい、そこはもちろん：さっとお喋りは終わりにして次いきましよう」

友希那「ええ…ではさっきの曲をもう一度」

紗夜「はい…」

○○side

ジャーン♪…

○○「……ふう、しかし…やはり好きな楽器を演奏するのは楽しいよなあ……さつ…
今日は心行くまで演奏するぞ？」ジャーン♪…

数時間後く紗夜side

紗夜「……今日はここまで、ですね」

友希那「あら…もうこんな時間なのね…今日はここまで各自、自習練習を怠らないよ
うに」

紗夜 「では…私は先に失礼します」

リサ 「お疲れ〜♪」

○○ side

○○ 「…もうこんな時間か、あと少ししたら帰るか」ガチャ…

紗夜 「○○さん、よかったまだいましたか」

○○ 「紗夜ちゃん…練習はもう終わったのかい？」

紗夜 「はい？…もう帰るところなのですか？」

○○「うん、あと2く3曲弾いたら帰ろうかなって思ってたところ」

紗夜「ではまたいつしよに弾きませんか?…」

○○「いつしよにかい?もちろんオーケーさ?」

紗夜「では失礼します…それではいきましよう?」

○○「オーケー♪」

ジャ〜ン♪…

紗夜「いいセッションが出来ましたね?」

〇〇「そうだね?……そろそろ帰ろうか」

紗夜「はい?では出ましょうか」

〇〇「うん?……外も暗いだろうし送ってくよ」

紗夜「ありがとうございます?」ギィ…バタン

まりなさんの膝枕

〇〇宅へ

〇〇「……よし、終わりました！」カタカタカタ……タン！

まりな「こつちも終わったよー？」カタカタカタ……タン！

〇〇「お疲れ様でした！いやあ、なんとか終わりましたね〜」

まりな「そうだねえ、一時はどうなるかと思つたよ〜」

〇〇「ははは？……ふあ……すいません？」

まりな「朝早かったもんね?……少し寝る?」

〇〇「うーん……お言葉に甘えますね?……」

まりな「うん?おもいつきり甘えて?」ポンポン

〇〇「まりなさん?それは……?」

まりな「ん?今日のお礼?膝枕させてほしいなあ……なんて」

〇〇「でも……僕……見た目より思いですよ?」

まりな「大丈夫?これでも鍛えてるから♪さっさ、寝っころがって?」

〇〇「では……お言葉に甘えて」ゴロン

まりな「ふふ、どうかな?」

○○「なんか……照れますね／＼……でも……寝れちやい……そ……zzz」

まりな「……寝ちやったか、いつもお疲れ様？……いっぱい頑張ってくれてありがとうね？」

○○「スー……スー……」

まりな「○○くん無理はだめだよ？……ふあ……私も眠くなっちゃった、私も少し寝よつかな……スヤア」

数時間後

PM18:50分

まりな「クシツ……ふあ……わっ？外真っ暗、いま何時……わあ？○○くん起きて？七時近いよ？」

○○「ううん……ふあ、おはようございま……す……うわああ？大分寝ちやつた？」

まりな「あはは？私も結構寝ちやつた？、とりあえず夕飯買いに行こうか」

○○「ですね？……とりあえずコンビニいきましよう？」

まりな「うん？」ガチャ……バタバタ……プオオッ

数分後ー

プオオ……キイ……ガチャ……ガチャ……バタン

〇〇「ただいまくて…誰もいないけど？、あつお弁当温めますね」

まりな「お願い？…あつ飲み物テーブル置くね」

〇〇「お願いします？」

数分後

〇〇「よし、手を合わせて」

「いただきます」

まりな「うーん…美味しい？」

〇〇「このカルボナーラも美味しいです？…そうだ、まりなさん」

まりな「ん？なにかな？」

〇〇「今日はもう遅いですし、泊まっていつてくださいますか？」

まりな「ふふ、それって今日は帰したくないってやつかな？キヤー（ //▽// ）」

〇〇「……ふふ、そうだとしたらどうしますか？」

まりな「あらら、私もまだ捨てたもんじゃないなあ♪……」

〇〇「でも……一緒にいたいのは本当ですよ、こうして誰かと食べるのは家族以外は初めてですし」

まりな「そっか……じゃあ今日はお姉さんと楽しい夜にしよう♪」

〇〇「はい？」

食後

まりな「ちよ？きや…やああ？」カチャカチャ

○○「ふふ…それ」カチャカチャカチャ…タタン！

／KO！パーフェクト！／

まりな「○○くん強すぎるよ」

○○「ふふ、やりこんでいますからねえ♪もう一戦しますか？」

まりな「いや、次はクイズゲームで」

○○「よっしゃ！じゃあセットしちやいますね」

まりな「次は負けないよ」

数分後

まりな「……負けた泣」

○○「イエーイ」

まりな「悔しい？ パーフエクト負けだよ汗、次は負けないよ？」

○○「ふふ……何時でも受けて待ちますよ？」

まりな「リベンジしてみせる？……そろそろ寝よつか」

○○「ですね？ 布団敷いちゃいますね」

まりな「でも……布団で」

○○「大丈夫？ お客さん用がありますから？」

まりな「そつか?…手伝うよ?枕や掛け布団とか」

〇〇「ありがとうございます?お願いします?」

そして布団も敷き終わり

〇〇「まりなさん…今日は泊まってくれてありがとうございます?」

まりな「私こそ…ありがとうございます?休日返上してまで仕事手伝ってくれて」

〇〇「まあ基本、休日は暇ですから?…明日からもまた頑張りましょう」

まりな「だね?ふあ…それじゃ〇〇くん、おやすみ?」

〇〇「おやすみなさい、まりなさん?」

彩ちゃんからのバレンタインチョコ

2月14日C i R C L E

彩「こんにちは〜？」

まりな「あつ、彩ちゃん？いらつしやい♪どうしたの？」

彩「あの、○○さんは今日は来てますか？」

まりな「○○くんなら来てるよ？…今は一番スタジオの掃除してるところ、待つように言おうか？」

彩「お願いします？」

まりな「オーケー♪じゃあちよつと待っててね」カチャ

○○「まりなさん、どうしました？」

まりな「あつ○○くん、いまから彩ちゃんが一番に向かうから待っててくれるかな？」

○○「はい、わかりました？」ガチャ

まりな「お待たせ？それじゃ…頑張つて？」

彩「はい？…いってきます♪」

一番スタジオ

彩「○○さん、こんにちは？」

○○「彩ちゃん？いらつしやい！どうしたの？」

彩「今日はバレンタインじゃないですか、だから…これ、チョコです／＼」

○○「彩ちゃん…ありがとう？凄く嬉しいよ」

彩「えへへ／＼手作りなんですよ♪」

○○「おお？ますます嬉しいよ？…食べていいかな？」

彩「はい♪」

○○「いただきます？…うん、凄く美味しいよ？…これクルミかな？」

彩「はい♪クルミを砕いてまぜて、醤油を少し入れたんです♪コクがでるって聞いた

んです」

○○「そうだったのか、このコクの正体は」

彩「気に入ってもらえたみたいで嬉しいです?」

○○「本当ありがとうね? そういえば今日はお仕事はお休みなのかい?」

彩「はい♪……まだ時間は大丈夫ですか?」

○○「大丈夫?……まあ大丈夫じゃなくても……ね」

彩「いやいや? それはマズイですよ?」

○○「ははは! ジョーク♪ ジョーク♪……まああと5分は話せるよ?」

彩「もう?……でもあと5分あるならよかったです?……ちなみに家にはついていてもいいですか?」

〇〇「家にかい？もちろんいいよ？…家ではいっぱい話そう！」

彩「はい♪…今から楽しみだな」

5分後

〇〇「あつ…そろそろ行かないと？」

彩「ホントだ？じゃあ〇〇さん、また」

〇〇「うん？また後で？」ガチャ…バタン

ロビー

まりな「あつ…おかえりなさい？」

〇〇「ただいま戻りました?…久しぶりに話せてよかったです?」

まりな「いっぱい話せたみたいだね♪…ちなみに、キスはしたの?」

〇〇「ぶつ?してないです?…:我慢しますよ仕事中は?」

まりな「つまり工作中じゃなかったらしてたと…若いね、今を大切にしないとだめだよ?」

〇〇「はい?…:さて元気ももらえたいし頑張ります!」

まりな「フアイター!」

数時間後〇〇宅

彩「おじやましまーす♪」

〇〇「いらっしやい♪…寒かったでしょ、温かい飲み物入れたよ？」

彩「ありがとうございます？…：…隙あり♪」ピト

〇〇「ぎゃあああ？…：…冷たいよ？」

彩「ふふ、隙だらけの人みるとやりたくなりませんか？」

〇〇「まあなるけどさ？…：…まあ玄関で話すのもあれだし上がってよ」

彩「はーい♪…：〇〇さん、今日はいっぱい話しましょうね♪」ゴソゴソ…スタスタ

〇〇「もちろん♪沢山話そう？」スタスタ…キイ…：…パタン

近づくと春は去りゆく冬

3月某日

○○ 「♪おっ……タンポポか、それにあつちの家の庭からは梅の花も見える……春だね」

六花 「……あつ○○さん、こんにちは？」

○○ 「六花ちゃん……こんにちは？今から練習かい？」

六花 「はい？○○さんは今から出勤ですか？」

○○ 「いや、今日は休みだけど暇だからぶらぶらしてたところ、そしたらタンポポや梅の花が咲いてるのを見てね……春だなあと思ってさ」

六花「確かに、暖かい日もふえてきたし…いよいよ春かあ、て…練習遅れてまう？じゃあ○○さん、また？」

○○「うん、練習頑張つてね？」

六花「はい？じゃあ…」パタパタパタ…

○○「…：…♪そうだ、コンビニで飲み物でも買って公園で日向ぼっこしていきますか…」

コンビニ〜

「いらっしやいませ〜」

〇〇「紅茶とどら焼と漫画本もカゴに入れて……すいませーん」

「いらっしやいませ、どら焼が一点、紅茶が一点、漫画本が一点……全部で800円になります」

〇〇「では千円からで」

「千円のお預かりですね……200円のお釣りです、ありがとうございます？」

道中

〇〇「ベンチ空いてるかな……と、着いた着いた」

公園

〇〇「おっ、ベンチ空いてる♪ヨイショ……うーん♪いい天気だ」パキ……カラカラ……コク……

数時間後

？「ーん……さん、〇〇さんてば？」

〇〇「zzz……んが？ふあゝおはよう六花ちゃん」

六花「もうこんばんはの時間ですけどね？……ずっと寝てたんですか？」

〇〇「そうみたい？……うう、冷えるな？すっかり暗いし、六花ちゃん家まで送るよ」

六花「悪いですよ？……冷え込みますし？」

〇〇「なあに遠慮しなさんなって…よしっ…それじゃあ銭湯いくから、そのついでつてのはどうかな？」

六花「そ、それなら?……じゃあいきましようか?」

○○「行こう?」

道中

六花「うう、冷えるなあ」

○○「3月とはいえ、まだ春先だからね?……まあ春は夜も冷えるけど?」

六花「でも……やはり早く春本番になってほしい?……と、着いた?……じゃあ○○さん私はこれで」

○○「うん、僕はお風呂入ってから帰るよ、練習お疲れ様?」

六花「は、はい?……では」パタパタパタ……

○○「さて……すいませーん」

旭湯く

○○「はあ…暖まるく…」

数十分後く

○○「はあ…さっぱりした？」

六花「あつ、○○さん？今日はありがとうございました？」

○○「どういたしまして？…それじゃ僕は帰るね、お仕事頑張つて！」

六花「はい？ありがとうございました♪」

帰り道く

〇〇 「はあ…星が綺麗だなあ、さて明日からまた頑張りますか？」

季節は冬から春へ～

C i R C L E

〇〇「うーん♪…いい天気だなあ」

まりな「そうだね、こういういい天気の日はどこかお出かけしたくなるよね」

〇〇「ですね…そうだ、今度の日曜日何処か出掛けませんか？」

まりな「いいね？行こう行こう？」

〇〇「やった？日曜日が楽しみだ♪」

そして迎えた日曜日

C i R C L E 前へ

まりな「そろそろつく頃かな?…」

ブオン…ブロロロ

〇〇「お待たせしました? さっ乗ってください」

まりな「おじやまします?」ガチャ…ボタン

車内へ

まりな「どこに行く?」

〇〇「とりあえず、お昼いきましよう♪」

まりな「あつそれなら景色のいいところで食べない？お弁当作って来たんだ」

〇〇「おお？じゃあ景色のいいところいきましよう♪」ブオン…ブロロロ

移動道中

〇〇「晴れてよかったですね？お出かけの日に曇つてると結構凹みますし」

まりな「そうだね、それに春とはいえ、曇つてるとちよつと肌寒いし」

〇〇「わかります、僕の場合そういう時は一人だったら予定を変更しちゃいますね」
キィ…

まりな「私もそうするかも、せつかくお出かけするならやはり晴れてるときのがいい

もんね」

〇〇「ですね〜あつ、コンビニで飲み物買いましょうか」

まりな「賛成？」

コンビニ〜

〇〇「飲み物なににしようかなあ」

まりな「私は麦茶にしようかなあ」

〇〇「ああ、僕も麦茶にしようかな…じゃあレジいきましよう一緒に払っちゃいますね」

まりな「悪いよ？」

〇〇「お弁当のお礼です？ すいませーん」

「いらっしやいませ、麦茶が二点で216円です」（軽減税率適用のため）

〇〇「では丁度で」

「丁度でいただきます？ ありがとうございます？」

再び移動道中

〇〇「とりあえず峠のほういつてみましょう」

まりな「いいね、今日は天気もいいから遠くまで見渡せそう♪」

〇〇「僕の特クを見せてあげますよ♪」

まりな「安全運転でね？」

○○「もちろんですよ♪」

峠く

○○「とりあえず駐車場までは車でいって、そこからは歩いて行きましようか」

まりな「てことはハミニハイキングだね？今日みたいな日はきつと気持ちいいだろうなあ」

○○「きつと気持ちいいですよ♪と…駐車場着きましたよ？」キイ…ガチャバタン…
バタン

まりな「お弁当と飲み物持ったよ？じゃあ頂上目指して出発く♪」

〇〇「頂上までは徒歩で55分だそうです、行きましようか」

まりな「うん?…風が気持ちいいね」

〇〇「ですね、絶好のお出かけ日和ですよ」

まりな「頂上はもっと気持ち良さそう♪さっ目指して歩こう♪」

頂上へ

〇〇「おお?…いい景色だ♪」

まりな「本当だ♪それじゃあ早速、お弁当広げて食べよう♪いっぱい作ったから遠慮しないで?」

〇〇「おお?美味しそう…」

まりな「はいお茶?…ふふ♪それじゃあ手を合わせて」

「いただきます?」

○○「…うーん?美味しい♪」

まりな「ほんと!?よかった?」

○○「このハンバーグも凄く美味しいです?」

まりな「どれも自信作なんだ?…いい天気だね」

○○「ですね?…夜景とかも綺麗なんだろうなあ」

まりな「確かに…でも私たちのいまの格好だと夜は冷えるかも?」

〇〇「間違いなく冷えますね?…夜景は夏とかのいいかもかもしれません?」

まりな「じゃあ夏になったらまた来よう♪」

〇〇「はい?…さっ食べましょう?」

まりな「だね?…うん、美味しい♪」

数時間後

〇〇「クシツ…うう冷えてきたな?…まりなさんそろそろ帰りましょうか」

まりな「クシユ…だね?…じゃあ帰ろうか」ガチャバタン

〇〇「うう…寒い?」ガチャ…バタン

車内

〇〇「じゃあ……まりなさん家まで送っていき……まりなさん？」

まりな「……突然驚かせてごめんね、でももう少し〇〇くんといたいな、駄目……かな？」

〇〇「……いえ、まりなさんがそうしたいならいくらでも一緒に居ますよ、それじゃあカラオケでも行きましょうか」

まりな「うん？ 行こう♪」

〇〇「じゃあ出発？」ブオン！ブオッ